

バカ女とテストと召喚獣

53860

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文月学園のバカ女こと吉井明奈がバイオゴリラ、外道男の娘、ムツツリと繰り広げるハートフル・ストーリー。

『バカとテストと召喚獣』の主人公・吉井明久がもし女の子だったら、というお話です。多分、百合です。

バカテスト性転換モノもつと読みたいのですが、ハーメルンだと新規供給が中々ないので、カクヨムにも投稿しました。

目次

バカ女とFクラスと直談判	1
バカ女とDクラスと試験召喚戦争	12
バカ女とAクラスと再会	30
バカ女とAクラスと5本勝負	43
ゴースト オブ バカ	59
バカ女と姉と三者面談	70
バカ女とFクラスと覚醒	82
バカ女とBクラスと殲滅戦	92
バカ女と親友と宣言	103
鉄鍋のバカ	114
バカ女と清涼祭とキマシタワー	125
バカ女とメイド喫茶とロリータ	136
バカ女と試験召喚大会と親心	149
バカ女と第3回戦と自問自答	162
姉と瑞希と正義の果实	175

バカ女とFクラスと直談判

「ドーはドーピングのドー。レーはレーシックのレー」

桜咲く4月、スキップをしながら文月学園に登校するご機嫌な少女がいた。彼女の名は吉井明奈、栗毛色のロングヘアとカチューシャがトレードマークの女子高生だ。

二重の瞼をぱちぱちとまばたかせながら、満面の笑みを浮かべ歩いている。大きな瞳はきらきらと輝いており、新学年が始まることへの大きな期待が感じられる。なお、明奈は寝坊しているため、周囲に登校している生徒は他にいない。

「ミーはミースドールのミー。ファアはファンケルのファア」

「遅刻をしているのに妙ちきりんな歌を歌って。随分と楽しそうだな吉井」

「あ、鉄人！おはようございまあーす」

「ちゃんと西村先生と呼びなさい」

校門の前で仁王立ちしている筋肉モリモリマッチョマンは西村先生。トライアスロンが趣味であり、その圧倒的なフィジカルから鉄人と呼ばれている。

「ほらクラス分けの結果だ。しっかりと確認しておけ」

「はい、ありがとうございます！えへへ」

大きくため息を吐くと西村先生は、明奈に一通の封筒を差し出した。封筒を受け取ると明奈はいそいそと緋はじめる。なかには、今年からのクラスが書かれた書類が入っていた。

「実は私、振り分け試験が結構よく解けたんですよ。だから、ちよっぴり自信あるんですよね」

「ほう……そうかそうか」

文月学園では振り分け試験の結果に応じてクラスが決まる。成績優秀な生徒はAクラスに、成績が悪い最底辺層はFクラスに分けられるのだ。また上位クラスほど恵まれた教室環境で学習できるという。

「それなら安心したぞ。吉井よ、俺はお前のことをバカなんじゃないかと思っていた」

「やだなー鉄人つたら〜！とんだ節穴じゃないですか。私はちよつとお茶目でドジなだけですよー！」

「ああ、そうだな」

西村先生と笑いあいながら封筒の中に入っていた書類を開く。そこには「吉井明奈、Fクラス」とでかでかと書いてある。ぴしりと固まる明奈を眺めながら、西村先生は長いため息を吐くと、こう付け加えた。

「おめでとう、吉井。お前は正真正銘、最低最悪のバカだ」

.....

自分のクラスに向かう途中、明奈はAクラスの最高レベルの教室を眺めていた。

高級ホテルのラウンジのように綺麗で広い教室に、授業内容を表示する大型テレビ、システムデスクとノートパソコン。至れり尽くせりな設備に思わず見入ってしまう。

いいな、いいな、Aクラスっていいな。ぴよこぴよこ動きながら窓から覗き込む明奈。するとAクラス代表の霧島翔子がクラスに向けた挨拶を始めた。

「ほえー……流石は翔子ちゃん。今年も学年首位なのかあ」

各クラスで最も成績の良い生徒はクラス代表になる。友達の晴れ舞台を見ていたいところだが生憎、遅刻している身分。どうせ夜に連絡するし色々聞いてみよ。そう考え明奈は足早にFクラスへと向かった。

新校舎と旧校舎をつなぐ渡り廊下を抜けて奥に向かうとそこは廃墟でした。

カビだらけの壁にはいくつもの亀裂が入っており、ところどころに蜘蛛が巣を作っていた。見る人によれば幽霊屋敷といわれてもおかしくはないだろう。

しかし残念！ここがFクラスの教室！バカの集う最底辺クラスなのである！

「……なにこれ、ホントに教室なの？」

人生ポジティブが座右の銘である明奈も、Aクラスとのあまりの待

遇差に肩を落としてしまう。でもきつと素敵な出会いがあるかも？
そう思いなおすと前向きな気持ちになる。

もうすっかり明奈の頭の中からは学園内格差のことはすっぱりと
抜け落ちていた。鳥とバカは3歩歩けばモノを忘れてしまうのだ。
明奈は勢いよく扉を開けた。

「おっはよーございまあーす！」

「さっさと座れウジ虫が」

「ええ!? ひどい！」

素敵な出会いに心踊らせて入室したのに、いきなり罵倒されてしま
い明奈はショックを受けた。声の主を見てみると、悪友の坂本雄二が
教室の壇上に立っていた。

身長が180cmもありガタイの良い彼を、160cmもない明奈
が目線を合わせるには見上げるしかない。

「なんだ吉井か」

「雄二！なんで壇上にいるの？首痛くなるから降りてよ」

「俺がFクラス代表だからな。手駒たちを見ていたのさ」

明奈が雄二と話していると、再び扉ががらりと開いた。

「はい、皆さん。席についてください。……よろしいですね。改めま
して、私がクラス担任の福原です。これからよろしくお願います」
優しげで大人しそうなクラス担任が登場し、さきほどまでざわつい
ていた教室は、しんと静まりかえった。そんな生徒たちを見ながら担
任は話を続けた。

「皆さん卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出
てください」

担任の言葉に生徒たちは続々と手を挙げて質問を投げかけていつ
た。実は支給された設備のほとんどがオンボロであり、何らかの問題
があるのだ。

「先生、俺の座布団に綿が入ってないです。新しい座布団は貰えない
ですか？」

「はい。ないので我慢してください」

「先生！卓袱台の足が折れています！別のやつをください！」

「木工用ボンドを使って自分で直してください」

「この教室が汚いの？それとも俺が綺麗すぎるから汚く見えるだけ？」

「あー。残念ながら教室が汚いですね」

実質ゼロ回答。担任のあんまりな対応にクラスメイトたちは徐々に閉口していく。文句を言っても仕方がないというやつだ。

そんな生徒たちを尻目に担任は自己紹介を始めさせた。木下秀吉や土屋康太などFクラスのメンバーが次々と自己紹介を進めるなか、明奈はぼんやりと考え事をする。

「島田美波です。ドイツ育ちなので日本語の読み書きはあまりできません。趣味は吉井明奈の胸を揉みしだくことです♪」

「ひえっ」

はろはろーと笑顔で手を振るポニーテール女子、美波によって現実を引き戻される。美波は胸が小さいことがコンプレックスだが、なぜかことあるごとに明奈の胸を揉む癖があった。ちなみに明奈はB寄りのCだという（ムツツリ商会調べ）。

「キマシ……？キマシ……？」

「あら〜、いいですわぞー」

「タマリマセンワー」

突然の百合展開にざわめく教室。ここにキマシタワーを建てようと言わんばかりに、男子たちはニチャアと素敵な笑みを浮かべている。正直、気色悪い。ザマアねえ顔だよ。鏡で見ってみろよ、キモイ顔が映ってるぜエエエ？

やけに生暖かい空気が漂うなか、明奈の順番がまわってきた。親しみやすくインパクトのある自己紹介にしよう。そう考えると、ウイソクをしてクラスメイトにアピールした。

「吉井明奈です。私のことは『ハニー』って読んでくださいいね♪」

「ハアニイイイイー!!」

「失礼しました。忘れてください。すみませんでした。よろしくお願
いいたします」

教室中に響き渡る野太い声。思わず吐き気を催してしまった明奈

は発言を撤回すると気味悪そうに着席した。

「あの……遅れてすみません……」

そんななか、教室の扉が開いた。入ってきたのは姫路瑞希、腰まで伸ばした長い桃色の髪と大きな胸がチャームिंगだ。さらに彼女は学年トップ10に常に名を連ねる成績優秀者。間違ってもFクラスにいるような人物ではない。

最前列の男子が思わず瑞希に質問する。

「はい！なんでここにいますか？」

「それは、その……試験の時に高熱が出てしまって、受けられなくて……」

しょんぼりとした表情で答える瑞希に、男子たちはほっこりとした気持ちになる。そして賛同するかのごとく思い思いの言い訳を繰り広げた。

「ああ化学の問題だな！俺は解けなかったわ」

「死んだ息子の名前が草つてことに気がとられてしまって現国がダメだった。成績が悪いのも全部問題のせいだ」

「わかるわ」

「日本史と世界史が全滅。小さい時から歴史作るのに必死で勉強してこなかったからさ」

「ハハハ、ワロスワロス」

「試験の前の晩に彼女が寝かせてくれなくて……実力を出し切れなかったのさ」

「画面上のдаро？はいイ！キモオタ乙ウー！」

「死ね」

「グエー死んだンゴ」

「はい皆さん、静かにしてください」

騒然とするクラスを落ち着かせようと担任は教卓をバンと叩いた。刹那、どんがらがつしゃーんっと盛大に教卓が崩れ落ちる。これには担任も苦笑するしかなく「教卓を手配するのではばらく自習してください」

「吉井さん……！振り分け試験のときはありがとうございました……」

！」

「姫路さん！もう大丈夫？」

「ええ……何とか、ごほっ……ごほっ……」

「姫路さん？」

「……すみません。私、生まれつき体が弱くて」

瘴気のごとく蔓延する埃。畳から漂うカビの匂い。室内には汚れた空気が充満する。

健康体の明奈でさえも時折、咳をしてしまうくらいに穢れた教室だ。病弱な姫路からすれば、短時間いるだけでも体調を崩してしまうだろう。

ふと明奈は義憤にも似た怒りを感じた。

なぜ振り分け試験ですべてが決まらなければいけないのか？なぜ身体の弱い姫路さんが劣悪な環境で学ばなければいけないのか？なぜ成績の良い姫路さんがたった一度の試験で酷い目に遭わないといけないのか？

理不尽な学園側への不平不満。ウォール街を占拠せよ！B A K A L I V E S M A T T E R！

意地でもマシな設備を勝ち取りたい。闘争だ！行動し戦わねばいけない！NOでは足りない！

明奈は教室の隅で寝そべっている雄二に近寄り声をかけた。

「ねえ雄二。Fクラスの教室、どう思う？」

「どうって……埃まみれでカビ臭い最悪な環境としか言いようがないだろ。不気味なキノコも生えてるし。こんなところにずっといたら、それこそ病気にでもなっちゃう」

「そうだよねえ……。あのさ、何とかならないかな」

漠然とした明奈の言葉に思わず雄二も怪訝な視線を向ける。

「何とかって、なんだよ」

「その、もう少し綺麗な教室に変えてもらう、とか？」

「ふーん。まあ、俺も思うところはあ。……なら、行くか」

「……え？どこに？」

雄二の言葉に疑問符を浮かべる。そんな明奈の頭をこつんと小突

くと、雄二は教室の扉を開いた。

「学園長のところにだよ。あのババアに直談判するんだ」

にやりと笑い何だか自信ありげな雄二に、明奈もぱあつと表情を明るくする。もしかしたら何とかなるのではないか。そう期待に胸を膨らませて、明奈たちは学園長室へと向かった。

.....

「Fクラスの教室の改装？ダメに決まってるじゃないか」

何とかならなかった。

藤堂カヲル学園長は、とりつく島もないといわんばかりに腕を組んでいる。

「バカに充てる予算はないよ。Fクラスは新潟に移転して解散しろって声もあるくらいなのに、何が悲しくてそんなことしなきゃいけないのさ。バカも休み休みにしな」

「おいおい。いくらなんでも酷すぎねえかクソババア？地獄に落ちろ」

「そうですよクソババア！土に還れ！」

「あんたたちの口の利き方も酷いもんさね……」

教え子2人から吐き出される罵詈雑言に学園長も思わず頭を抱えてしまう。どうしてこうなった……。

「とにかくクラスの環境が悪い。あんなところにいたらFクラス全員、病気になっちゃう。余命僅かなクソババアと違って俺たちには未来があるんだぞ？」

「そうですよ！このままだと皆、アスベストになってクソババアみたいになっちゃいますっ！」

「それが人にものを頼む態度か!?あと吉井！アスベストは病名じゃないよー！」

「べつ、別にいいじゃないですかあ!?!とにかく環境が最悪なんですよっ！」

学園長は背もたれに身を預け、長い息を吐くと二人を睨み付けた。

「そもそも、成績で環境が変わるのが文月学園のルールさね。なのに何を今さら。嫌なら学校をやめちまいな」

「なっ!?!」

教育者とも思えない発言に明奈は絶句する。

学園長からすれば突然、学園の方針を変えることは難しい。またFクラスだけ設備を変えれば、他のクラスから不平不満が出てしまう。教頭などの反対勢力もいるなか、動きたくても動けないというのが実情だ。

とはいえ、冷徹な物言いであることも事実。不愉快そうに眉をひそめる雄二を一瞥すると、学園長はさらに言葉を続けた。

「だいたい、Fクラスの生徒たちは筋肉労働で働くしか能がない。そんなバカたちにくれてやる設備はないさね」

「いくらなんでも最低ですつ、撤回してください!そういう生徒がいると思ってるから、文月学園はダメになるんだつ!私たちの怒りはMAXです!」

「何を言ってるんだいあんたは。怒りなんておかしい。Fクラスの奴らは、実際に技術的な習得もなければ、ソロバン勘定も事務的な処理もやったことがない。毎日が筋肉で働いている、あんたたちみたいな奴らがこの学歴社会で路頭に迷うんだよ」

学園長は机に両肘を立てて寄りかかり、口元で両手を組んだ。所謂ゲンドウポーズだ。

「底辺クラスが不満ばっかり一丁前に垂れてんじやない。この学園ではね、クラス設備も自分で勝ち取るものなんだよ」

「……それが学園の方針ってことか?」

「当たり前じやないか。何のために試験召喚戦争があるのさ」

「でもっ! たった1度の振り分け試験で全部決まるなんて不当じやないですか!?!」

「振り分け試験も入学試験と同じだよ。実力が出せなかったからって結果は覆らないのさ。人生はリセットできるゲームとは違うんだよ、バカ」

「でっ、でもっ! 姫路さんがっ!」

「嫌なら結果を出しな。いつまでもバカをやってるからそうなるんじゃないか」

雄二がいくら現状の問題を訴えても、明奈がどんなに姫路の窮状を叫んでも、学園長は対応しようとしめない。まさに暖簾に腕押しだ。

「……もういい。行くぞ、吉井」

「雄二っ！まだ話は終わってなっ……！」

「これ以上、クソババアに何を言っても意味がない。時間の無駄だ」

「ふん、小童の戯言に余計な時間を使わされるとはね」

学園長の方を見向きもせず退出する雄二。そんな彼を追いかけるように明奈も慌てて部屋を出た。突然の来客がいなくなったなか、学園長は吐き捨てるように言った。

「力なき者に与えるものなんぞないよ」

.....

Fクラスまでの帰路、明奈と雄二は終始無言だった。Fクラスの教室の前にまで戻ると、ふいに明奈は雄二に問いかける。

「どうすればいいんだろ……雄二」

元気が取り柄の明奈もすっかり意気消沈してしまっている。神様、僕たちは何て無力なんだ。もともと小柄な彼女だが心なしか普段よりも小さく見える。

「どうするも何もねえだろ。直談判に失敗した。それだけだ」

「でも……」

雄二の言葉に明奈は何も言い返せない。学園長に真剣に訴えれば状況が良くなる。そんな期待を明奈はどこかで抱いていたのかもしれない。ただ、それも塵となり消えてしまった。

こんなにも世間は底辺に対して厳しい。失うものなんてないほどに何も持たない私たちがばかり、どうして苦しまなければいけないのか。思わず明奈も陰鬱な気持ちになってしまう。

とはいえ、できることなんかない。下唇を噛み、ぎゅっと拳を握りしめてうつむく。

「辛気臭えツラすんな。まだ手はある」

「……え？」

「試験召喚戦争をすればいいのさ」

雄二は明奈の頭に手をのせた。見上げた明奈の瞳に映るのは、なぜ

だか闘志を燃やしている雄二の姿。これから起こす革命に心臓が沸き踊っている、といわんばかりだ。

試験召喚戦争（試召戦）、それは文月学園の独自の仕組みだ。クラス間で試召戦が起きた場合、生徒たちは自身を投影した召喚獣というアバターを使つて戦う。

教員の展開する召喚フィールド上であれば、召喚獣は呼び出すことができる。召喚獣の体力や攻撃力などの能力値は、その教員が担当する教科の点数で決まる。勉強ができれば強力な召喚獣を操れるが、複数人で1人に襲い掛かれれば点数差を覆すことも可能だ。

「Aクラスの奴らに試召戦で勝てれば最高の設備が手に入れられる。姫路も安心だろう」

「……それって私たちに勝ち目あるの？」

荒唐無稽な話に、明奈も思わず後ろ向きな発言をしてしまう。

無理もない。文月学園では、試験時間内であればいくらでも問題を解き点数を稼ぐことができる。そのため、Aクラスに所属する優等生と、Fクラス崩れの劣等生の間には天と地ほどの点数差がある。正攻法でいくならば、Aクラスに勝てる可能性はゼロだ。

しかしながら、雄二は自分が負けることなどない、と言わんばかりに自信に満ちている。その姿は、実力差のわかっていない道化ではない。これから波乱を巻き起こす英雄のような顔立ちをしている。

「まあ見てろ。まずはFクラスの奴らをやる気にしないといけねえな」

悪事を企むかのような笑みを浮かべると雄二はFクラスの扉を開いた。教室内には自習時間であるにもかかわらず、クラスメイトたちがゲームをしたり寝たりして伸び伸びとしていた。そんな彼らを尻目に雄二は壇上へと歩を進める。そしてだらけ切った彼らに、大声で呼びかけた。

「よお前ら、自己紹介が遅くなった。俺がFクラスの代表、坂本雄二だ」

クラス中の注目が雄二に集まった。一体何が始まるんです？ 第三次世界大戦だ。

不安そうな生徒もいれば、面倒くさそうに見上げている生徒もいる。多種多様な視線が向けられるなか、雄二は一層口角をあげる。邪悪で癡猛な笑みを浮かべた雄二は、気取った抑揚のついた調子で言葉を続けた。

「さて、皆に1つ聞きたい」

ついに雄二の演説が始まった。

バカ女とDクラスと試験召喚戦争

「さて、皆に1つ聞きたい」

両手を広げると雄二は教室内の設備に視線を向けた。

「俺らに与えられたのは腐った設備。勉強はおろか、教室にいることさえ苦痛になるほど最低最悪だ」

視線の先にあるのは、ボロボロのちゃぶ台、シミのついた畳、そしてひび割れた窓と壁。

劣悪な設備を目にしたFクラスの生徒たちは強く頷き同意した。

「片やAクラスは冷暖房完備で座席もリクライニングシートだ。聞けば高級ホテルよりも居心地が良いとか」

クラスメイトたちはごくりと喉をならす。脳裏に浮かぶのはAクラスの最高の設備。

何であいつらばかり、どうして俺らだけが。心に生まれるのは学園に対する怒り、憎しみ、猜疑心。

不平不満のマグマが沸き上がるのを確認すると、一呼吸を置いて雄二は問いかけた。

「一握りの成績優秀者ばかりが甘い汁を吸う学園。お前ら、不満はないのか？」

「「大ありじゃあつ!!」」

突如、立ち上がり怒りをあらわにする生徒たち。各々の怒号がオンボロ教室を揺らす。学園の制度だから仕方ないと我慢できるレベルはとつくのとうに超えていた。

「なんでAクラスに予算が多く割り当てられてんだ！俺たちの席を返せ！」

「ゼンリヨク虫唾がランニング！」

「学費が安いからって限度がある！もう、学び舍ってレベルじゃねーぞ、オイ！」

口々に胸中を吐き出す劣等生たち。1%の特権階級たるAクラスばかり優遇されて不公平じゃないか！俺たちは99%だ、大衆のための学園運営を！そう言わんばかりに彼らは拳を突き上げる。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

雄二は挑発的な笑みを浮かべて言葉を続けた。

「――FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

学年最高レベルの頭脳を持つAクラスへの宣戦布告。明らかに現実味のない提案に、さきほどまでは勢いのあつた生徒たちも急速に言葉を失ってしまふ。

「Aクラスに勝てるわけないだろ……頭ハッピーセットかよ」

「姫路さんさえいてくれればそれでいい」

「ミナアキはジャステイス」

「は？アキミナだろJK」

「何も持っていないとき、人は頑張れる」

諦めの言葉が教室中からあがる。

これまで散々、劣等生として扱われプライドも失ってしまった生徒たちには、反抗する意志も残されていなかった。やっぱり、負け犬根性が染み付いた奴には苦勞するな。

既にFクラスはお通夜ムードに入ってしまった。Fクラスの生徒たちは不安よな。坂本 動きます。

パアンツ！と大きく手を鳴らすと、雄二はクラスメイトたちを鼓舞した。

「お前ら諦めるのはまだはえーぞ。俺たちは必ず勝てる。このクラスには戦争で勝つことのできる要素が揃っているからな」

その言葉にクラスはざわめきだした。一体どういうことだつてばよ！

聴衆の反応に気をよくした雄二は、得意の不敵な笑みを浮かべるとまずは康太を指した。

「まず、そこで畳に顔をつけて姫路のスカートを覗こうとしている男は土屋康太。寡黙なる性職者（ムツツリーニ）だ」

「え……きやあー！」

「……………!!」

雄二がそう言うのと康太は必死になって顔と手を左右に振り、否定のポーズを取った。その顔には畳の跡が残っている。

スカートを覗かれそうになっていた瑞希は裾を押さえ、康太から少しずつ遠ざかった。

「現行犯なのに覗きの証拠を隠して、下心なんてないかのように振る舞うとは。ムッツリの名に恥じない男だ」

「あれが最大勢力ムッツリ商会の……」

「正直、めっちゃタイプだ」

「そして姫路だな。Aクラスに匹敵する逸材であり、ウチの主戦力だ」
「えっ？わ、私ですか？」

雄二は瑞希を指しクラスメイトたちに希望を与えた。クラスからはおお！と感嘆の声が各所からあがってくる。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだ！」

「可愛くて頭も良いエースとか最高かよ……」

「悪いが女には興味ないね」

さらに、と雄二は秀吉を指し言葉を続けた。

「それに演劇部のホープ、木下秀吉だっている。当然、俺も全力を尽くす」

「確かに2人がいればなんだか頼もしいな」

「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれてたっけ？」

「おいおい……マジでイイ男ばかりで胸が高鳴るぜ。一体どうなってるんだ、Fクラスはよお！」

クラスのボルテージは有頂天を突破しつつある。気を良くした雄二は明奈を指した。

「それに、吉井明奈だっている。一見ただのバカだがそうじゃあない。こいつはな、観察処分者なんだ」

「「な、なんだってー!!!」」

雄二の言葉にクラス全体に激震が走る。だが誰もその意味を理解はしていない。何となくのノリで驚いているだけだ。クラスメイトたちの反応にきよんとする明奈。大丈夫、誰もわかってないから。
「教授!!これはいったい?」

たまらず須川亮は窓辺に立つ老人に問いかけた。ちなみにこの老人は教授でもなければ学園関係者でもないただの不審者だ。住所不

定無職。

しかしこの老人、顎に手を当て神妙な顔をして、ぽつりと真理を言い当てた。

「うむ、観察処分者とはすなわちバカの代名詞。つまりはこの学園で史上最悪のバカだということじゃ」

不法侵入老人の発言にFクラスの生徒たちは一斉にずっこけた。ただのバカかーい！

一方、明奈は顔を真っ赤にしながら不服そうに抗議した。非常に可愛い。瑞希と美波もほっこりとした表情で彼女を見つめている。

「違うよ！ちよつとお茶目でプリチーな16歳につけられる愛称で」

「いや。確かにこいつの成績は最底辺、前代未聞のバカで悪さばかりするダメ人間だ。役立たずかもしれないからさつき発言は忘れてくれ」

「ちよつとお!?雄二!」

突然の梯子外しに明奈は絶望した。

ただ、がっかりしたのはクラスメイトたちも同じ。教室のあちらこちらからヤジが飛び始めた。

「成績最底辺とか、ただの戦力外じゃねえか！引っ込んでろ！」

「しかもヤバいこともやってることだろ？大問題児と言わざるをえない」

「ふうん、おもしろー女」

「認知症と言ったら怒られるけど、判断力、脳がおかしいとしか言えない」

「あの……ヤジは本気で傷つくのでやめてほしい」

これじゃあサンドバッグじゃないか！あんまりな言葉の数々に明奈はさめざめと泣くしかない。

一応、観察処分者は教師の雑用を手伝うため、特例として召喚獣は物に触ることができる。その反面、召喚獣が受けるダメージの幾分かは明奈に痛みとしてフィードバックされるという。正直なところ、メリットはあまりないように思えてしまう。

こほんと声を整えると雄二は大声を出す。

「とにかくだ！まずはDクラスに対して試験召喚戦争を起こし、前哨戦といこうじゃないか！」

「「おー!!!」」

.....

「まったく！雄二はホントに失礼だよっ！」

雄二の演説後、作戦会議があるとわれ屋上に向かう明奈たち。ぷりぷりと怒る明奈を瑞希や秀吉が宥める。

「まあまあ。もう許してあげましょうよ」

「うむ。雄二も色々と考えがあつて言ったのじやろう。そう気を荒げるでない」

「覚えてろ坂本雄二イ……地べたを這いずり泥水をすすつても目にも見せてやる」

それでも明奈の怨念は消えない。人の業は果てがないから、人の恨みは尽きない。

憎き雄二を思い浮かべ眼を血走らせる明奈を指しながら、美波は康太に話しかける。

「ねえ……確認なんだけど、アキと坂本は友達なのよね？」

「……………昨日の敵は今日の友」

逆に言えば昨日までは敵だったわけだ。Fクラス情勢は複雑怪奇なり。

だが、人を恨めば自分に返ってくる。古い校舎特有の謎の床の盛り上がり、明奈は足をひっかけてしまう。グフっ！とおかしな悲鳴をあげて明奈は盛大に転んだ。ドムつと鈍い音をあげ、ザクつと廊下を滑る。さすがのドジっ娘である。

「ちよっ！アキ、大丈夫!?!」

「ううっ！これも全部雄二のせいだ！あの非人道的サイコゴリラめえ〜！」

「八つ当たりにもほどがあるでしょ……」

横座りになりおいおいと涙を流す明奈。継母と義姉らに虐められたシンデレラのようなだが、実際は勝手に転んだ挙句、無関係な人間を呪っているクスである。

「ムツツリー二よ。なにゆえ写真を撮っておるのじや?」

「……………シャッターチャンスは逃さない」

ここぞとばかりに明奈の周囲をカサカサと動き回りシャッターを切り続ける。その姿、まるでゴキブリ! 来週のムツツリ商会の商品ラインナップに、今日撮った写真が加わるはずだ。

見るも無様な明奈、そんな彼女に心優しい瑞希は声をかける。

「吉井さん。膝の傷とかこれで抑えてください。その……………私のハンカチでごめんなさい。絆創膏とかあれば良かったのですが……………」

「イヤ……………姫路さんありがとう (結婚しよう)」

瑞希は明奈の擦り傷を自身のハンカチで拭いた。マジかよ天使じゃん。あまりの神対応に明奈もジーンときてしまう。おっぱい星人の明奈からすれば、瑞希は豊満なバストを持つ女神様だ。

「ほら明奈、作戦会議に行くわよ。あんたが部隊長になるんだから、しっかりしなさい」

そう言うのと美波は、感動の余韻を噛みしめている明奈を引っ張り上げた。

瑞希が信仰の対象である女神だとしたら、明奈にとって美波は甘えられるお母さんだ。厳しくも優しい、そしてちょっぴり甘やかしてくれる、そんな理想の存在らしい。たまに怖いが。

「ええ……………もうめんどくさいよ。欠席しまーす」

「そんなこと言わないの。まったく、明奈には一度 D a s B r e c h e n……………えっと日本語だと」

「……………調教」

「そう、調教の必要がありそうね」

「ひえっ」

「まったく……………美少女なのにバカなことばかり」

「……………確かに需要はかなりある」

あまりのバカさゆえに男子陣ですら忘れがちだが、明奈はかなりの美少女だ。ムツツリ商会でもプロマイドなどのグッズが多数販売されており、DクラスやFクラスのみならずAクラスでも商品が流通している。本人が隙だらけなので際どいモノも多く高額商品やレアモ

ノもあるとか。

「ええ〜〜???そおかな〜〜???いやあ〜〜???私ってバカだし〜
〜???」

「調子乗ってるとお嫁に行けない身体にするからね」

「ひえっ」

「……………グハッ!!!」

右手をワキワキとさせる美波を前に明奈も思わず胸を隠す。この仕草は明奈の胸を揉みしだくというサインだ。

なお、哀れなムツツリは美波の言葉だけでめくるめく妄想世界に入ってしまう自爆した。すごいすごい！ムツツリーニは鼻血を出すのが得意なんだね！

明奈も懇願するように美波のことを見つめてしまう。するとピン！と美波にデコピンされた。

「少しはしっかりしなさい。わかった？」

「う〜〜、はいい……」

「よろしい」

「お主らは何をやっておるか。早く行くぞ」

旧校舎の屋上に着くと、雄二を中心として作戦会議が始まった。

「良いか、今回の作戦はごく単純だ。Dクラスの侵攻を食い止めて姫路が回復試験で点数を稼ぐ時間を確保する。そしてDクラス代表の隙を作ったところで、試験後の姫路が討ち取る。以上だ」

「なるほど。持久戦に持ち込んだうえで奇襲攻撃で突破ということじゃな」

「わ、私……が、頑張りますっ！」

「おう、頼りにしているぞ。姫路」

ガンバリマスロボのように奮い立つ瑞希と笑みを浮かべ頷く雄二。2人の間に何だか信頼、絆みたいなものが生まれているかのように感じる。

ここだけの話だが瑞希は明奈が好きだ。マジでぞっこんLOVEしている状態らしい。

ただ明奈からすれば、そんなことわかるわけがない。同じ小学校出

身とはいえ、振り分け試験のときに熱を出した瑞希を助けたこと以外で接点はほぼなかったのだから。

恋に恋する乙女としては、はにかむように笑う瑞希と、自分や美波に対する時とは違って何だか爽やかな感じで話す雄二は、お似合いのカップルのようだ。少なくともどちらかが好意を持っていてもおかしくないようにも思えてくる。

「これは同志に報告かなー……」

「おい吉井。バカのくせに独り言を言うなバカ。そんなんだからバカなんだぞ、バカ」

「ねえっ！何回バカって言ったっ!?バカって言う方がバカなんだよっ!?ブアーツカー！」

「不毛な言い争いはやめなさいよ……」

「まるで小学生じゃな」

そういえば、と秀吉はかねてから気になっていたことを聞くことにした。それは雄二と明奈の関係についてだ。

「お主らは息びったりじゃが、もしかして交際などしていたりするのかのう」

「はああああああっ!?!」

「そうなんですかつ!?吉井さん!」

「なっ、アキと坂本がいつの間になっ!?!」

秀吉の爆弾投下に揺れる屋上。明奈と雄二に4人の目が集まるなか、2人は必死になって否定する。

「ないない!雄二はマジで絶対がない!ありえない!だって私の理想は、身長180センチ以上の壇ノ浦冬馬みたいなイケメンで、年収が4ケタで、年齢プラス5歳までのママになってくれる人なのっ!身長以外まるでかすりもしないし!根は優しくてちよつと頼れるゴリラかもだけど、雄二とかこっちから願ひ下げ!完ツ全に事故物件だから!」

理想が高すぎて対価で身体が全部持って行かれそう。負けじと雄二も反論する。

「ああ、まったくもってありえないな!こんなバカにどうすれば惚れ

るのか皆目見当がつかない！ゴキブリ並の生命力しか取り柄がない、常識なしの宇宙人みたいな女だぞ!? デリカシーもゼロ！もつとお淑やかな大和撫子だったら良いが、まるで正反対のガサツなバカ女じゃないか！顔が少し良くて茶目っ気があるかもしれないが、恋人にしたいなんて1ミリも思わない！考えただけで悪寒がするしむしろこつちが願ひ下げだ！」

脳裏に浮かぶ理想の相手は黒髪ロングの幼馴染。言葉にはできないが、あの日から彼女に強く惹かれている。そんな坂本雄二は男のツンデレという正直、誰得な存在だ。

互いに引けを取らない罵倒合戦に明奈と雄二はにらみ合う。

「んまー！こんなチャージングな女子に願ひ下げとかどんだけ!?!?ゴリラの癖に理想が高すぎるんじゃないやなくて!?!?目の手術と整形を強くおススメしますわー！」

「お前にだけは理想が高いなんて言われたかねえよ！イマドキ小学生でもそんなバカげたハードル立てねえよ！お前のバカさは天元突破してんのか!?!?サル以下のバカが！」

「なにおー!?!」

「やんのかー!?!」

死ねーッ死ねーッ死・死・死・ね、と口を揃えて罵倒し合う2人。そんな白熱討論を尻目に秀吉もため息を吐く。

「うむ。とりあえず恋仲ではないが、息ぴったりだということはおわかった」

「ホント仲良いわよねーあんたたち」

「2人がちよつぱり羨ましいですっ」

「どこがじゃっ!!」

そんなこんなで作戦会議は白熱していった。初めての試験召喚戦争は午後からの開幕である。

.....

「アキー！前方からDクラスが攻めてきてるわー！」

Dクラスとの試験召喚戦争が始まってから30分が経過している。主戦場となっている新校舎と旧校舎の渡り廊下では、激しい戦いが繰

り広げられていた。

戦闘の中心は秀吉の率いる先遣部隊だが、一部のDクラス生徒が戦線を突破。そのせいで、後方支援を担っている明奈の部隊も、既に戦闘を始めている。

「複数人で1人を囲んでいるからまだ大丈夫だけど、さらに多くの敵が来たら厳しいわよ」

「おっけー！じゃあ各位、転進！」

「了解！」「了解！」「了解！」（ハハ）ハイ！ワカリマシタ！」

転進とはすなわち撤退である。無様な敗走であることを隠すための都合の良い言葉だ。作戦と違う行動を見かねた美波は、仲間を捨てて逃げようとしたバカの頭を小突く。

「何言ってるの、おバカ！」

「だって、私の場合フィードバックがあるからあんまり戦いたくないというか」

「ウチがアキのことは守ってあげるから！大丈夫よ！」

「美波ちゃん……ありがとお……！よーし……一緒にがんばろー！」

「任せて！あいつらの奥歯ガタガタ言わせてやるわ」

「ひえっ」

やはり美波は少し怖い。

とはいえ戦況は芳しくない。新校舎側から新たに2人の教師が走ってくるのが見える。立会人の教師が増えればそれに伴って戦線も広がってしまう。瑞希が回復試験を終えるまでの時間を稼ぐためにも、最低限の戦線に抑えて、じわじわとDクラスの戦力を削らなければならぬ。

「アキ！五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学で押しきる戦略みたい！」

「美波ちゃん、化学に自信は？」

「全くなし。基本60点台」

「うーんこの底辺クラス感」

「あんたにだけは言われたくないわよ」

雑談をしようという状況は刻一刻と変わっていく。気づけば明奈

の部隊の生徒たちは、Dクラスに押され気味だ。

「やってやるう！やってやるぞお！う……うわあああああ！」

「つて、おいしいいいいいいい！！無理だろ！いやこれ無理だろ！」

「もうダメだ……お終いだあ……」

「Dクラスの倒し方、知らないでしょ？俺も知らないんですけど」

もはや阿鼻叫喚。このままでは全滅も時間の問題だ。

何か突破口はないものか。辺りをキョロキョロ見回したところ、明奈はあることに気がついた。立会人の1人である布施先生の背中が心なしか曲がっているのだ。さらに、やたらと片手で腰の辺りを擦っている。

そういえば、と明奈は思い出した。授業中の雑談で布施先生が言っていたことを。最近、ぎっくり腰になってしまい腰の調子が悪い、と先生は恥ずかしげに話していた。

「あ、閃いた」

名案が思い付いたとばかりに手をぽんと叩く。無邪気な表情を浮かべているが、明奈の脳内には悪魔的アイデアが浮かんでいる。Think Different。

これが文月学園を代表するゲスの極み乙女だ。

思い立ったが吉日。明奈は近くの掃除ロッカーから箒を取り出して召喚獣に持たせる。そして五十嵐先生と高橋先生の注意が他所に向いた瞬間、その箒を投げ飛ばした。

「いつけえええええ！私のロンギヌスうううう！」

この日、召喚フィールドとともに、布施先生の腰が砕け散る音がした。

召喚獣が持つ強力なパワーで投擲された箒は、最悪の凶器となり布施先生に襲い掛かったのであった。

「はうあつー！」

「布施先生っ!?!」

がくりと崩れ落ちる布施先生。渡り廊下に立っていた五十嵐先生も思わず彼に駆け寄った。それに伴い、化学の召喚フィールドは一時的に消滅。Dクラスに押されていた渡り廊下戦線は、新校舎側に立つ

ている高橋先生の周囲にまで後退した。

召喚フィールドは立会人である教師を起点とした半径10メートル内に限られる。当然、教師が減れば領域は狭くなるし、戦闘に参加できる人数も限られてしまう。

「よっし！ホールインワン！五十嵐先生！早く布施先生を保健室に連れていかないと！」

「え、吉井さん。今、ホールインワンって」

「言っていないですよ！空耳ですよ！とにかく！このままだと布施先生の腰がご臨終を迎えちゃうよ！ほらほら！早く早く！」

「待てやFクラス！五十嵐先生には立ち会いをしてもら」

「布施先生の腰が大変なときに何てこと言うの！この人でなし、ろくでなし、玉なし！そんなんだから1年生のときに翔子ちゃんにこっぴどく振られるんだよっ！人の心を失った汚らわしい化け物め！」

明奈の猛烈な罵詈雑言にDクラス男子はぶわっと涙を流し崩れ落ちた。言葉は、弾丸にもなる。この名もなきDクラスの彼には、1年生の秋ごろに霧島翔子に告白したところ「悪いけど貴方に微塵も興味が持てない」と一蹴された辛い過去があるのだ。

ハートを粉々にされた男子は膝を抱えて蹲った。ガラスの少年時代の破片が胸へと突き刺さってしまった。そんな少年の横を布施先生を担いだ五十嵐先生が通過する。作戦通り無事、化学教師2名を保健室送りにした明奈は、腰に手を当て高笑いする。まさに外道。

「勝ったな、ガハハ」

「アキ……あんたなんてことを……」

「ふつつ卑怯もラツキョウも大好物だからね！」

「いつか痛い目見ても知らないわよ……」

呆れ果てる美波だが、立会人の教師が減ったことでDクラスの侵攻が滞ったのは事実。高橋先生の周辺では、複数のFクラス生徒たちが寄ってたかってDクラス生徒を痛めつけている。

新たな教師が来ない限りは膠着状態が続きそうだ。とはいえ、力の行使には代償が伴う。

「この泥棒ネコめっ！お姉さまの傍から離れなさい！」

「ひでぶっ!!」

「アキッ!!」

突然の悪質タツクルで明奈は横に吹き飛んだ。インド人を右に！
タツクルの主は清水美春。美波に恋する百合乙女だ。明奈のことを憎き恋敵と思っており、やや暴力的だとか。

「やめなさい美春！アキをいじめないで！」

「お姉さまあ！なぜこのような知性の欠片もない泥棒ネコに!？」

「いひゃい！いひゃい！いひゃい！」

明奈の頬をみよーんと伸ばして叫ぶ美春。知性の差が顔に出るらしいよ……困ったね。ただ少なくとも今、明奈があほ面をしているのは間違いなく美春のせいだ。

「何度も言うけど！ウチはあなたの想いには応えられないって言うてるでしょ！西村先生え!!Dクラスの清水さんがルール破りをしてます!!」

「そんなっ!?お姉さま！どうして美春の愛を理解してくれないのですかっ！」

「清水！お前、召喚戦争のルールを忘れたかあ！召喚者自身の戦闘参加は反則行為であり処罰の対象！ルール違反者には特別補習だ！」

突如出現した西村先生が美春を米俵のように抱えていった。なんたる出オチ。行き先は特別補習室、文月学園の地獄だ。

「くうーっお姉さま！美春は必ずや泥棒ネコから救い出して見せますからねえ！」

「よっしやー！目にもものを見せてやったわ！あーっはっは！」

「うう……酷いよ美波ちゃん……。私を犠牲にして得た勝利なんて本当に誇れるもののかな……?」

「言っとくけど、あんたよりかは大分マシだからね?」

例えばロンギヌスが布施先生の腰を貫いた事件とか。あれは痛ましい事故だった。

とはいえ「文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および召喚戦争のルール」には「立会人である教師への直接攻撃」を禁止する文言はない。倫理的には大問題だがルール違反ではないのである。

なお、そんなことをバカは一切考えていない。たまたま運よく法の抜け穴をつけたただけだ。考える前に飛べ。試験召喚戦争はゲーム。遊び方を知っていたら、世界最高のゲームである。

「吉井、島田。すまぬ！撤退する者はわしで最後じゃ！」

「くそっ！卑怯で邪悪なFクラスめ！Dクラス塚本がお相手いたす！召喚！」

「戦争なんて始めた瞬間どっちも悪だよ」

「急に達観しないでよ……。召喚！」

数学の長谷川先生を伴ったDクラスの主戦力が到着した。

2人は秀吉を何とか後方へと逃がすことができた。ただ、塚本含め数人の生徒を相手しなければならぬ。

当然、美波だけでは厳しいと考え明奈も加勢しようとした。ところが、美波は明奈のことを片手で制する。

「ここはウチに任せなさい！数学はBクラス並だから大丈夫！アキは本丸を攻め落とすことに集中して！」

「……っ！うん、わかったよ美波ちゃん！ありがとっ！」

「くっ……いくら点数が高いからって、俺たちとやり合っても相討ちだぞっ！」

「それが何よ。あの子を守れるならむしろ本望」

「なっ!？」

「あんたはここでウチと死ぬのよ」

美波は塚本らをまっすぐ見据えると口角を上げた。その姿はあまりにも男前で格好良く、本人も知らないうちに新たな女子ファンを何人も獲得したのであった。

.....

『塚本、他数名、戦死イ——Fクラスの島田と相討ちになった模様！』
「なにい!?塚本がやられたなんて！あいつら得意科目ごとにわけた部隊で1人1人を袋叩きにして、こっちの数を徐々に減らしていつてやる！」

「長期戦になれば回復試験を受けた奴らも戻ってくるしジリ貧だぞ!? どうする代表！」

「こうなりや一気に叩く！行くぞみんな！」

Dクラス代表の平賀源二の号令で待機していた生徒たちが一斉に突撃を始めた。

目指すは雄二のいるFクラス。勇ましい掛け声とともに代表を含めた精鋭部隊が渡り廊下を駆けていく。抑えようと壁を作るFクラス生徒たちも、精鋭部隊の前では塵のように吹き飛ばされてしまう。「ちよおつと待ったああああ！召喚！」

「なっ！Fクラスの吉井だど!？」

途中にあるEクラス前を源二たちが通過しようとした途端、いきなり扉が開いた。

教室内から大声をあげて出てきたのは明奈だ。隣にはEクラスの女子たちに引き留められていた現代国語の竹内先生がいる。

愛され系のバカとして知られる明奈には同性の友達が沢山いた。意外と人気者なのである。今回もEクラスの仲良しの友達に頼み込むことで、密かに匿ってもらっていたのだ。すべては雄二の奇襲作戦を実現するため。

「そうはさせないよ吉井さん、召喚」

「なっ！玉野さんっ!？」

「ふふふ、いざというときの備えはしっかりしておかないとね」

だがDクラスもすぐさま対処してきた。源二の傍にいた玉野美紀が明奈を遮る。勝ち誇ったかのように源二も笑みを浮かべた。

その美紀だが当初はキリっとした表情だったが、徐々にだらしない顔つきになっていく。この女、実は明奈のことが異常なまでに大好きであり、できることならお持ち帰りして着せ替え人形にしたいと常日頃から思っているくらいにはやべー奴なのである。ここだけの話、100万回抜いたねこれ。

「えへっえへっえへっ。吉井さん……ううん、アキちゃん。こんなところで会えるなんて私たち、運命の赤い糸で結ばれているみたいだね」

「た、玉野さん？何を言ってるの？」

「うふふふ、美紀って呼んで。アキちゃんに似合う素敵な服を、いつぱ

いいーっばい着せてあげるからね。二人だけの着せ替えショー、私だけのアキちゃんコレクション……うふふふふ」

「こわいこわいこわい！何かダークサイドに堕ちかけてるよ！誰かタスケテー！」

肉食獣のように飢えた瞳を光らせる美紀に、明奈は思わず悲鳴をあげる。変態に遭遇した生娘のように。

そんな状況に付いていけず源二は立ち尽くしてしまう。クラスメイトの変貌にはつきり言っただん引きだ。

「玉野さん……？」

「大変だ！代表が宇宙猫みたいな顔してるぞ！」

「しっかりとよ代表！ここで相手の大将を討ち取って勝負を決めなきゃー！」

「おっそうだな。ただし平賀、討ち取られるのはてめえだ」

源二が放心している最中、雄二がにやにやしながらFクラスから出てきた。周りにはクラスメイトが複数いる。単純な数でいえば源二の部隊よりも少しだけ多い。

Fクラス代表が登場したことで、Dクラスの精鋭部隊たちは前方に集中し守りを固め出す。

「おいおい坂本。人数が揃ってたとしても俺とお前の点数じゃ勝負にもならないだろ。何をバカなこと言ってるんだ」

「ああ、確かに俺らじゃあ相手にならないかもしれないな。だが、こいつならどうだ？」

そう言うと雄二は新校舎の方向を指した。するとそこには、いつの間にか瑞希が困ったような表情を浮かべて立っている。ただ、彼女がまどついているどす黒いオーラは見る人を怯えさせるものだった。

「平賀君。現代国語で勝負を挑みます。召喚」

「え？あれ？姫路さん？どうして？」

「すみません、早く勝負してくれませんか？」

「あつ、はい。召喚。ん？」

言われるがまま召喚獣を出してしまう源二だが、瑞希の側に表示された点数を見て愕然としてしまう。倍近くの点数を持つFクラス

の主砲の登場に、精鋭部隊は大混乱だ。

「このままだと吉井さんが手遅れになってしまうので手っ取り早く終わらせませす。いざ、お覚悟を！」

「いや、あ、ちよつと待っ」

轟音とともに源二の召喚獣は半分には切断される。悪・即・斬！ただ悲しいことに源二は別に悪いことをしたわけではない。むしろ悪事を重ねてきたのは、今まさに美紀に組み敷かれて襲われかけている明奈の方だろう。

なにはともあれ、クラス代表の召喚獣が倒されたことで、試召戦は幕を閉じた。

『試験召喚戦争はFクラスの勝利！』

立会人である高橋先生の号令とともに勝敗が確定する。

それを聞いたDクラス生徒たちは床に跪き、Fクラス生徒たちは小躍りを始めた。格上のクラスに勝利できた嬉しさのあまり、Fクラス側はちよつとしたお祭り騒ぎだ。

「やった！勝った！第一部・完！」

「まさか俺たちがDクラスに勝てるなんてなあ！」

「Y A T T A！Y A T T A！Y A T T A！Y A T T A！」

「これで念願のBMWが買える。早く料亭に行きたい」

「クラスの設備って、上げるものじゃなくて、上がっちゃうものだから」

「吉井さんを離してください、玉野さん！こんなところでダメですう！それにそれに私だって吉井さんのことは……！大体、吉井さんだつて何なんですか!?!ちゃんと拒否してくださいっ！」

「良いではないか、良いではないかあ！ねえアキちゃん！脱ぎ脱ぎしてもつと可愛いお洋服着ようね〜！」

「ひいん！2人ともこわいよお！美波ちやあん！雄二い！秀吉はあ!?!ムツツリーニはどこお!?!」

約3名（うち1名Dクラス）はおかしなことになっているが。それもEクラスの女子たちによる仲裁が始まっているのでじきに終息するだろう。

ポリアモリーな百合ワールドを尻目に、雄二はがくりと項垂れている源二の方へと歩み寄った。当然助けたりはしない。雄二にとって明奈の不幸は幸福なのである。

「ははは……まさかFクラスに敗れるとは……油断した」

「まあ、学力がすべてじゃないってことだ」

「違うない。で？教室はいつ明け渡せばいいんだ？」

「いいや、教室交換は行わない」

「なんだって？」

「その代わり次の試召戦の手伝いをしてもらいたい」

にやりと笑う雄二を源二は怪訝そうに見上げる。窓からの夕陽に照らされる2人は何だか尊かった。BL作品のワンシーンといっても過言ではない。

そんな2人をEクラスから撮影する女生徒の姿があった。彼女が密かに撮影した写真が、後に波乱を巻き起こすことになるのは、まだ誰も知らない。

バカ女とAクラスと再会

「以上がFクラスとDクラスの試験召喚戦争の結果です」

「カッカツカ。随分と暴れてくれたみたいだね」

高橋先生の報告を聞き終わると、藤堂学園長は愉快そうに笑う。一方、高橋先生はそんな彼女を諫めるように見つめている。クイっと眼鏡を上げると話を続けた。

「新学期早々やり過ぎではないでしょうか。一度、規律をもつて鎮静化すべきでしょう」

「そのためにAクラスを？」

「はい。既に生徒たちには伝えてあります」

「なるほどねえ……」

試召戦を導入した背景には、生徒たちが楽しく主体的に勉強する、という狙いがある。最底辺クラスは与えられた逆転のチャンスをいかしつっ悪い環境を覆すべく勉強を頑張る。上位クラスも運や戦略などに左右されない圧倒的な知識と学力を身につけて自らの学習環境を守る。そんな学園が、藤堂学園長にとっての理想だ。今のクラス体制を維持するために、教師の側から生徒たちに働きかけて動かすのは、ナンセンスともいえる。

とはいえ、教頭を筆頭にFクラスに反発する教師陣がいることも事実。聞くところによれば、試召戦の仕組みを悪用している、そもそも試召戦自体に問題がある、などと教頭は風潮しているとか。暴走するFクラスを鎮圧しなければ、革新的なシステムに難癖をつけられ面倒なことになってしまう。

だからこそ藤堂学園長は、高橋先生に全てを一任し、Fクラスを抑え込むことを決断した。

「あのバカたちがどこまで抗うのか。見せてもらおうじゃないか」

窓の外を見つめる学園長は楽しみに口角をあげた。

.....

「お前たち、Dクラス戦ではご苦労だった。これよりBクラス戦に向けた作戦会議を始める」

朝のホームルームが始まる前、Fクラス代表の雄二は壇上でクラスメイトたちに語りかけていた。

「今なので試召戦にも少しは慣れただろう？この勢いでBクラスを倒す！そうすればAクラス戦の勝利も間違いない！いくぞお前らあ！」

「「おおー!!!」」

雄二の掛け声に威勢良く応えるFクラス生徒たち。正直、何でDクラス戦がBクラスとの試験召喚戦争につながり、さらにはAクラスとの勝敗に関係するのはわからない。わからないけど、雄二のノリに何となくのせられている。

みんな説明なしに勢いで誤魔化されているのだ。ぜんぜんわからない、俺たちは雰囲気です試験召喚戦争をやっている。これ、詐欺の手法なので気をつけましょう。そのハナシ、ホントに大丈夫？

「……なるほど。真の狙いはあたしたちなだね。それは好都合」

いつの間にかクラスの入口に立っていた少女は、ぽつりとそうつぶやいた。その顔はFクラス随一の美少女男子・木下秀吉と瓜二つだった。突然の来訪者、しかもクラスメイトと同じ顔をした美少女の登場に、Fクラス男子たちはどよめいた。

そんなクラスメイトたちを尻目に明奈は秀吉に話しかけた。

「あれって……もしかして？」

「うむ。あれはわしの姉上じや」

「そうだよね！よかったあ、ドクペのゲンカンかと思ってビクつとしちゃったよー！」

「それを言うならドツベルゲンガーでしょ……」

「お主は本当に……いや、言わぬが花か」

「はー？なにさまですかー？横文字がわかると偉いの？2人とも総理大臣気取り？」

呆れ果てる美波と秀吉に対して明奈は小学生のような反論をする。そんなおバカな会話を繰り返す3人も無視して、挑発的な笑みを浮かべた優子は壇上に上がった。

「私はAクラスの使者、木下優子。失礼するわねFクラス代表さん？」
「……いったい何の用だ」

相手の真意を探るようにジロジロと優子を見つめる雄二。すると優子はびしりと彼を指さすと高々と宣言した。

「AクラスはFクラスに試験召喚戦争の宣戦布告をします」

「「なん……だと……!?!」」

突然の宣戦布告、Fクラスに激震が走る。どうしてAクラスが試召戦を挑んでくるんですか？わけがわからないよ。

「教授!!これはいったい?」

すかさず須川亮は、蟬のように窓に張り付いている老人に問いかけた。住所不定無職の不法侵入者だが、またまた髭に手を当てると鋭い指摘をする。

「うむ、さしずめFクラスを叩きのめすことで学園の秩序を正したいのじやろう」

「だにい!?!ふざけたことをしやがってえ!!」

「ホーウ、ヒョウテキトージョーダナ」

「こいつがAクラスか。もろそうだな」

「いやいやいや!アンタたち、何で当然のように不審者を受け入れているのよ!?!まともなのは私だけか……!?!」

それを言っっちゃあお終いよ。ポートを用意しろ。

それはともかく、眩暈がするほどのFクラスの愚かさに優子は衝撃を受けた。世界は驚きと奇跡に満ちている。これが学園スラムであるFクラスの実態だ。

一呼吸置いた優子は雄二を睨むと大声を出した。

「とにかく!最高クラスの私たちには学年の風紀を正す義務がある!勉強もせずに試験召喚戦争で暴れるアンタたちにお灸を据えないといけないいわ!」

「自分たちが正義ってか?はんっ……:気に入らねえな」

「そうだよっ!それにAクラスともあろうものが試召戦後のクラスに宣戦布告するなんて卑怯だっ!それでも人間か!?!最低っ!お前ら人間じゃねえ!」

「アキ……:あんたにだけは絶対言われたくないと思うわよ」

卑怯とらつきようが好物な女子高生、いったい何井何奈だ……?」

いつもなら一蹴するバカの言葉に、雄二も首肯する。

「そのバカが言うように確かに卑怯だ。随分と最高クラスらしからぬ戦い方をするんだな」

「あら、勝てば官軍負ければ賊軍。大事なのは過程ではなく結果でしょ?」

「くっ! 非の打ち所がねえ正論だ……!」

「たしかにつ!」

「……………納得!」

「負け犬に正義はないからのう」

「アンタも随分とFクラスに染まったのね、秀吉」

卑怯上等・死人に口なしを地で行くFクラスに、優子は正直引いた。ついでに人間性が腐りFクラス化が進行している弟を心底軽蔑した。

実のところ、最高クラスらしからぬフェアでない戦い方には、優子も違和感があった。Aクラスならむしろ、万全の状態の敵と対峙して、余裕で勝利すべきなのではないかと。それに今朝、高橋先生から話があったとき、代表が想像以上に乗り気だったのも気になる。

とはいえ、使者である自分のミッションはFクラスとの試験召喚戦争を始めること。キツとFクラス代表の雄二を見つめ、言葉を促す。首をならすと雄二はニヤリと笑みを浮かべた。

「こつちも望むところだぜ、正義の味方さんよお」

「ふーん、話が早くて助かるわ」

「まあな。どうせ結果は変わらねえ。いつそのこと代表同士の一騎討ちで手短に勝負を決めないか?」

「……………別に構わない」

「だ、代表っ!」

「……………ただし、負けた方が勝った方の言うことを聞く」

いつの間にか自分の隣に黒髪ロングの美少女がいることに気づき優子のはけぞった。彼女こそ、Aクラス代表の学年主席・霧島翔子だ。

普段は感情の読めないポーカーフェイスを貫いているが、今は違う。心なしか雄二を見つめる視線が熱っぽく、キラキラした瞳は恋する乙女のそれだ。にもかかわらず、浮気した亭主に対する嫉妬や不満

が表情にあらわれており、身体全体から怒りと憎しみの炎が燃え上がっている。

端的に換言すれば、頬を膨らませてむくれているのだが、周囲に漂うオーラは恐ろしく今にも雄二のムスコを切り落としそう、ということだ。

悪寒を感じ玉ヒユンする雄二だったが、試召戦を始めた目的が目の前にいる以上、引くことはできない。じとりと大蛇のように見つめてくる翔子を睨み返す。

「いいだろう。受けて立つぜ」

「……交渉成立」

「ちよ、ちよつと待って！せめて5本勝負にしましょう！代表が負けるとは思わないけど、もしもを避けたいわ！」

「いいぜ。だが各試合の科目は俺たちが選ぶ」

「うっ……！仕方ないわね……」

雄二と優子が交渉をしている傍に立つ翔子。そんな彼女に明奈は勢いよく抱き着いた。

「翔子ちゃん！久しぶりー！」

「……明奈。元気？」

「いえーいとハイタッチする2人。楽しそうに笑う明奈と、嬉しそうな翔子。思わぬ百合供給にFクラス男子たちは、てえてえ、を連呼する。V T u b e r にスパチャしてそう。」

そんな2人を雄二は怪訝そうな顔で見た。

「あん？お前ら知り合いだったのか？」

「えへへー、中学のときからの友達なんだあ」

「……親友」

ジャンジャジャ〜ン！今明かされる衝撃の真実ウ！学力最底辺と最高峰の2人が親友ということは、意外と誰も知らないことだった。

Fクラス生徒たちは、ほう中学校からの親友ですか……たいしたもんですね、と言わんばかりに有識者ぶった表情で2人のことを見ている。脳内に広がっているのは百合妄想だろう。

一方、受け入れがたい事実には優子は白目蒼白になった。吉井明奈……恐ろしい子ッ！

「し、信じられない！まさか代表が学年一のバカと親友だなんてっ！」
「翔子、いくらなんでも少しは友達を選んだ方がいいぞ？バカが感染っちまう」

「ちよつと！どういうことっ!？」

学力的には足して2で割ればちようど良さそう。ただし常識が足りないのは明奈も翔子も一緒。そういう意味では似た者同士なのかもしれない。

雄二の発言に明奈は頭から湯気を出して抗議した。知恵熱ではない、怒りの湯気だ！俺の怒りが有頂天！詰め寄られた雄二は冷たい目で明奈を見降ろすと鼻で笑った。

「お前のバカさは他人に悪い影響をおよぼすレベルで最悪だつてことだ。わかったら反省しろバカ」

「酷いっ！最低無神経ゴリラだっ！顔も頭も性格も悪い不良在庫のくせに！キングゴングのなりぞこない！」

「なんだア？てめエ……」

雄二、キレた!!

ボキボキと手をならし拳骨の準備をする。そんな雄二と明奈の間に翔子が割つて入る。

「……明奈は確かに成績が悪い。それでも私の大切な親友。いくら雄二でもそんなこと言わないで欲しい」

「ううううっ！翔子ちゃああん！」

両腕を広げて明奈を守るように立ちはだかる翔子。最愛の旦那様が第一とはいえ、大好きなお嫁さんのことを貶されて怒らない女ではない。そんなカッコいい翔子にジーンときた明奈は感極まって腰に抱き着いた。なにこれ百合じゃん。

最高の百合展開にガッツポーズをとり涙を流すFクラスのキモ豚たち。KIMOI、KIMOIER、KIMOIEST。対して、愛しの彼女をポツと出の女にとられた美波と瑞希は、静かに修羅を燃やしていた。これまでにない禍々しい嫉妬の炎が2人の身を焦がす。

寝取られやレイプは脳を粉々に破壊するよ。優しいものを見たり想像して脳を守ってね。

正確には、翔子は中学校からの親友なので、むしろポツと出の女は美波と瑞希になるのだが、そんなのは些細なこと。答える立場にないので答えは控えるが問題はないという認識だ。2人は都合の悪い事実から目を背けることにした。

「1つ気になったのじゃが、雄二と霧島は知り合いなのかのう？下の名前で呼び合うなど、随分と親しげじゃが」

秀吉の問いに先ほどまで騒々しかったクラスがしんと静寂に包まれる。いい質問ですねえ！そんななか、翔子はほんのり頬を染めて咳く。

「……雄二とは幼馴染」

「「死ねえ坂本雄二いいいいいい!!」」

「危ねえ!」

翔子の言葉を合図にFクラス中から、彫刻刀やカッターナイフなどの殺傷性の高い道具が、雄二の顔面へと飛んで行った。それをよける姿はまさにM A T R I X。黒板に刺さった刃物で雄二の頭の形ができていた。

「いきなり何すんだお前ら!」

「百合の間に挟まる男は殺してもいい。古事記にもそう書かれている」

「幼馴染だ!幼馴染だろう!?!なあ。黒髪美少女の幼馴染だろうおまえ。首置いてけ!なあ!」

「お前を殺す」

デデン!

突然の非モテ男子たちの怨念をぶつけられる雄二。超理不尽。これぞFクラス。

一瞬のうちにFクラス男子たちは黒装束に三角巾を被り、モーニングスターや鎌などの武器を掲げる。Aクラスの2人を無視したFF F団による粛清が始まった。

そこは、狂気に満ちた無慈悲な楽園だった……。文月学園の底辺、

Fクラスへようこそ。ここは狂気の最高峰。

ふざけんなあ！と叫び逃げ惑う雄二と追い回すFFF団。そんな珍百景を放置して翔子は明奈の方を向く。愛しの旦那様がしぶとい死にぞこないであるがゆえの無視だ。さすが学年主席、お頭の出来が違いますよ。

「……酷い教室。明奈は大丈夫？」

「全然っ！最低なクラス環境だよ」

「……そう」

不満げに頬を膨らめます明奈を翔子は優しくなでた。霧島翔子は私の母になってくれるかもしれない女性だ！そんな毒電波を受信しつつも明奈はデレデレする。

このとき翔子はクラスメイトも含めたFクラス全体のことを指していたが、明奈は教室設備についての感想を語っている。このすれ違いが後々、Fクラスを恐怖のどん底に突き落とすことを、まだ誰も知らない。

……

その後、Fクラス生徒たちに追い回された雄二は、昼休みになると明奈らとともに屋上で集まった。制服はボロボロでまだ生傷も少し残っている。

「くそっ……あいつらマジで容赦ねえな……」

「いやー見事にボロボロだねー。大丈夫？」

「心配している割に随分と嬉しそうじゃな」

「……他人の不幸は蜜の味」

これぞFクラス。ほくほく顔の明奈に雄二は軽く殺意を覚えた。

「で、どうすんのよ坂本。Aクラスと一騎討ちなんて勝てなさそうだけぞ」

「確かにのう。常識的に考えてAクラス生徒を1人ずつ囲んでリンチしないと勝てぬのではないか？」

「いや……むしろ狙い通りだ。科目を選べる代表同士の勝負なら、勝ち目はある」

美波と秀吉が不安そうに問うと雄二はしたり顔で答えた。その自

信ありげな態度に5人は不思議そうな表情を浮かべる。

「えー？翔子ちゃん相手じゃ雄二に勝ち目なんかなさそうだけど」

「吉井、大化の改新がいつに起きたかわかるか？」

「……わかんないけど」

「ヒントは飛鳥時代の出来事ということじゃな」

「あーじゃあ2014年くらいの話だね！」

ASKAの話はやめてさしあげろ。

秀吉の助け舟も空しくバカな答えを出す明奈に、雄二は長い溜息を吐き呆れかえった。

「正解は645年。無事故の大化の改新と覚えられるが、俺は翔子に625年と教えてしまった。あいつは一度覚えたら忘れない。もし出題されれば、確実に間違えるだろう」

「むふふ。何だかんだ言いつつも雄二って翔子ちゃんのことわかってるんだね。何だかカップルみたい」

「確かに。意外と坂本と霧島ってお似合いなんじゃない？」

「何だか夫婦みたいですね！」

翔子の弱点を語る雄二に明奈は茶々を入れる。によししながら、ユーたち付き合っちゃいなYO、と言わんばかりに攻める。こいつあおせっかい焼きの吉井明奈！翔子の恋路が心配なんで雄二にくつついてきた！

その言葉を待っていたとばかりに美波と瑞希が援護射撃する。翔子という最大のライバルを目にした今、少しでも明奈の周りにあるフラグはへし折りたい所存であった。

「ばっ、ちげーし！好きじゃねーし！別に翔子のことなんて！」

3人からの生暖かい視線に対して、雄二は顔を真っ赤にして否定する。さながら特定の女子に悪戯ばかりする小学生男児がクラスの女子に、誰々ちゃんのこと好きなんでしょ、と言われたときの反応のようである。模範的ツンデレというやつだ。誰得ですか？

「ところで、そのお弁当でもしかしてアキの手作り？」

「うん！なにせ一人暮らししてるからねー」

「へえ！随分と美味しそうね。さすがアキ」

「す……すごいですっ！吉井さんって料理上手なんですね！」

「いやあく……それほどでもおっく？」

話題を変えようと美波は明奈のお弁当の話をする。正直、雄二のことなんて興味がないから仕方がない。美波の世界は明奈を中心に回っているのだ。

自作のお弁当を瑞希や美波に褒められてデレデレする明奈。ひぎ元の小さな弁当箱には色とりどりのおかずが詰まっていた。夕食の残りや作り置きしたおかずを駆使して作ったお手軽弁当だとか。

本当は食費すらも削ってソーシャルゲームに課金したいのが明奈の本音だ。ただそれをするを超過保護な姉が飛んで来るので、したくてもできないという。一度やったら大変なことになったとか。

明奈のことを溺愛している姉・吉井玲は、常日頃から最愛の妹が健康的な一人暮らしをできているのか心配している。チャットアプリで每晚声を聴かせないと何度も執拗に鬼電してくるほどだ。そのため、明奈は毎日写真付きで食べたものを姉に送っている。まるでRIZAPだ。

それはそれとして、美味しそうな明奈のお弁当に雄二たちも感心した。

「確かにうまそうだ。バカでも料理はできるんだな。俺のバランスと交換しようぜ」

「ごめんね。ゴリラ語わかんないから、雄二の言ってることもわかんないや」

「は？殺すぞ」

「どつちもどつちじゃのう」

「……………筍の背比べ」

バランスとはプラスチックでできた葉っぱのことだ。お弁当の仕切りとかで使われる。

全盛期の大英帝国も真つ青な雄二の理不尽契約に思わず秀吉と康太は苦笑する。ちなみに、この2人も自分のお弁当にあったパセリやたんぽぽの花と明奈のおかずを交換しようと考えていた。目くそ鼻くそである。

ゴミを押し付けておかずを奪い取ろうとする3人の箸に明奈も応戦する。その姿はスターウォーズのジェダイ同士の戦いを彷彿とさせる。フォースと共にあらんことを……。

4人でジェダイごっこをしている一方、美波と瑞希は談笑している。そんな和やかな昼休みももうすぐ終わりだ。明日はいよいよ決戦だ。

.....

放課後、忘れ物をしてしまった明奈はFクラスの教室に戻った。すでに日も落ちつつある夕方、教室はオレンジ色に染まっている。中にはボロボロの卓袱台で一生懸命勉強している瑞希がいた。

「あれ、姫路さん？まだ残ってたんだ？」

「吉井さん……はい、明日の戦いで少しでも皆さんのお役に立ちたいので」

どうやらこれから試験を受けるようだ。自分と違って勉強熱心な瑞希に明奈は尊敬の念を覚える。

「姫路さんってすごい頑張り屋さんなんだね」

「私にはこれくらいしか取り柄がないですから」

素直に褒める明奈だったが瑞希は少し悲しげに俯く。自己肯定感が低いからこそ、無理をしてしまうのだろう。けほけほと咳をしながらも問題を解く手は止まらない。

そんな瑞希の卑屈な自虐を明奈は笑顔で否定した。

「そんなことないよ！姫路さんがいてくれるおかげで癒しがあって皆ハッピーだよ！」

なお、視線はその豊満なバストに集中している。ハレンチなのはいけないと思います！

それに気づいていないのか、瑞希は頬を染めて嬉しそうに話す。恋する乙女のように。

「ふふ……、やっぱり吉井さんは優しいですね」

「そうかなあ？えへへ」

「……坂本君から聞きました。吉井さんは私のためにAクラスの設備を勝ち取ろうとしている、って」

そう言うと瑞希はぎゅっとスカート裾を握りしめる。自分が明奈の負担になっっていることへの負い目と、彼女に少なからず心配されていて想われていることへの嬉しさが、瑞希のなかで複雑に混じり合っていた。

「そうだよー。だって姫路さんが辛いのは嫌だから！」

そんな瑞希の気持ちに気づくわけもなく、明奈はのんびりとした調子で答えた。一見するとぼやぼやしたバカだが、友達への気遣いと愛は誰よりも深いのが明奈だ。

「私ね、友達と楽しい学園生活を送るのが夢なんだ」

「楽しい学園生活、ですか？」

「うん！雄二や秀吉、ムツツリー二とバカなことやって、翔子ちゃんとも恋バナして。もちろん、美波ちゃんや姫路さんともいっぱい遊んで！」

「吉井さん……」

「だから、クラス設備のせいで姫路さんが苦しむのは、絶対にイヤ」

じつと瑞希の目を見つめて決意をあらわにする。想い人の思わぬ表情に瑞希はきゅんとしてしまう。

「姫路さんは、もう一度振替試験を受けられるなら受けたい？Aクラスに行きたい？」

「……Aクラスに？」

「姫路さんが望むなら私は応援する」

瑞希を見つめる明奈の瞳が不安に揺れる。離れたくない。だけど、彼女のことを思うなら後押ししないとイケない。そんな相反する考えが、明奈の心の底で渦巻いていた。

いくらバカとはいえ、明奈も瑞希がAクラスに編入するのが最善だということを知っていた。だというのに、試召戦でAクラスの設備を奪う、という勝ち目の薄い賭けに出たのは偏に彼女のエゴだ。どこか懐かしくて愛しい瑞希と一緒にクラスで青春を送りたい。そんな願望が明奈を動かしていた。

彼女の想いは残念ながら瑞希には伝わっていない。だが漠然とした明奈の愛を感じたことで、瑞希は天にも昇る想いだった。シャーペ

ンを置き立ち上がると瑞希は明奈の方へと歩を進める。

「吉井さんは可愛いですね」

「姫路さん？」

ぎゅつと明奈のことを抱きしめる瑞希。恍惚とした笑みを浮かべている彼女だったが、その表情からは何やら闇を感じる。ただ抱きしめられた明奈からはその表情もうかがえない。突然の行動に明奈は目をぱちくりとさせている。

「……………どこにも行ったりなんかしません。貴女の愛があれば、私は不滅です」

そう言い放つと明奈から瑞希が離れた。張り付いたような笑みを浮かべるその顔には影がさしている。それは夕陽が生んだものなのか、それとも彼女の内面のあらわれかはわからない。

なぜだかわからないが引き込まれてしまった明奈は、その場で瑞希に見惚れているかのごとく立ち惚けていた。そんな彼女の耳元で瑞希はささやく。

「明日の決戦……………私、頑張りますから。精一杯応援してくださいね？」

マリア様……………これは友情？それとも恋なのですか？

少女たちの想いが交差するなか、遂に最終決戦が始まる。

バカ女とAクラスと5本勝負

「では、これよりAクラス対Fクラスの試験召喚戦争を開始します。形式は一对一の5本勝負。両クラスとも準備は良いですか？」

「ああ」

「……問題ありません」

学年主任であり今回の試召戦の立会人でもある高橋先生が確認をとる。知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる長い脚が美しい。

一騎討ちの会場となったのがAクラス。広大な教室と豪華絢爛な設備に、Fクラス生徒たちは喉を鳴らす。とうとう来たなこのときが！試合前の握手を終えて戻ってきた雄二は、明奈たちに近寄って、さっそく作戦会議を始める。

「第一試合に出るのは木下姉らしい。どの科目も高得点をとっている欠点のない優等生と聞くが……」

「秀吉ー。何か弱みとかないのー？ほらほら、言っちゃいなYOー！」

「申し訳ないが、ここで何か言えばわしは姉上に亡き者にされてしまう。何も語らぬぞ」

肩を震わせながらぼそりと呟く秀吉。学園では猫を被っているため誰も知らないが、優子はかなり短気で暴力的なところがある。そのため、秀吉としても下手なことを言うとは後が怖いのである。

だが、そんな事情、雄二や明奈からすればどうでもいいことだ。求められるのは勝利のみ。倫理だとか正義だなんて下らない、そんなもの勝てば後からついてくる、というのが2人の考えだ。

正義は勝つて!?!そりゃあそうだろう。勝者だけが正義だ！

「秀吉、残念だがそうも言ってられねえ。搦め手でなんとか白星をあげてくれ」

「お姉ちゃんのお仕置きなんて少し大人なキスでしょー？目つぶって我慢すれば大丈夫だよー」

「嫌じゃー！お主らは姉上を知らぬからそんなことが言えるのじゃー！というか吉井の家はどうなっておるのじゃー!?!」

頭の良い変な姉がいます。

断固拒否、徹底抗戦な秀吉とその周りでわちゃわちゃ騒ぐ雄二。見かねた美波と瑞希が助け船を出そうと声をかける。

「2人ともあんまり秀吉をいじめちゃダメよ」

「そうですねよ！いくら勝ちたいからって酷いです！」

「えー？お姉さんにビシツと言える男前な秀吉が見たかったのになー」

「男らしい、じゃと？」

その何気ない一言が秀吉の耳をぴくりとさせた。ほんの僅かな挙動。かつて神童だった雄二はそれを見逃さない。にやりと下卑た笑みを浮かべ畳み掛けた。

「仕方ないな。秀吉が女々しい臆病者なんだからしょうがない。別の作戦でいこう」

「女々しい？臆病？」

雄二の言葉に秀吉は頬をひくつかせる。その発言の意図を汲み取った明奈は、瞬時に言葉が続けた。

「やっぱり自分よりも男らしくてカッコいいお姉ちゃんには逆らえないよね、秀吉ちゃん！」

「そうだな！男らしさが微塵もないからって気にするなよ？秀吉ちゃん！」

「お主ら……随分と喋ってくれてくれないか」

意地悪い笑みをにたにたと浮かべながら秀吉の肩に手を乗せる明奈と雄二。これが悪魔的所業というやつだ。もしも僕が悪魔でも、友達でいてくれますか？

外道の悪魔たちにコンビプレーで煽られた秀吉は、拳を握りしめてふるふると震えている。姉への恐怖心など消えてしまった。今、彼を突き動かしているのは、怒りとプライドだ。

「よかろう！姉上を打ち負かしてくれる！そうしたら先の数々の無礼な発言……撤回してもらおうぞー」

「きゃーすっごーい！さっすが秀吉い！男前えー！シビれるうー！！そういうところがカッコいいよー！」

「よく言った秀吉！お前こそ男の中の男だ！蹴散らしちまえ！」

「悪魔たちにまんまと乗せられているわね……」

「大丈夫でしょうか？」

ただ、激おこぷんぷん丸の秀吉に、心配する二人の声は聞こえない。ズバズバと勇ましく死地へと歩を進める秀吉。そんな普段あまり見たことがない秀吉を、優子は意外そうに見ていた。

「秀吉、アンタが相手なのね。随分とまあ男らしいこと」

「そうじゃろう！そうじゃろう！何せわしは立派な、男の中の男じゃからな！」

「そんなことに一喜一憂しているあたり、アンタもバカよね……」

友達の口車に乗せられてしまう単純バカな弟に溜息を吐いてしまふ。身内にこんなバカがいると何だかんだで恥ずかしい。優子は呆れたように額に手を当てた。

「で、どうするの？アンタと私じゃ勝負になんかならないと思うけど」

「おいおい、随分とエッチな縦割れアナルじゃないか。そう言うとしんじはユウイチの釘バットを」

「秀吉いいいい!?ちよおーつとこつちに来てくれるかしらあ〜!?」

「まつ、待つのじゃ姉上！試合前なのになぜわしを連れ出すのじゃつ!?」

「いいからっ！きなさいっ！」

秀吉が水色のラブリートなノートをイケボで読み上げた瞬間、優子が廊下に連れ出していった。音読したのは優子が密かにしたためていた、BL小説『伝説の木の下で貴様を待つ』の二次創作だ。なんて酷いことをするんだ！この人でなし！男の娘！

絶叫しながら弟をお姫様抱っこで悠々と運ぶ優子は、少し情けないところはあるにせよ、誰からどう見ても男前でかっこよかった。本人のあずかり知らぬところで、優子のファンになった女子が急増したとか。ただ、廊下からはドムツ！ザクツ！ぐふつ！という生々しい音が聞こえてくる。暴力による支配、それが木下姉弟の鉄の掟だ。

数分後、制裁を終えた優子が教室に戻ってきた。頬に返り血をつけて鬼のごとく邪悪に笑いながら。

「ふう……。秀吉は急用ができたから帰るみたい。私の不戦勝でいい

かしら?」

「お、おう……仕方ないな」

弱い奴が嫌いだ。弱い奴は正々堂々やり合わず井戸に毒を入れる。醜い。弱い奴は辛抱が足りない。すぐ自暴自棄になる。そう言わんばかりに怒りと憎しみを滲ませる優子。鬼気迫る恐ろしいその姿に、さすがの雄二も押し切られてしまう。

水色のノートを隠すように抱えた優子が踵を返すとともに、不愉快そうに顔をしかめる雄二。ただ不満は優子に対してではなく、秀吉に向けられている。

「チツ、やはり秀吉ごときには荷が重かったか。案外使えねえな」

「なんまんだぶなんまんだぶ。怖いもの知らずの秀吉よ、安らかに眠れ。恨むなら雄二を恨んでね」

「アンタたち本当に友達なの?」

友達を大切にできない人は、誰も大切にできないんだって。そしてね、友達に大切にされたことを喜べない人は、何も喜べないんだって。

だが残念なことにFクラスは友達を平気で使い捨てるクズが集っている。廊下でボロ雑巾のようになっていた秀吉は、覚えておれ……雄二に吉井よ、と呟き息絶えた。秀吉DEAD。

.....

圧倒的暴力の前に秀吉が敗北してしまったが、雄二としてはここで潮目を変えたい。

「よし!次は吉井だ!安心して逝ってこい!」

「冷静に考えるとき、成績優秀者とのタイマン勝負ってフィードバックが大変なことになる……よね?」

「ところで吉井よ。お前はバカなのか?」

「違うよ!いきなり何さ!」

「じゃあ大丈夫だな」

「……………え、どういうこと?」

「いちからか?いちからせつめいしないとだめか?」

雄二は心底バカにしきつたツラで、わざわざ屈んで下から明奈を見上げた。その腹立たしい態度に明奈はイラつとした。1ポイント追

加。1億ポイント貯まるとブッコロすやつだ。

わなわなと震えて拳を握りしめる明奈の肩に手を置くと、雄二は真剣な眼差しで見つめる。戦地に赴く親友に最後の言葉を授けるかのごとく、真面目でシリアスな雰囲気をもとっていた。

「バカじゃないお前なら、Aクラスとの試召戦も余裕だろ？」

全然シリアスじゃなかった。幼稚園児並みの雑なロジックで誤魔化そうとしている。

誰から見てもバカげた話だが少しの間、呆けた明奈は両目を輝かすと大きくうなずいた。

「そっかあ！そうだね！」

世界よ、これが日本のバカだ。

自信満々に胸を張ってのしと死地へ向かおうとする明奈。これでは秀吉の二の轍を踏んでしまう。

「吉井さん！さすがに無謀です！怪我したらどうするんですかっ!？」

「そうよアキー！ウチが代わりに数学で出るからっ！」

「大丈夫だよ二人とも。姫路さんとFクラスのためにも私が全力を出さなきゃ。私の真の実力、烈核解放を見せてあげるよ」

見ていられなくなった美波と瑞希は、何とか止めようとする。だが、明奈はフツと笑うと2人を宥め出した。気分はもうハードボイルド小説の主人公。

「観察処分者の本気、刮目せよ」

獰猛な笑みを浮かべ対戦相手を威嚇する明奈。Aクラスの面々も固唾を飲んで見守っている。もしか、あのバカは何かやるのではないか。そんな考えが皆の脳裏をよぎった。

『勝者、佐藤美穂！』

普通にボロ負けだった。結果は当初の想定通り、3分もかからず明奈が惨敗した。いくら召喚獣の操作が上手くても5倍超の点数差は覆せない。

敗北者の明奈はフィードバックによる激痛でのたうち回っている。ああ、やっぱり今回も駄目だったよ。あいつは筋金入りのバカだからな。

人間のものとは思えない声をあげて明奈は絶叫している。これがリヨナってやつですか？瑞希は、頬を赤らめて、ほんの少し興奮した様子で、そんな明奈を凝視している。ちよつと嬉しそう。こいつも大概やべー奴かもしれない。

「くあwse d r f t g y ふじこーp!!!」

「さて、次はムツツリーニだ。保健体育でねじ伏せてこい！」
「……………任せろ」

死にかけの虫のように地べたを這いつくばる明奈を無視して、雄二は康太に第三試合をゆだねた。もとより期待なんぞしていない。ただ、吉井が苦しむのを見るために、試合をアテンドした外道。それが坂本雄二という男だった。

明奈至上主義の美波は、愛しの彼女をよしよししながら雄二のことを軽蔑するような眼で見る。よせやい照れるじゃないか。雄二にとって下劣、外道は褒め言葉だ。

それはともかく、雄二の声に反応して立ち上がった康太はフィールドへと向かった。保健体育だけは成績優秀者すらも超越する康太は、さしずめ試召戦におけるダークホース。寡黙なる性職者の異名は伊達じゃない。

「キミがボクの対戦相手かい？土屋くん」

フィールドには緑髪のショートカットの少女が腕を組んで立っていた。ボーイツシユな少女、工藤愛子は1年生の冬頃に転入してきた生徒だという。性に並々ならぬ関心があり、恋に恋する少女。興味ありげに目を細めて対戦相手の康太を見ている。

「ボクも保健体育が得意なんだ。ただ、キミとは違って……………実技でね」
「……………邪教徒め」

「じゃきよ……………?とにかく。実践派と理論派のどっちが強いか見せてあげるよ。召喚！」

スカートの裾を掴みピラピラとはためかせる愛子。その若干ハレンチな行動に男子たちは色めきだつ。一方、康太は不愉快そうに愛子を睨みつけた。

ちらりと見えたスパッツ。それが康太からすれば邪道であり許せ

ないことだった。ただ、鼻血を滝のように垂れ流しているあたりスケベ心は健在だ。結局、エッチなんじゃないですか！やだー！

「それじゃあバイバイ、ムッツリーニくん」

「……………加速」

雷をまとった巨大な斧を掲げた愛子の召喚獣が、康太の召喚獣に襲い掛かる。だが、斧が胴体に達する寸前で、康太の召喚獣が姿を消す。戸惑う愛子。すると一呼吸置いて、愛子の召喚獣は全身から血を噴き出して倒れた。

「……………え？」

「……………お前の負けだ」

召喚獣のスペックなどが表示されるモニター上には、土屋康太・572点、という驚異の点数が映し出されていた。総合点数の8割を保健体育で稼ぐ男には、Aクラスの優等生といえども敵うわけがない。

「そ、そんな……………この、ボクが……………」

床に膝をつき悔しそうに下唇を噛みしめる愛子。すると、キツと勝者である康太を睨みつけた。生涯のライバルを見つけた、次は絶対に負けない、そんな想いがビシビシと伝わってくる真剣な顔だ。

これが100日後にムッツリーニに惚れて落ちる女の姿である。なお、康太は試合後に血液が足りなくなり緊急搬送されたとか。スパッツ、恐るべし。

……………

何はともあれ、勝ち星をあげられた。次はFクラスのエースこと瑞希が試合に出場する。

「姫路、頼んだぞ」

「はい。任せてください坂本君」

「なるほど。姫路さんが僕の対戦相手なんだね」

フィールドには学年次席の久保利光がジョジョ立ちしていた。クイツと眼鏡の位置を直す利光の顔は、整っておりインテリイケメン風だ。女子ファンも多いらしくFクラスの男子たちは嫉妬の炎を燃やしている。

「姫路さん頑張れー！」

「吉井さん！吉井さんじゃないかッ！」

「え？えーつと……久保君？」

フィードバックの痛みから立ち直った明奈は懸命に瑞希を応援している。そんな彼女に利光はよく通る声で話しかけた。熱意が伝わってくるため若干、暑苦しい。気圧されるように明奈はちよつぴり身を引いた。

この男、明奈のことが大好きであり猛烈に愛している。そのことは意外にも多くの生徒に知られているらしい。イケメン優等生がクラスのアイドルにアタックする姿に怒り狂ったFクラス男子たちは、凶器を手にして齒軋りしている。実力行使すると不正行為になるのでできないが、夜道は気をつけるべきだろう。FFF団を名乗る輩がリッチするだろうから。

だが、そんなことも我関せずな利光は明奈への熱烈アプローチを続ける。

「よもや君に出会えようとは。乙女座の僕にはセンチメンタリズムな運命を感じずにはいられないな！」

「あ……うん。そうなんだ？」

「今こそ君に伝えたいッ！この湧きあがるパトスをッ！躍動する愛の旋律をッ！吉井さん！僕は君をあい」

「召喚!!」

刹那、教室中に響き渡るほどの大声が、利光の言葉を遮った。見ると巨大なランスを構えた瑞希の召喚獣が仁王立ちしている。明奈への告白を邪魔された利光は苛立たしげに瑞希を睨んだ。

「久保君。私はずうつと思っていたんです」

対して、瑞希は悪戯が成功した少年のごとく無邪気に笑い、嘲るかのごとく利光のことを眺めている。そして、恍惚に満ちた表情を浮かべるとほつりと言い放った。

「男の人は男の人同士で、女の子は女の子同士で恋愛すべきだって」

「まさか僕の告白を邪魔するとは……。堪忍袋の緒が切れたッ！許さんぞッ！姫路さんッ！」

「私は貴方の敵ですよ？久保君」

「利光も召喚獣を登場させたことで、ついに第四試合が始まった。決意した事。それは、それぞれの正義。分かたれたわけを知る由も無く少年と少女は道を選ぶ。」

虚しくすれ違うヘテロとホモの2人を尻目に、明奈は雄二に問いかける。

「ねえねえ、久保君が好きな人って誰なの？」

「バカは黙ってるバカ。そうやってバカなこと言っているからバカのままなんだぞ。このバカが」

「美波ちゃんどいて！そいつ殺せない！」

「あんたを前科者にするわけないでしょっ！」

大きな三角定規片手に雄二を亡き者にせんとする明奈を、美波は羽交い絞めにする。時折、事故を装って明奈の胸を揉んでいるあたり、美波もちやつかりしていた。そんな痴話げんかを延々と繰り広げているうちに瑞希と利光の戦いは佳境を迎えていた。

必死に召喚獣を動かし善戦していたものの、圧倒的な点数差を前に成すすべがないようだ。試合が始まって以来、利光はずつと劣勢に立たされていた。

「ぐッ……なぜだッ！なぜ君はこれほどまでに僕を凌駕するッ！少し前まではこんなに戦力差はなかったはずなのにッ！」

「愛です、愛ですよ久保君」

ほの暗い笑みを浮かべた瑞希は両手を広げて芝居がかった調子で語りかける。彼女の背後にはおぞましい何かが蠢いているように見える。

「愛が私を強くするのはです。そして、試練は愛をより深くします。そうでしょうっ！」

「……ッ！しまッ」

次の瞬間、巨大なレーザーがフィールドを焼き尽くした。あわれ、利光の召喚獣は塵となりアビスに還った。愕然とする利光を見ると瑞希は満足げに口角を一層上げた。

「ありがとうございます。この試練も、私と彼女の愛をさらに深くしてくれてでしょう」

そう言い終えると瑞希は一礼した。刹那、Fクラス側から大歓声が沸き起こる。いまだかつてないハイレベルな戦いに会場の誰もが興奮していた。

利光は眼鏡の位置を再び直し、瑞希に近づくと握手を求めた。負けた立場でありながらも相手を称えるよう利光は実に紳士的だが、瑞希は顔をしかめている。手を差し出そうとしない瑞希だったが、会場の拍手に押される形で、ようやく渋々と彼の握手に応じた。

「認めよう。姫路さんの愛は、僕の愛に負けないほど深くて美しいと」
「……………そうですか」

「だが、僕はしつこくて諦めも悪い。俗に言う人に嫌われるタイプだッ！何度でもアプローチし、必ず彼女の愛を勝ち取ってみせるッ！」

「……………随分と強引じゃないですか？」

「多少強引でなければ吉井さんは口説けないさ」

「……………明奈ちゃんにはぜひとも今後一切近づかないでほしいですね」

「それは無理だなッ！」

長い長い握手を終えると2人はそれぞれの陣営へと戻った。

これで2勝2敗。最後の代表戦で勝負は決まる。

……………

「さて、いよいよ代表戦だ。お前らよくここまで頑張ってくれた。ありがとうな。皆のおかげでようやく」

「雄二のウホウホ長文スピーチなんていらないでしょ。カッコつけてないでちやつちやと行ってきなよー」

「死にたいらしいな」

ボンバーマンみたいなニコニコ顔で殺意の波動に目覚める雄二。恐ろしさのあまり明奈も思わず美波の後ろに隠れた。

「はあ……………まあいい。泣いても笑ってもこれが最後。行ってくるぜ、お前ら」

「ゴリラ兄ちゃんががんばえー！ほらっ皆もー！」

「ゴリラがんばえー！」

「……あいつら後でシバく」

知らぬ間に用意した秀吉と康太の遺影（まだ生きています）を胸に携えて女兒アニメみたいなきことをし出す明奈。そして、それに全力で乗っかるFクラス生徒たち。明日には皆、森の養分になっているだろう。

野太い声援を背中に受け雄二はフィールドに上がった。眼前にはAクラス代表である翔子が待ち構えている。

「……雄二、待っていた」

「翔子、ここでお前を倒す」

静かに熱い火花を散らす2人。溢れ出る闘気に全生徒が息をのんだ。そんな2人の気迫に飲まれることなく、立会人の高橋先生は試合を進める。

「坂本君。教科はどうしますか？」

「小学生レベルの内容の日本史。試験方式は100点満点の上限ありだ」

「そうですね。では問題を用意しますので、少し待っていてください」
そう言う和高橋先生は席を外した。

一時休戦となったことで生徒たちがざわめきだした。Aクラスからは、簡単すぎるだろ、差がつかないのではないか、何がしたいのか、と困惑の声があがる。

一方、Fクラスからも、難しすぎるだろ、日本史なんてザビエルしかわからない、何がしたいのか、という声が出ている。知力の差が出てしまったね。

「……雄二、約束は覚えている？」

「あ？勝った方が負けた方の言うことを聞くってやつか？」

「……順番が逆」

「なっ！うっせーし！んなことわかってるわ！」

すみません……気が付きませんでした。ありがとうボブ。

顔を赤くした雄二を見据えると翔子は力強く言葉を続ける。

「……覚悟、しておいて」

「おいおい。もう勝った気でののかよ？」

「……当然。雄二は私に勝てない」

「そいつはどうかな？」

そうこうしているうちに決戦の準備が整ったようだ。視聴覚室に移動し試験が始まる。Aクラス教室の巨大モニターには、試験を解く2人の姿とともに、試験問題が次々と表示されていった。小学生レベルの問題ばかりだが、Fクラス生徒たちは難問に遭遇したかのように頭を抱えて悩んでいる。

「あつーアキー！見て！」

「あれって……もしかして！」

ふと表示された問題に美波と明奈が声をあげた。それは翔子が唯一間違えるであろう、大化の改新の年号を答えさせるものだ。欲していた問題の登場に、思わず美波と明奈はお互いの手を握って喜ぶ。もしかしたら、もしかするかも？そんな淡い期待がFクラス生徒たちの間に広がる。

『はい。採点が終わりましたので、試合結果を発表いたします』

気づけば試験が終わっていた。翔子と雄二の答案用紙を持った高橋先生が、それぞれの点数を言い放つ。まずモニターに表示されたのは、翔子の点数、97点。当然、満点をとるだろうと思っていたAクラス生徒たちがどよめき出す。

難攻不落の翔子が失点したことでFクラス生徒たちは雄叫びをあげた。憧れのシステムデスクがついに自分たちのものに！期待は確信へと変わり、皆が手を取り合って喜びを分かち合っている。

すると、今度はモニター上に雄二の点数が表示された。点数は53点。数字の順番を入れ替えても、逆立ちして見ても、翔子には遠く及ばない点数だった。想定外の事態に誰もが呆然としている。

『試験召喚戦争はAクラスの勝利！』

高橋先生の透き通った声が、今回の試召戦の勝敗を告げる。

この瞬間、Fクラスの備品はちやぶ台からミカン箱へと格下げされた。

.....

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「神！仰せのとおりに！」

「ちよっ……！やめなさいアキ！」

「コロッセオ！コロッセオ！こいつは殺さないダメだあ！」

巨大な分度器を持って暴れる明奈を美波が抑え込む。この構図、進研ゼミで見たことある！

そんな2人はさて置き、床に座り込み項垂れる雄二に、翔子は話しかけた。

「……約束、守ってもらう」

「わかっている。何でも言うがいいさ」

「……それなら。雄二、私と付き合って」

翔子の一言に教室が凍りつく。高嶺の花の学年主席が冴えないゴリラに告白したのだから当然だ。顎が外れんばかりに口を大きく開けてAクラス・Fクラスの生徒たちは哑然としていた。

一方、この場で唯一、翔子の恋を知っていた明奈は、いやんいやんと頬に両手をあてて、くねくねと揺れていた。恋に恋する乙女的には大観衆の前での告白は胸キュンポイントが高かったらしい。

「やっぱりか。お前はまだ諦めていなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと雄二のことが好き」

「一応聞くが、拒否権は？」

「……ない。今からデートに行く」

「なっ！そんなの行くわけないだろっ！」

「……問答無用」

いつの間にか手に持っていたスタンガンをバチバチと鳴らす翔子。突然の実力行使に雄二も成すすべなく絶叫し失神した。哀れだねえ。

雄二が気絶したことを確認し、翔子は首根っこを掴んで引きずっていく。これからラブラブデート（当社比）のようだ。長時間拘束される戦争映画でも一緒に見に行くのだろう。雄二からすれば長く苦しい戦いが待ち構えている。

帰りがけ、翔子は明奈に話しかけた。

「……またね、明奈」

「うん！またね、翔子ちゃん！」

明奈は太陽のような笑顔で翔子と雄二を見送る。翔子へのおめでとう、と、雄二へのざまあ、で、ほわほわしている。親友の長年の恋が今ようやく成就したことに明奈は感動していた。

そしてその後ろで美波と瑞希は、ほつと胸をなでおろしていた。明奈の親友である翔子が、雄二にご執心であり、自分たちの恋のライバルではないということに安心したのである。

実際は、雄二と明奈を愛しており、2人と添い遂げたいと考えている翔子が、美波と瑞希のライバルであることには変わりないのだが。まさか学年主席がそんなバカのバイキングのような欲張りセットを求めているなんて、誰も思うまい。

代表らの恋愛は置いておくとして、これでFクラスの試験召喚戦争は終わってしまった。Fクラス生徒たちはそろそろと出口へと向かい解散しようとしている。んーと背伸びすると明奈は残念そうに独りごちた。

「あーあ……何とかFクラス教室を良くしたかったのになー！雄二の阿呆ー！」

「ふふふ、仕方ないですよ。我慢しましょう」

「はあく……結局、ウチらはあの汚い教室に戻らないといけないのね」

「あー、お前たち。そのことなんだが……」

「あれ？鉄人、どうしたんですかー？」

見ると分が悪そうに鉄人こと西村先生が頭をかいていた。

「お前たちは当面の間、補習室で授業を受けてもらう。Fクラス教室は立ち入り禁止だ」

「「なん……だと……」」

まさかの教室の使用禁止にFクラス生徒たちは驚愕する。いくら学年最底辺のバカクラスが相手とはいえ、教室がないなんて前代未聞だ。明奈は西村先生に詰め寄り抗議した。

「まさか差し押さえ!?差し押さえですかっ鉄人！くっ……！どこまで冷徹なんだ、あのババア長はっ!?干からびろー！」

「まさか学園長のことをババア呼ばわりしていないだろうな、吉井」

「まつさかカーニバル！してないですよー！ぷすーぷすー」

「吉井さん……全然口笛吹けてないですよ……」

都合の悪いことを誤魔化そうとする明奈。吹けていない口笛ほど無様なものはない。明奈の奏でる空気音をBGMに西村先生は、ため息を吐くとFクラス生徒たちに向かって語りかけた。

「Aクラス代表の霧島が中心となり、生徒たちから多数の陳情が寄せられたようだ。いくらなんでもFクラスの教室は酷すぎる、と。それを受けて学園側は、Fクラス教室の改修工事を実施することを決めた」

「翔子ちゃんだ……！翔子ちゃんが動いてくれたんだっ……！」

「あとFクラスの教室からアスベストが見つかった」

「いくらなんでも酷すぎないかっ!?!」

衝撃の事実にも明奈を筆頭とするFクラス生徒たちは愕然とした。よもや数十年前に使用が禁止されていたモノが自分たちの教室で使われていたとは思えない。問題発覚を受けて、建材の調達などを担当した教頭による謝罪会見が近々開かれるそうだ。ざまあである。

とはいえ、そのきっかけを作ってくれたのは、明奈のことを愛し心配してくれた翔子だ。親友の優しさに胸を打たれた明奈は感動のあまり涙をこぼした。数人の勇気ある行動が、人の心を突き動かし、世の中を大きく変える。

西村先生はFクラス生徒たちが喜ぶ様を眺めると、満足げに頷いて言葉を続けた。

「そして、そのAクラス代表からの要請を受けて、俺が貴様らFクラスの担任となった。これから1年間、勉強漬けの毎日を送ろうじゃないか」

「「な、なんだってー！」」

希望に満ちた表情から一変してFクラス生徒たちはムンクの叫びのような絶望的な顔になる。

「霧島から聞いたぞ。先進国の学び舎とは思えない、嫁に悪影響を及ぼす酷い学習環境だから立て直してほしい、とな。嫁云々はさて置き、確かにお前たちはやり過ぎた。学力が全てではない、とはいえ蔑

ろにしているわけじゃないんだ」

「説教臭いしおっさん臭いよ鉄人！だいたい、同じ教室にゴリラは二頭もいららない！森に帰れ！」

「吉井……やはり貴様が一番の問題児のようだな。まずは目上の人間に対する敬意をしっかりと育んでもらうぞ」

額に青筋を立てた西村先生は、ガシツと明奈の頭蓋骨を掴むとメキメキ音を立てながら締め始めた。宙ぶらりんになって、ギエピーと悲鳴を上げる明奈を無視し、西村先生は力強く宣言する。

「俺が来たからには貴様らの好きにはさせせん！貴様らの冒険はここで終わりだ！」

こうしてFクラスが引き起こした騒動はあっけなく幕を閉じた。

ゴースト オブ バカ

新学期が始まり1ヶ月ほど経ったある日のこと。春の陽気に誘われて二度寝してしまった明奈は、当たり前前のように遅刻していた。

るんるんとスキップしながら向かうのはFクラスの新たな拠点である補習室だ。担任の教師が西村先生なのはマイナスだが、教室環境が良くなったのは嬉しい。瑞希も安心して授業を受けられているうなので明奈としては大満足だ。

勢いよく扉を開けると、壇上に立つ西村先生に向かって、明奈は元氣よく挨拶した。

「鉄人、おっはよーございまーっす！」

「持ち物検査だ！カバンとポケットの中身を出せ、吉井！」

絶望の幕開けだった。

持ち物検査。それは生徒たちにとって死にイベともいえるクソイベントだった。抜き打ちで、あらゆる娯樂にかかわるモノが、根こそぎ略奪されてしまう。とりわけ、普段から学業に関係のない娯樂品を持ち込んでいるFクラス生徒たちは、毎回多くが検挙され持ち物を没収されている。

数分も経たないうちに、明奈の持ち物が教卓の上に積み上げられた。学業に関係のないモノは、いずれも西村先生が没収した後日、保護者のもとに送り返すことになっている。

「まったく！学業に関係のないものを山のように持ち込むとは何事か！」

「ぶーぶー。少しくらい良いじゃないですかあー」

「良いわけあるか！貴様も高校2年生として節度を持ってだな」

「誉れは涙で死にました」

「よろしい。齒を食いしばれ」

その道を歩み続ければお前も獣になるぞ。

青筋を立てた西村先生は、明奈の両側の側頭部に拳の先端をネジ込んで圧迫する。激痛のあまり明奈は、ほぎゃー、と悲鳴をあげながら両手をばたつかせた。

教卓の後ろには、既に没収したモノが積まれている。ゲーム機や漫画雑誌だけでなく、高級ヘッドホンと音楽プレーヤー、一眼レフカメラ、など高額ガジェットらしきモノもあった。

折檻が終わり涙目になった明奈がトボトボと席に戻る。生徒全員が着席したのを確認すると、西村先生は教卓を強く叩き、座っていたパイプ椅子を補習室のドアへと叩きつけた。担任による暴力的な奇行にFクラス生徒たちは目を丸くさせ困惑した。

「いいか？お前らは学生なんだ、テストで点を取る以外に存在する意味なんかねえんだ。取れ。点を取って数字で自己表現しろ。いいじゃねえかよ。わかりやすいじゃねえかよ。こんなにわかりやすく自己表現できるなんて幸せじゃねえかよ。テストで点を取るだけだ、良い点取るだけでお前らは認められるんだ。こんなわけのわからねえ世の中でこんなにわかりやすいやり方で認められるなんて幸せじゃねえかよ。最高に幸せじゃねえかよ」

灰皿の飛び交うブラック不動産企業の社長さんみたいなことを言いなさる。この2週間、Fクラス生徒たちの生活態度を見ていて西村先生は考えを変えた。

厳しく冷徹に接しなければ、このバカたちにはわからない。たとえば生徒たちから恨まれようとも、真人間に矯正する教育を、彼らが社会に出る前にすべきだ。西村先生はそう決断した。それゆえ唐突に従来の態度を一変させたのである。

普段使わないような汚い言葉で罵る担任に、さしものFクラス生徒たちもたじろいでしまう。ただ1人、明奈は豹変した西村先生に物怖じすることなく、ビシツと拳手し声をあげた。

「鉄人！いいですか？」

「なんだ吉井！」

「私たちは不得手なことは一切やらず、得意なことだけをやるようにしています。嫌いなことを無理してやったって仕方がないでしょう」「ほう？」

「だから没収したモノを返してください。私たちが得意なのは勉強することではなく遊ぶことです」

明奈の発言に鉄人は深く頷いた。拳はゴキゴキと鳴らしている。

大手自動車メーカーである本田技研工業の創業者、本田宗一郎の言葉だ。内容だけ見れば素晴らしいが、タイミングが最悪。これでは娯楽に没頭して勉強から意地でも逃れようとするただのダメ人間だ。

「偉大なる先達の言葉を言い訳に使うんじゃない！」

「ふぎやっ！」

案の定、西村先生から明奈は拳骨を喰らってしまう。鈍い音が鳴ると明奈の頭頂部に大きくはれ上がったタンコブができた。一言多いバカに雄二は耳打ちする。

「おい。何で今あんなこと言うんだ」

「だってえ……思いついちやっただもーん」

「思いつくのは天才。軽率に口にするのはバカ。わかつたか？」

「おっ？今、吉井の心にチャツカマンしましたけど？それ今吉井の心にチャツカマンしました、バカじゃありません。あつ！人のことバカって言っちゃいけないんだバーカバー……バーカ！人のことバカって言っちゃいけないですよまったくバカめ。……………ワカメ。いや、今日ワカメスープ飲んだだよ、そういえば」

「お前と会話していると頭がおかしくなりそうだ」

「そうか、そうか。貴様らを見ていると俺は頭が痛くなってくるよ」

深々とため息を吐くと西村先生は明奈を見つめて論すように言葉を投げかけた。

「お前たちも2年生だからといって遊び呆けてはいかん！今のままではダメだというのがわからんのか！」

「今のままではいけないと思います。だからこそ、私たちは今のままではいけないと思っている」

「……………もういい。学業に関係のない持ち物はすべて没収する！」

西村先生は疲れ切った表情でFクラス生徒たちから没収したモノが入った袋を担いで補習室を立ち去った。ちなみに袋は大柄な西村先生の肉体が見えなくなるくらいに大きく膨らんでいた。

……………

補習室のそこら中で不平不満が聞こえてくる。誰もが没収された

モノについて語り愚痴をこぼしていた。

「俺はゲーム機を奪われちゃった。昨日発売のゲームだったのに……鉄人め！」

「わしは演劇の小道具などを没収されたのう」

「……………カメラと盗聴器」

「みんなも色々大変だねー。私もゲーム機没収されちゃったよ」

「待て。お前は他にも色々あっただろ」

「うん。UNOとトランプと人生ゲームでしょー？他にもボードゲームと漫画も沢山あってー。あと、お昼寝用の寝袋、抱き枕、アレクサも没収されちゃった！」

「お主は何をしに来ておるのじゃ……………」

「キャンプかっつてくらいデカいカバンに、そんなモノ入れてきたのか」
学校を何だと思っっているのか。舐め腐ったバカであった。

それはさておき、抱き枕という言葉に反応して2人の乙女が明奈に話しかけてきた。

「災難だったわね、アキ」

「美波ちゃん、姫路さん！2人も何か没収されたの？」

「ウチらも抱き枕がアウトだったわ……………まさか今日やるなんて」

「そうだよねー！抜き打ちなんて最低だよ！」

「それにしても、吉井さんもムツツリ商会の抱き枕を持っていたんですね。知りませんでした」

「ちよつと意外かも。アキは誰の抱き枕を持つてるの？」

「お姉ちゃんが買ってくれたIKEAのサメだよ。というか、ムツツリ商会って何？」

「アツハイ……………」

「なんで2人とも縮こまってるの？」

罪悪感……………ですかね？

純粋な娘にいかがわしいことを教えてしまったときのような心苦しさに瑞希と美波は苛まれていた。本当なら土下座したいところだが今やってしまうと明奈に感づかれてしまうので踏みとどまっている。

そもそもムツツリ商会は秘密結社である。ほの暗い欲望を抱えた者には門戸を開いているが、いくらゲスでバカとはいえ普通の女の子である明奈が、そのような組織を知るよしもない。言うなればシャバの人間に情報漏洩したという、やらかし案件だ。

「んー。ムツツリ商会って何だろう？ムツツリーニ何か知ってる？」

「……………知らない」

「でも名前が」

「……………記憶にございません」

疑問符を浮かべる明奈だったが、語感から何となく康太と関係するということはわかったようだ。だが、当の本人は何を聞かれても堅く口を閉ざしている。私は貝になりたい。

普段のガードが緩いうえに、健全な内容であればむしろ撮影協力さえしてくれる明奈は、ムツツリ商会からすれば代えがたいほどに大事な被写体だ。そんな彼女に、もし事業内容がバレて、きわどい写真データの削除や撮影拒否をされてしまったら、その損失は計り知れない。

「まっまあ、とにかくっ！関係ないモノを持ち込んだんだから没収もやむなしよね！」

「そっそうですよねっ！学校は勉強する場所ですからっ！」

「えー…………そりやあそうだけどー。みんなで遊びたかったなー」

美波と瑞希も必死に話題をそらし誤魔化そうとする。彼女たちとて『アキこれ：春のバカ祭り』が被写体の要請で出版差し止めになる事態だけは避けたい。本人さえ知らなければ、没収された2人の抱き枕だっていずれは再販されるはずだ。

2人の懸命な工作のかいあって明奈の意識もそらされた。しよんぼりする彼女に、美波と瑞希は身もだえする。これが”萌え”というもののかっ！

「いや。今の時代に生徒の持ち物を奪うなんて横暴だ。絶対に取り返すぞ」

それでも、納得がいかない雄二は不服そうに鼻を鳴らす。隣にいる秀吉と康太も奪還作戦をやる気満々のようだ。

「でも雄二。どうやってやるの？」

「とりあえず情報収集しようじゃないか。後は臨機応変に行こうぜ」
つまりはノープラン。だが、3人寄れば文殊の知恵、4人寄れば何か凄そう、の精神だ。明奈は、乗った！と言い切ると雄二と固く握手をした。役者はそろった。

.....

放課後、没収品奪還作戦に参加した4人は男性教師用のロッカー室へと向かっていった。

明奈によれば、今回の持ち物検査はFクラス限定で行われたという。そのため、職員室ではなく担任教師である西村先生のロッカーで一時的に保管されるようだ。後日、出張から戻ってきた学園長と教頭先生とともに保護者への返送などがなされるという。

国語の女性教師である竹内先生と仲良しである明奈は、色々と職員室の内部事情に精通していた。今も雄二たちに情報共有しながら、チャットアプリに寄せられる竹内先生の愚痴に返事を送っている。

「となると、鉄人のロッカーのカギが必要ってわけか」

「ううん、いらなと思う。竹内先生いわく、デカイサメのせいでロッカーに入らないって鉄人が怒ってたらしいよ。没収品はロッカー室内に放置されてるみたい」

「それ、お前のせいじゃねえか」

「鉄人もお主には苦労させられておるのう……」

何はともあれ、目標の在処はわかった。4人は柱の影に隠れて男性教師用のロッカー室を見る。

「……………入口に鉄人」

「どうやら没収品を取り戻しに来ないか警戒してるみたいだな」

「ねえ、鉄人こっち見てない？え…………バレやつ？マルエツ？世界のナベアツ？ヤバイ？」

「こやつは一体何を言っておるのじゃ？」

「どうせ脊髄反射で喋ってるだけだ、気にすんな」

「はっ…………バレてないスタビライザーなんですけどお…………！」

明奈の発言内容はともかく、西村先生は盗人たちにまだ気づいてい

ないようだ。ただロッカー室に侵入するには、仁王立ちするゲートガードイアンをどうにかして退かさなければならぬ。

さて、どうしたものか、と4人で頭を悩ませていると秀吉が拳手した。なにか案があるようだ。

「わしに良い考えがある」

「何だと。それなら秀吉に準備を一任するぞ」

「うむ、任せるがよい」

そう言うや否や、柱の影から秀吉は飛び出した。緊張した表情で西村先生のもとへと駆け寄っていく。

「西村先生っ！」

「木下！廊下を走るんじゃない！」

「そんなことよりも大変ですっ！実はっ……！」

大声を出し継る秀吉。ただならぬ雰囲気、西村先生も片眉を上げる。村を襲われた乙女がオークに助けを乞うているような構図だ。背伸びをして耳打ちする秀吉。

話が進むにつれ徐々に西村先生の表情は険しくなっていく。終いには怒り交じりに大声を西村先生があげた。

「ぬぁにい!?坂本の性欲が爆発して霧島に襲いかかっているだお!?!」

「待てやコラアっ！秀吉あの野郎っ！何てとんでもないデマを！」

思いもよらぬデマの流布に雄二も、思わず柱の影から廊下に飛び出した。すぐさま明奈と康太が、秀吉の援護射撃をする。

「きゃー！雄二が翔子ちゃんを獣のように食ろうとしているー！先生助けてー！」

「……………やべーぞレイプだ！」

「ふざけんなよお前らあ！」

いつもは大人しい康太がここぞとばかりに大声を張り上げたことで、西村先生もただならぬ事態だと誤解。土埃を巻き起こすロケットスタートで、眼前の雄二を捕らえんと走り出した。

「坂本おおお！貴様まさか性犯罪に手を染めようとは！今日こそは親御さんも交えてみっちり指導してくれるぞ！」

「冗談じゃねえっ！後で覚えとけよバカども！」

殺気をまとった西村先生の魔の手から逃れんと、雄二は校舎の外に向かって走り出した。

死が待ち構えるデス・ダービーにFクラス代表が出走だ。咲き誇る桜が生贄を待ち望む！クラシック第一弾！文月学園賞！ハナを掴む雄二はまだ絶叫する余裕があるようだが、やや掛かり気味。3バ身離れて追いかける西村先生に、おそらく数分と持たずに捕縛されるだろう。秀吉はこの上ない笑顔で2人を見送った。

「1、2の……ポカン！ツチャはサカモトをきれいにわすれた！」

「……さか、もと？はて、誰じゃったかのう？」

「ぜんぜん忘れたアア！ワハハハハハハハハハ！」

友人の無様なザマを堪能した3人は、談笑しながらロッカー室に侵入する。室内の奥の方には、目当ての宝が鎮座していた。確かに、巨大なサメや意外とがさばるボードゲームなどのせいで、ロッカーには入りきらなかったようだ。

「あつホエールちゃん！無事でよかつた〜！」

「吉井よ、なぜサメの抱き枕にホエールという名をつけたのじゃ？」

「だって英語だとホエールでしょ？」

シャークです。

微妙な表情を浮かべる秀吉と康太だったが、言わぬが花。とくに指摘せず自分たちの私物を探すことにした。

.....

「いやあくみんな喜んでくれて良かったよ〜」

「雄二のゲーム機も確保できたし……作戦成功じゃな」

「……………写真データも無事」

自分たちの持ち物を確保した3人は、その後Fクラス生徒に没収品を返却していた。ゲーム機、漫画、ガジェット、柄の見えない抱き枕カバーなどを渡された生徒たちは皆一様に喜んでおり3人に感謝していた。気分は義賊、配る秘宝、増していく魅力。でも待ち構えるのは地獄、だった。

帰路につく最中、廊下の先で3人を待ち構えている人物を夕陽が照

らす。

「そこまでだバカども」

そこには怒気をまとった西村先生が立ちはだかっていた。右手には首根つこを掴んだ雄二を携えている。全身ボロボロで気を失っているようだった。

雄二の変わり果てた姿を一瞥すると秀吉は廊下に唾を吐き捨てた。

「チツ、やはり雄二ごときには荷が重かったかのう。案外使えぬヤツじゃ」

「なんまんだぶなんまんだぶ。哀れなゴリラよ、安らかに眠れ。恨むなら秀吉を恨んでね」

「貴様ら本当に友達なのか？」

都合良く自分の捨て駒にしがちだけど、立派な友達です。あまりにも薄情な2人に西村先生は眉をひそめた。末期ともいえる教え子たちをどう更生すべきか、悩みは尽きないようだ。

「……………さらば鉄人」

片手が塞がり自分に注目がいつていない今こそが好機！そう判断した康太は音速を超えた速度で、西村先生の背後にまわった。瞬時に跳躍し両手のトンファーを西村先生に叩きこもうとする。

「……土屋よ、その程度のスピードで俺の目を誤魔化せると思ったかあ！」

「っ!？」

刹那、康太を西村先生が掴みかかった。片手で康太の首を締め上げて宙づりにする。

「俺はスポーツマンだ。そこらの教師とは鍛え方が違う。一緒にされちゃ困るな」

拘束を逃れようと康太も必死に手足をばたつかせているが微動だにしない。抵抗しようとするその姿を見た西村先生は口角を上げた。

「俺がその気になれば教育委員会だってぶっ飛ばせる。生活指導担当を舐めんじゃねえ！」

次の瞬間、手を離して康太の腹を蹴り上げた。廊下の壁に激突し康太は失神してしまう。そんな彼に向かって、西村先生は屍となった雄

二を放り投げた。

生徒をボロ雑巾のように扱うのは、教師としては明らかに問題がありそうだが、文月学園ではモーマンタイ。気に入らない奴はぶん殴る、それが文月学園の規範……らしい。いつしか、Fクラス生徒たちの狂気が西村先生をおかしくしてしまったのだろう。お前らはヴァルハザクか。

「この俺がぬるま湯に浸かった貴様らの目を覚まさせてやる」

気を失った康太らを一瞥すると、仁王立ちになり明奈と秀吉を見据えた。自分から手を出すのではなく敵が動くのを待っているのだ。力とは山のごとく大きく、不動のものだと西村先生は考えていた。なれど滝をご覧あれ。動かざる岩はすべて水に削られる。

歴戦の武士のような覇気をまとう筋肉ダルマ。常識的に考えればこんな傑物にバカ女と男の娘が勝てるわけがない。開かれた窓から吹く風が明奈の頬を撫でる。

武士の道から外れ、邪道に落ちた兵「冥人」となれ。

次の瞬間、明奈は窓から飛び出した。

「っ！このバカがっ！」

西村先生は窓から身を乗り出した。ここは2階。命を失う可能性は低いが、骨折などの怪我を負ってしまうかもしれない。

幸い明奈は抱えていたサメの抱き枕を下敷きにしたことで、怪我もなく元気なようだ。窓の外では明奈が大きな荷物を背負って正門へと全力疾走していた。

「逃げるんだよォー！ひーでよしー！」

「なっ……！」

明奈の言葉を受けて西村先生はすぐさま振り返った。次の瞬間、破裂音とともに真っ白い煙が西村先生の視界を遮った。前に進むもうにも煙が気管に入ってしまったと思うように動けない。

これぞ誉ある武器、煙玉だ。しびれ毒も混ぜてある煙幕には、西村先生も太刀打ちできない。少し時間がたち煙が消えた後には、廊下には誰も残っていなかった。先ほどまでいた秀吉のみならず、気絶していたはずの康太と雄二も忽然と消えていた。まるで亡霊のように。

1人残された西村先生は拳を握りしめると絶叫した。

「貴様ら……正々堂々戦わんかああああああ！」

敵を前にして、背を向けてはならぬ。情けと覚悟を持つ、それが侍の姿だ。暴力的な側面はあるものの、自分なりの信念を西村先生は持っていた。そしてその信念に則りさえすれば、多少の悪事を働いてとしても、生徒たちのことはしっかりと愛をもつて指導するつもりだった。

だが、その期待は無惨にも打ち砕かれた。虚に乗ずるは臆病の印。誉ある武人たる西村先生にとって、4人の行動は受け入れ難きものだった。

だが、たとえ臆病と罵られようと勝てばよかろうなのだ。当局による不当な物品押収に、4人は打ち勝った。学校から走り去る最中、明奈はふとした疑問を抱いた。

「そういうえば、ホエールちゃんを踏んだとき何か壊れる音がしたけど……あれって何だったんだろう？」

不穏な未来を予感させる出来事だが、トラブルは想像以上に早く到来した。没収品奪還作戦の翌日、文月学園内には次のような書状が張り出されていた。

処分通知

文月学園第二学年

木下秀吉、坂本雄二、土屋康太、吉井明奈

上記4名を1週間の停学処分とする。

文月学園学園長 藤堂カヲル

やっぱり大人って汚い。

バカ女と姉と三者面談

「やったー！メグロモスアウトちゃんゲットおー！」

西村先生の逆鱗に触れて無事停学となった明奈は、自宅でゴロゴロしながらゲームに勤しんでいた。サメのぬいぐるみに頭を乗せてソファの上に寝転がってスマートフォンをいじる彼女は、滅茶苦茶にだらけきっていた。

当然、停学期間最終日にもかかわらず課題は手付かず。ログインボーナスをもらい、デイリーミッションをこなして、イベントも走り、ガチャを引く。トレーナー、監督生、プロデューサー、騎空士など無数の肩書を持つ明奈はとても忙しいのである。

お目当ての擬人化娘が手に入り両足をばたつかせる明奈だったが不意に画面から目を離れた。玄関からチャイムの音が聞こえたためだ。

「あれ？何か頼んだっけ？」

のそのそと起き上がり玄関へと近づくと覗き窓を見る。外には大きな旅行鞆を携えたショートカットの女性か涼やかな表情で立っていた。

七分丈のパンツに半袖のカッターシャツと薄手のベストを着こなした女性は、視線に気づいたのか、覗き窓に向かってひらひらと手を振った。驚きのあまり明奈は勢いよくドアを開ける。

「お姉ちゃんっ!?!どうしてここにっ!?!」

「アキちゃん、ただいま戻りましたよ」

明奈の姉である吉井玲は優しく微笑むと、ぎゅっと妹を抱き締めた。想像だにしていなかった状況に明奈は目を白黒とさせている。

「え？え？まだ留学してるはずじゃ……?」

「ふふ、アキちゃんの顔が見たくなって少し早めに帰国してしまいました。必要な単位の取得と論文の提出は既に終わっているので安心してください」

「はえー」

何を言っているのかよくわからない明奈は、とりあえず姉に抱かれ

ながら頭を撫でられている。このバカ、基本的に姉には敵わないので、昔からされるがままなのであった

久しぶりの妹を堪能したシスコンの姉は、明奈の目を見つめると問いかけた。

「ところで、最近アキちゃんは何か危ないことをしていませんか？例えば、教師から没収品を強奪して逃げる際に、抱き枕をクッションにして上の階から飛び降りた、とか」

「ぎくーっ！そ、そんなことっ、するわけないじゃないすかっ！ぷすーぷすー」

「……………そうですか」

全てを見透かしたかのごとくピンポイントで直近の悪事を指摘された明奈は、顔を横に向けると音のしない口笛を鳴らして誤魔化そうとし始めた。

そんな妹の明らかに怪しい反応に、玲は目を細める。そして明奈の顎を掴むと、くいつと上げて顔を合わせた。

「アキちゃん、危ないことだけはやめてくださいね？」

「っ！……………うん、わかったよ」

「よろしい」

姉の攻めムーヴに不覚にもときめいてしまった明奈は頬を赤く染めながら細い声で返す。妹のいじらしい反応に玲は笑みを深めると、明奈の腰に手を添えて家の中へと入っていった。

「そういえばアキちゃんは先ほどから何をしていたのでしょうか？」

「……………あっ！いやっ、それはっ、その…………」

家に入るや否や露骨に慌て始める妹を、玲は不審げに見つめた。

玄関に男性向けの靴はなかった。ゆえに彼氏が今いる、ということはないだろう。だが、もしかしたら、ただならぬ関係にある女性がいるのではないか。

気が気ではなかった玲だったが、リビングルームの机に放り出されたスマートフォンを目にしたことで、妹の隠したがったことに気がついた。ほっと息を吐くと玲は安堵の表情を浮かべた。

「なるほど、ゲームに夢中だったんですね」

「うう……、はい」

「てつきり私の知らないところで恋人をつくって連れ込んでい
るのではないかと心配してしまいましたよ」

「え!?!いやいや、そんな恋人なんていないよー」

「ふふふ、そうですか。それは良かったです」

あわあわと否定する妹を見て玲は嬉しそうに笑みを深めた。いく
ら盗聴していても学校の中で交際されては気がつくことはできない。
重度のシスコンを患っている玲はやや病的な愛情を妹に対して抱い
ていたのであった。そんなことも露知らず、機嫌のよさそうな姉に安
心した明奈は徐々に警戒をといっていた。

「はあー……いきなりお姉ちゃんが帰ってきたから何があったのかと
心配しちゃったよー」

「先ほども言ったようにアキちゃんの顔が見たくなっただけですよ
?」

「そっかそっかあ。もしかして生活チェックとかしに来たんじやない
かと思ったよー」

「確かに母さんには色々と報告していますが、基本的にアキちゃんの
教育は私に一任されているので心配しなくて大丈夫です」

「あつ、そうなんだー」

「ただし、楽しいとは思いますがゲームのように無駄なことばかりし
ていてはダメですよ?まだまだ学ぶべきものは沢山あるはずですよ」

「ふふ、”無駄”という名のガラクタの山を積み上げて頂点でピク
ニックするのも悪くありませんわよ」

「ふむ。では、お姉ちゃんもアキちゃんのお胸を揉みしだきましょ
うか。無駄なことですが存外悪くはなさそうです」

「ヒエッー!ごめんなさい私が悪かったですお姉様」

手をわきわきといやらしく動かす姉に怯えた明奈は、ぱつと両手で
頭を抑えると小さく屈んで身を縮めた。他方で、カリスマブレイクし
た妹を尻目に、玲はゴミ箱を見つめている。

「……アキちゃん、何かお姉ちゃんに隠し事をしていませんか?実は
停学処分を下されていた、とか」

「まつ……まつさかカーニバル！そんなわけないよー！」

「そうですか。では、このテキストの束は何でしょうか？」

「うぐう……！そ、それはっ！」

ゴミ箱の中から引き上げられた参考書を、玲につきつけられた明奈はたじろいだ。表紙にはご丁寧に「停学期間中の課題（絶対に忘れないように！）」と書かれた巨大な付箋が貼られている。

ばつが悪そうに目をそらす妹に冷たい視線を向けると玲は大きくため息を吐いた。

「まったく……バレてしまうような悪事をするなんて、何と情けない。どうやらお仕置きが必要なようですね」

「そんなー！うわーん！停学なんてもうコリゴリだよー！」

玲はそう言うと言と服を着崩し、妖しい雰囲気を感じながら女豹のようにじりじりと寄ってくる。いかがわしい姉への本能的な恐怖から、明奈は身体を震わせて叫んだ。だが、たすけはこなかった。

この日、1人の少女の艶やかな悲鳴は残念ながら誰にも届かないのであった。

.....

バカが自業自得なお仕置きを受けていた翌日、停学期間が明けた雄二や秀吉はクラスメイトたちと教室で談笑していた。

「ふーん、じゃあ停学中は色々大変だったのね」

「ああ。親父とおふくろにはこっぴどり絞られたぜ」

「ふふ。あと霧島さんにもですよ、坂本くん？」

「うげっ!?そ、そんなわけねえだろ！変なこと言うのはやめろよ姫路」

「ほうほう、雄二は霧島殿と色々あったのじゃな？なるほどなるほど」

「……………放課後には気をつけろ」

「マジでやめろよお前ら。シャレにならねえから、マジで」

からかうような瑞希の言葉を雄二は真っ赤になって否定した。実は停学期間中の課題を手伝うという名目で、翔子は雄二の家に入り浸っていたのであった。

とくに停学期間最終日の夜は、恐ろしかった。明奈に焚きつけられた幼馴染が既成事実を作ろうと迫ってきたのだ。身の危険と貞操の

危機を感じた雄二は、軽いトラウマを抱えることとなった。

そんなことがあったせいかな、意地悪そうな笑みを浮かべる秀吉と、血走った目でカッターナイフを鳴らす康太を見て、雄二は真顔になった。彼からすれば2人はまごうことなく敵だ。からかつてくるだけの瑞希や美波と違い、秀吉と康太は取り返しをつかないことをしてくるためだ。

これ以上、深掘りされると危険だと察知した雄二は何食わぬ顔で話題を変えた。

「あー、そういえば吉井はまだ来てないよな」

「そうなのよね。まったく久しぶりの登校だから道に迷ってるのかしら?」

「あるいは寝坊助さんなのかもしれないね。うふふふふふ」

雄二の目論見通り、女性陣は明奈トークに乗ってきた。それも当然、2人はこれまでずっと明奈ロスに耐えてきたのだ。嬉しそうに微笑みながら目を輝かせる美波と、恍惚とした表情でギラギラとした目を向ける瑞希は、明奈に飢えていた。

そんな2人の欲望に応えてか、ガラガラと音をたてて扉が開いた。教室に入ってきたのは明奈だったが、少し様子がおかしい。まるで深窓の令嬢のようにしずしずと歩いているではないか。

何らかの異変を察知した雄二や康太であったが、待ちに待った明奈との再会に美波と瑞希はそんな違和感も華麗にスルーした。

「久しぶりねアキー！元気にしてた?あんたがいなくてホント寂しかったんだからね」

「そうですよ吉井さん！ずっと会えなくて寂しかったです。でも、ようやくお話できて嬉しいです」

2人を見つめると明奈は頬を緩めるとにこやかに言い放った。

「ごきげんよう、みなさま。きょうもよいてんきですね」

「吉井さんっ!?!」

「アキが……壊れたっ!?!」

普段から品性の欠片もない外道娘が、舌足らずな声でお嬢様言葉を使う姿に、美波と瑞希は衝撃を受ける。だがこうした状況での勝手

知った秀吉や雄二は冷静に対処した。

「こやつ、腹を空かすなど重いストレスがかかると似非お嬢様になつてしまうのじゃ」

「おいムッツリーニ、このバカにシネカスを渡してやれ」

シネカスとはキャラメルの塊をチョコレートで包み込んだアメリカのお菓子である。その驚異的な甘さゆえに、Fクラスでは一種のカルフル剤として用いられていた。

康太からお菓子を引つた明奈は、即座に開封するともきゆもきゆ音を立てて咀嚼し始めた。

「……………どう？」

「……………僕、満足ッ！」

康太の問いに明奈は満面の笑みを浮かべてサムズアップする。文月学園の最底辺バカの復活に一同は安堵した。

「まったく、一体どうしたのよアキ。いきなり変なこと言い出すから心配しちやつたじゃない」

「さしずめ、停学期間中の課題が負担になったのじやろうな。そうじやろう吉井よ？」

「かだい……………何それ美味しいの？」

秀吉の言葉に首をかしげる明奈。よく見るとカバンの中には無惨に裁断された参考書が入っているのが見える。課題を粉砕するびつくりするほどアナーキーな行為に雄二や康太も頬に冷や汗を流した。

「こいつ……………マジで言ってるのか」

「……………さすが観察処分者」

「あはは。吉井さんは凄いですね」

明奈の規格外の行動に全肯定マシンの瑞希も言葉を失ってしまふ。苦笑しながらふと明奈の首筋に目を向けた瑞希は目を大きく見開いた。そして小刻みに身体を震えさせながら口を開く。

「吉井さん……………その赤い痕は何ですか……………」

「え？あ……………これは多分おねえ」

「失礼。こちらが吉井明奈のクラスでしょうか？」

明奈の返事を遮つてある女性の声がFクラスに反響した。教室の

入り口の傍に立つ玲の存在にFクラス男子たちは色めきだった。

「おいおい、なんだあの美人は」

「ドチャシコの即ハボが過ぎるんだが？」

「ここで抜かねば……不作法というもの」

「騒ぐな、陰茎が苛立つ」

「もし男だったら惚れたんだがな……」

突如、騒々しくなるクラスだったが、一躍話題の中心人物になった玲は、明奈の隣に立ちFクラス生徒たちに向かって頭を深々と下げた。

「初めまして。今はアキちゃんの姉、将来的には旦那さんになる吉井玲と申します。いつも妹がお世話になっております」

「自然な流れでイカれた自己紹介をしないでっ！そもそも姉妹での結婚は無理だから！」

「無理」というのはですね、嘔吐きの言葉なんです。途中で止めてしまうから無理になるんですよ」

「イミワカンナイヨー！」

キヤツキヤウフフしている姉妹を見たFクラス男子たちは、思わず涙を流しながら小躍りしてしまう。なんとすばらしいひびき！そのとおり！姉妹百合は最高！誰が何と言おうと最高！

一方、女性陣は絶対零度の視線で玲を射抜かんとにらみつけている。姉妹百合？そんなエンディング、僕は認めないよ。とりわけ瑞希は親の敵を前にしたかのごとく殺意と憎悪に満ちた眼をしていた。確信はなかったものの、明奈の首筋の赤い跡はこの女性がつけたのではないか、と考えていたのである。

「随分とお姉さんと仲良しなのね、アキ」

「ホント仲良しすぎて嫉妬しちやいそうですう」

「今のやり取りのどこを見たらそんな感想が出てくるのかな？2人も目が節穴なのかな？」

「アキちゃん、おしどり夫婦って言われてしまいましたね。嬉しいです」

「こっちは耳に風穴でも空いてるのかなあ!？」

頬を赤く染めて満更でもなさそうな顔で恥ずかしがる姉にすかさずツッコミを入れる。だが心なしか明奈は何だか楽しそうだった。この姉にしてこの妹あり。大なり小なりシスコンという性質は受け継がれるものなのである。

「てか、お前にも姉貴がいたんだな。知らなかったぜ」

「あー、お姉ちゃん海外留学してたからねー。どこだっけ？NOVA？」

「ハーバード大学ですよ、アキちゃん。あと少しで教育課程を終えるところですよ」

「なっ!?超名門大学だっ!?」

「なぜゆえ駅前留学と勘違いしておるのじゃこのバカは……?」

大声をあげて驚く雄二にクラスメイトたちはざわついた。スタイル抜群で頭脳明晰、おまけにシスコンで甘やかしてくれる。そんな理想的な姉の存在に男子たちは明奈を羨ましそうに見つめる。同時にそこには生暖かい視線も混じっていた。ああ、知能は全て姉に吸いとられたのだな、かわいいそうに、といわんばかりに。

そんな視線に気づかない明奈は姉に対してお説教を始めた。両手を腰に当てて少し胸を張る妹の可愛らしい姿を見て、玲は優しげに微笑んでいる。

「もう!お姉ちゃんが高校に来ちゃだめでしょ見苦しい!一体いくつだと思ってるの!ほらほら、早く帰る!」

「姉さんに酷いことを言うアキちゃんにはお仕置が必要だと思っておりますが……昨日したことを今ここですれば良いのでしょうか?」

「いえいえそんな!お優しくしてお美しいお姉様におかれましてはそのようなことはなさらなくて結構でござえやす!お姉ちゃんカワイイヤッター!私の姉がこんなに可愛いすぎて生きるのが辛い!」

姉を帰そうとする明奈だったが、流れが悪いと見るや否や、手を揉みながら平身低頭でへこへこし出す。勝ち馬に乗れ、長いものに巻かれる、を地でゆくのがこのバカであった。卑屈な笑みを浮かべてご機嫌うかがいする小物感満載の妹に玲も小さくため息を吐いてしまう。

「今日は三者面談のためにアキちゃんの学校に来たのですよ。停学処

分を受けたのですから当然ですね」

「ん……？秀吉い、そんなものあったか？」

「いや、わしはなかつ……かふっ」

「おい！どうした秀吉！しっかりしろっ！」

「……………悪魔……………」

「ムツツリーニ!?お前も一体どうしちゃったんだよっ!？」

玲の話を否定しようとした秀吉だったが刹那、口から泡を噴き出すとがくりと膝をついた。突然の謎現象に混乱する雄二だったが隣にいた康太は見逃さなかった。コンマ一秒の間に、人知れず玲は秀吉の首をへし折ったのであった。なお、恐ろしい出来事に直面してしまった康太は、言葉を失いしめやかに失禁した。

「とにかく、私はこれから学園長に挨拶をしてきます。放課後には担任の先生との三者面談があるので準備しておいてくださいね、アキちゃん」

「うげえ……………わかったよー」

何はともあれ、明奈は三者面談をさせられることが決まってしまうた。これが後に彼女の高校生活を大きく変えることになるとは、このとき誰も思わなかったのであった。

……………

「つまり、アキちゃんは随分と問題児なのですね」

「ええ、残念ですが仰る通りです」

「うぐう……………返す言葉もありませんな」

「お前はもつと反省しろ！」

「ひえー！生徒をいじめる鬼教師ー！暴力反対！」

「こいつ……………」

「ふふふ、まったくアキちゃんったら」

その日の放課後、明奈は姉と西村先生で三者面談をさせられていた。先生に数々の悪行を暴露された明奈は、とてつもなく肩身の狭い思いをしつつも、苦行を乗り切れたことを心の奥底で喜んだ。ぐでたま状態になって机にへばりつく明奈に、玲も無意識のうちに破顔してしまう。

「さて、アキちゃん。西村先生と少しお話があるので待っていてくれますか？」

「ええ、変なこと言わないか不安なんだけど……」

「不安ならアキちゃんのチュウで姉さんの唇を」

「あとはお若い2人でごゆっくりい！」

そう叫ぶと明奈は豪快な音をたてて教室から飛び出した。脱兎のごとく逃げる落ち着きのない明奈に対して西村先生は嘆息する。なぜこのバカは姉のように冷静な子に育たなかったのか。そうなってくれば、自分の負担も減るというのに。西村先生は半ば愚痴るように玲に話しかけてしまった。

「吉井さんはその……とても自由奔放です。いえ、自由なのは良いのですが、学業に消極的なのがやはり教員の間でも問題となっています」

「なるほど」

にこやかに微笑む玲だったが、ふつと真顔になると問いかけた。

「西村先生はアキちゃんが勉強すべきだと本当に思っていますか？」

「はい？」

「成績最底辺で前代未聞のバカ。そんなアキちゃんが無駄な努力をしただって意味がないでしょう」

淡々と言い放つ玲。先ほどまでは過剰ともいえるほどの明奈への愛が溢れ出していたのに、今はスイッチが切り替わったかのごとく冷淡な雰囲気纏っていた。そこには成績の悪い妹に対する怒りや諦めなどの感情はない。ただ冷静に事実だけを述べているように西村先生は感じた。

「……確かに吉井さんの成績は最低最悪です。ただ、それは本人に意欲がないからであって、何をしても無駄というわけではありません」

「ふむ」

「彼女には何かを最後までやり通す根気強さがあります。きちんとその力を発揮できれば、必ずや人並み以上の成績になるはずですよ」

「そうですか、あの娘も頑張っているんですね」

「はい。何より、学力がなければ将来の選択肢も狭まっています。」

しっかりと私どもも指導いたしますので」

「ああ、それは別に構いません。あの娘は高校を卒業した後、私のお嫁さんになる予定ですから」

「……はあ？」

「藤堂学園長とは違い、西村先生はどうやら私とは意見が合わないようです」

担任教師として真剣に熱意をもって明奈の現状と可能性を伝えようとしたが、玲は興味なさげに一蹴する。この冷たい態度に西村先生は違和感を抱いた。傍から見てもわかるほどに目一杯の愛情を注いでいた妹の教育に、なぜこの姉は無関心でいられるのか。

訝しげに見つめると、玲は鬱陶しそうに長いため息を吐き言い放った。

「はつきり言わせていただきますが、アキちゃんに一般的な教育は必要ありません。あの娘に偏差値至上主義の教育システムが合うわけではないのですから」

「……お言葉ですが、私どもも偏差値だけを求めているわけではありません」

「では、なぜ成績に基づくクラス間格差が存在するのでしょうか？」

玲の誤解を解こうと反論したが、突き放すような反論に西村先生は言葉を失った。確かに文月学園では成績を基準に生徒間の待遇に差がある。そしてそれは、他ならぬ偏差値至上主義に染まった仕組みだ。進学校とはいえ過度な学力偏重に陥っている現状は、果たして彼が目指す教育と一致するのだろうか。

無意識のうちに目を背けてきた現実を突きつけられた西村先生は下唇に力を込めて、口を閉ざすしかなかった。そして考え込む。一体、目の前の女性は何を欲しているのか。

「そもそも偏差値以前の問題として、上辺だけの青臭い教育論など求めています。真にアキちゃんの為になる実践的な教育こそが必要なのです。あの娘には残酷かつリアルで、時には痛みも伴うような激しい生存競争を経験してほしい」

「貴女は一体何を言ってる」

「試験召喚戦争」

ぽつりと呟くと玲は口角を僅かにあげた。その美しくも無機質な表情は、相手に一抹の不安と恐怖を抱かせるようなものだった。

「藤堂学園長ともお話ししましたが、非常にユニークなシステムですね。スポーツのようでありながら、戦闘訓練として機能する」

「戦闘……訓練だと……ッ！」

「ええ。そしてそれは現代に必要な教育システムです」

聞き捨てならない言葉に西村先生は声を荒げた。それでも玲は泰然とした態度を崩さずに話を続ける。

「国家間対立、経済競争、個人間での罵り合い。今や世の中には、敵を舞台から引きずり下ろすまで叩きのめす殲滅戦が溢れています。そうした残酷な世界を生き抜くには、無慈悲な戦争を教育課程に組み込んだ仕組みが不可欠です」

「試験召喚戦争はあくまで生徒同士で切磋琢磨して高め合うための仕組みです。生存競争だとか、戦闘訓練だとか……、貴女の考えるような冷徹なものではないッ！」

「装飾された表層ではなく実態を見るべきですね。上位クラスとの死闘は、あの娘をこの社会に相応しい人物に育ててくれるでしょう。殺伐とした世界で生き延びられる残酷さも兼ね備えた人間へと成長する、まさに私の理想とする教育です」

「貴女に教育の何がわかるかッ！」

「いずれ貴方にもわかりますよ、西村先生」

大声を出して怒りをあらわにした西村先生だったが、なぜか玲はくすくすと笑い始めた。夕陽が玲を照らす。

「私の自慢の妹が教えてくれるはずですよ」

その表情からは妹に対する深い愛情しか感じ取れなかった。

バカ女とFクラスと覚醒

「試験召喚戦争の模擬戦、ですか？」

「せっかくの仕組みを中々活用してくれないからね。ここらで一度、体験させようと考えたのさ」

「ですが……なぜFクラスと？」

「あいつらの方が下手なクラスよりも経験豊富だろう？」

「……………承知しました。では早速セツティングいたします」

「頼んだよ、高橋先生」

藤堂学園長の言葉を受けて高橋先生は一礼し退室した。その様子を見届けると学園長は深く椅子に腰かけるとため息をこぼした。

「戦闘訓練、か……」

せっかくの仕組みが宝の持ち腐れになっていませんか。昨日、学園長のもとを訪ねてきた女性はそう言い放った。今でも目を閉じれば彼女の貼り付けたような笑みがはつきりと浮かび上がる。

『試験召喚戦システムはまだ発展の余地があります。ともに新時代の教育を作りませんか？』

よもや自分の子供とも呼べるような年齢の小娘がビジネスパートナーになるとは。学園長は窓の外に目を向けると口角を上げた。突如やってきたチャンスに久方ぶりに興奮しているのかもしれない。

「まったく……あの姉妹は何なんだろうねえ」

デスク上のパソコンには試験召喚システムに関するプレゼン資料が表示されている。それは来月のハーバード大学の研究会で披露する予定のものだった。

……………

朝早く姉に起こされ家から送り出された明奈は、珍しく遅刻することなく登校できていた。本来、学生として当たり前のことなのだが、普段しない善行に何だか気分も良く、ちよつとしたルンルン気分だ。教室の扉を勢いよく開けると高らかにクラスメイトたちに挨拶をした。

「はろーやーやー、皆様こんにちは！」

「うるせえ！バカは黙ってる！」

「ええ!?あんまりですわ〜！」

激おこプリンプリン丸の雄二に怒鳴られてしまう明奈なのであった。だが、いくらなんでも理不尽が過ぎる。不審に思った明奈は、心配そうに雄二を眺めている瑞希たちに声をかけた。

「ねえねえ、あのオコリザルは何が不満なの？」

「吉井さん、それが……」

明奈の疑問に対して瑞希が今朝あった出来事を話した。どうやら雄二は早朝に学園長に呼び出されたらしい。そこで何とBクラスとの試召戦を勝手に決められてしまったという。

あくまで模擬戦だが、Fクラスの敗北ないし不参加となれば不戦期間を延長されてしまうペナルティ付きだ。しかも戦闘エリアが限定されており、試召戦の監督者たる教員が立つ位置まで固定されている。保健体育や数学など、一部のFクラス生徒に有利な科目の教員を連れて奇襲攻撃することができない。

おまけにFクラスの主戦力が全てAクラス戦で露呈してしまった。いる以上、戦況は非常に不利だ。開戦タイミングは今日の5時限目の終了後。午後最初の授業の後なので昼休みを挟むとはいえ、相手の戦力を分析しこの制約にあった作戦を立てる時間的余裕はない。

「なーんか変よね。こういうのってフツー当日に決めないでしょ？」

「それに学力を考えるとCクラスかAクラスがBクラスの相手には妥当だと思うがのう」

「……………不可解」

突然、Fクラス不利な形で決まった模擬戦に美波や秀吉も釈然としないようだった。今、Fクラスを叩きのめす理由はないはずだが、何か陰謀めいたものを感じてしまう。最近はトラブルを起こしていいのでなおさらだ。もちろん、西村先生のロッカーから没収品を強奪したバカはいたが、あの事件は首謀者の停学処分が決着がついたはずだ。

「いったい何が目的なんだあのクソババア!?ふざけやがって！」

「いい加減落ち着け雄二よ。抱え込んでしまうのはお主の悪いクセ

「じゃぞ」

「あの……坂本君、もしよければクッキーをどうぞ。考え事をするときは甘いものが大事っていいですよ」

頭を抱えて苦悶する雄二を見かねたのか、秀吉が声をかける。瑞希もティッシュペーパーにのせた美味しそうなクッキーを雄二に手渡した。なんと手作りである。美少女クラスメイトから差し入れを貰った雄二にはもれなく羨望と嫉妬の眼差しが向けられる。

「……悪い、少し冷静になるわ。ありがとな姫路。ありがたくいただきます」

「はい！お役に立てたようで私も嬉しいです」

「ええー!? 姫路さんの手作りクッキーいいなー！雄二のくせに！ずるい！」

「ふふ……吉井さんの分もありますよ。はい、どうぞ」

「わーい！やったー！」

可愛らしくラッピングされたクッキーを貰った明奈は喜びのあまりクルクルと回りながらダンスしている。これだけあれば勝ちですわ、パクパクですわ。

だが、いざ袋を開けてクッキーを口にしようとしたそのとき、ズゴンという大きな音を立てて雄二が顔面を教卓に打ち付けた。よく見ると、顔は紫に変色しており僅かに身体も痙攣している。

「雄二？いきなり倒れて、どうしたの？」

不審に思った明奈は、雄二の身体をゆさゆさと揺らすが返事はない。そんな様子を眺めていた秀吉はふと衝撃の事実に気付いてしまう。

「のう吉井よ……もしやこやつ、息をしておらぬのではないか？」

「……え？」

「ちよつとアキ！坂本の脈、全然動いてないわよ！」

「………ATMもってくるッ！」

「キャッシュマシーンなんか持ってきてどうすんの!?ちがうよムツツリーニ、ADBだよADB！」

「………っ、了解！」

猛スピードで教室を出ていく康太だが、当然ながら今この状況で必要なのは、停止した雄二の心臓に電気ショックを与えるAED（自動体外式除細動器）だ。間違ってもATMやADB（アジア開発銀行）ではない。

「姫路さん！いくら雄二がクズだからって毒殺するなんて酷いっ！モテない男子の純情を弄ぶのは重罪だよ！」

「ええ!?ちよつぴり隠し味は入れましたけど毒だなんてそんな！」

「……ねえ、瑞希。その隠し味って……何？」

「食感を滑らかにするための王水、とか」

「クツキーに猛毒を??」

「でも最終的に加熱しますし」

「加熱で無毒化できるものにも限りはあるでしょっ!?!」

予期せぬ瑞希の天然行動に明奈は盛大にツツコミを入れた。不思議そうに首を傾げる瑞希は可憐でキュートだったが、雄二の心臓はいまだに停止中だ。

「……………吉井すまない！ANAがなかったから代わりに道端に落ちていたローターを持ってきた！」

「仕方ない…これで雄二の心臓を振動させよう！」

明奈と康太は阿吽の呼吸で雄二のシャツを引つ剥がし大胸筋を露出させると、露わになった乳首の上にローターを置きスイッチを入れられた。ぴくりとも動かない雄二の胸板の上で、プルプルと大人の玩具が揺れ動く様はどことなくシニールだ。

もちろん、何ら医学的に意味のない行いだが、きっと雄二にとって素敵な黒歴史となるだろう。なお秀吉はその様子をスマートフォンで撮影していた。やめたげてよお！

「ネットに上げたらバズるかのう？」

「……………ダメだッ！全然効いてないッ！」

「心臓マッサージだよムツツリーニ！ほらっいくよ！」

ローターによる心肺蘇生を諦めた明奈と康太は、足をのせるとリズムに合わせて雄二の胸部を繰り返し踏みつけた。どうやら友達とはいえ他人の大胸筋に素手で触るのは抵抗があったらしい。ただ、傍か

から見ると死体蹴りをしているようにしか見えない。

友を足蹴にする行動に瑞希と美波はドン引きするが、明奈たちは必死な形相で雄二の大胸筋を踏んでいる。だが数分ほど経過したところで、明奈は疲れのあまり座り込んでしまう。

「もうダメっ……！疲れたっ！雄二のことは諦めよう！」

「……………惜しい人を亡くした」

「あの……吉井さんと土屋くんは本当に坂本くんのお友達なんですか？」

2人がかりで掃除用具入れのロッカーに雄二を押し込む様子を見て、瑞希は至極まっとうな疑問をこぼす。

一応、ベストフレンドらしいですよ？ただ、友達を保健室に運ぶどころか、腫れ物に触るかのごとく存在を抹消しようとする様には猛烈な違和感がある。魑魅魍魎が集うFクラスだが、なかでも明奈や雄二の仲良死4人組はひときわ歪な友情関係を築いているようだ。なお、悲しいことにこの状況に慣れてしまった美波は、頭を右手で抑えている。

「いよいよ坂本。Bクラス代表がわざわざ宣戦布告に来てやったぞ」

そんな雄二の生死をかけた茶番を繰り広げていると教室の扉が開いた。入口にはBクラス代表の根本恭二と男子生徒が数人ほど立っている。望まぬ来訪者たちの存在に、さきほどまでワイガヤ状態だったFクラスは一瞬にしてお通夜のように白けてしまった。

「教授、あれはもしかや」

「うむ、成績は良いが評判は最底辺な根本恭二じゃな。通称、文月学園の畜生。テスト問題を盗み出してカンニングをした、常に刃物を携帯している、など黒い噂が絶えない下衆じゃ」

「なあ……なぜ俺は見ず知らずの老人にここまでコケにされるんだ？」

「いや、これは代表が全面的に悪いだろ」

「うん！因果応報だな！」

「お前ら後で覚えておけよ……」

須川亮と教授（と呼ばれる不審者の老人）の言葉に恭二は不満をこ

ぼす。だが、後ろに控えるBクラス男子たちは冷静に老人を擁護した。そのことに青いスーツと蝶ネクタイのクソガキは違和感を抱き考え込んでしまう。文月学園の近所に住む眼鏡の少年だが、生徒でもなければ関係者でもないので不法侵入したただの不審者である。

「妙だな……クラス代表なのに味方が誰もいないなんて……本当にコイツは代表者なのか？」

「おい！誰だよこの生意気な小僧は！てか、なんでFクラスには当然のように不審者たちが徘徊しているんだ!？」

「いやいや、代表。そういう細かいところ気にしちゃダメじゃね？」

「ホント神経質すぎるのが問題だわ」

「Fクラスが1人増えたからって目くじら立てるなよな」

「なんなんだよもーっ！代表に対して文句を言うな！しかも俺は別に間違っていないだろうが！」

悲しいことに今のBクラス代表はクラスメイトからまるでリスクトされていけないようだ。それどころか、必ず否定が入ってくる。おそらく真つ当なことを言っても、普段の恭二の素行が悪いせいでクラスメイトから一々反発されてしまうのだろう。

本人は知らないがクラスメイトによる恭二のあだ名は「空気汚染機」「人間失格」「虫」など凄惨たるものだった。根本くん……かわいそうネモ。

時間も惜しいのでロッカーの中に収納された雄二の代わりに秀吉が対応した。恭二に対する不快感を営業用スマイルで隠す実に紳士的な対応だ。

「根本よ、雄二は今ここにおらぬぞ」

「はあ!?これだからバカは嫌なんだ！無能で役立たずのくせに最低限のマナーすらも守れない！」

「すまぬのう。ささやかじゃがお詫びのしるしをくれてやろう」

「って！ローターなんぞ寄越してくんじゃねえ！いらねえよ！」

「……………雄二が使ったやつなのにな？」

「余計いらんわっ！」

「かーらーのー？」

「しつっこいなお前ら！」

癩癩を起すかのように怒りをぶちまける恭二に秀吉もイラっとしたのだろう。挑発するようにさきほどの心肺蘇生ごっこで使ったローターを手渡した。

当然、恭二は憤激したが、その怒りを煽るかのごとく康太と明奈が茶々を入れ出した。誰もが100%悪意でやっているのだから救いが無い。全員悪人というアウトレイジなFクラスであった。

おちよくるように秀吉は笑みを深めた。いわゆる暗黒微笑という言葉で、BL漫画の鬼畜ドS攻めがよくしがちな表情だ。

「いやあ、根本ごときが遠慮なぞしておるのかと思つてのう」

「……………陰湿な奴ほど素直じゃない」

「日本語って難しいよね」

「お前ら日本語もわかんねえのか!?日本語わかる奴出せよ、じゃあー!」
「根本くん……………その、吉井さんたちはちよつとお茶目なので……………」

頭に血がのぼった恭二を宥めるように見かねた瑞希が仲裁する。リアル巨乳JKの美少女にそう言われては下劣な汚物と呼ばれる恭二も流石に矛を収めるしかない。べろべろべーと腹立たしい顔をしたバカ3人組に対する殺意を抑え込んで長いため息を吐いた。

「はあく……………、姫路さんには心底同情するよ」

「……………えつと、同情ですか?」

「こんなバカどもと過ごすなんて苦行だ。劣等生なんぞいない方が良くないか?人間は自分たちの群れにそぐわない、群れ全体の利益にそぐわない人間を処刑して生きていける」

恭二はそう言うのと蔑むような薄ら笑いを浮かべた。そんな彼に同調したBクラス男子たちも含み笑いをしている。

成績上位クラスにはFクラスのことを好ましく思っていない生徒が多くいる。学力の差を試召戦で強引に覆そうとしているのだから多少の批判や反感が出るのは仕方がない。

とはいえ、恭二の過激な言葉を受け入れている辺り、もともと選民思想が強いのだろうか。自分たちより下だと思つているFクラス生徒を侮蔑するような態度が見え隠れする。

「まったく、Fクラスのクズどもに払う金があるんだったら、猫でも救って欲しいものだな」

「ちよつと根本、いくらなんでも言い過ぎよ」

「あ？胸も点数もない女は引っ込んでろ」

「なっ……ウチだって漢字さえ読めれば！」

「漢字だあ？」

やれやれと呆れたように首を振ると恭二は底意地の悪い笑みを浮かべ、揶揄するように言い放つ。

「漢字も読めねえヤツが日本にいるんじゃないよ」

恭二の冷たい言葉に心を抉られた美波は、一瞬だけ泣きそうな表情をすると下唇を噛みしめて俯いた。本当は恭二に対して言い返してやりたい。だが転校してきたときの不安と恐れ、悲しみを思い出ししてしまい口元が震えてしまい、上手く言葉が出せない。

漢字などの日本語で不自由していること、そしてそれを他人に揶揄されることは美波にとって苦痛だった。なぜ自分は日本にいるのか、ドイツに残りたかった。どれだけ打ち消そうとしてもあの時の苦悩が想起されてしまう。

普段ならば強気になれるはずだが、どうしてか目尻に涙が溜まってしまう。人知れず苦しむ美波と恭二の間に、すっと人影が割って入った。

「根本くん。美波ちゃんに謝ってよ」

「は？なんでだよ」

「美波ちゃんを悲しませたからに決まってるでしょ。女の子を傷つけるなんてサイテーだよ」

庇うように美波の前に立っていたのは明奈だった。その姿に凍えてしまった心も不思議と温かくなった。いつだってそうだ。今も、そしてあの時も、目の前の愛らしい少女がいざという時に自分を守り救ってくれた。

「……アキ」

「はっ！やはりバカな女つてのはダメだな！世慣れているふうなたわごとばかり言っている割には、もろくて、弱くて、お嬢さん育ちでナ

イーブで使い物にならないやつばかりだ」

だが、明奈の言葉は恭二には届かなかつた。もう用はないと言わんばかりに踵を返すと吐き捨てるように言葉を続けた。

「バカが人並みに生きようとするな。身の程をわきまえろ」

Fクラス教室を恭二らが去ると、明奈は美波に近寄つた。転校当初、クラスに馴染めず悲愴な思いでいた美波を知っていたからこそ、明奈は彼女が心配だった。

「美波ちゃん、大丈夫？」

「……うん。ありがと！アキ！」

自分を想ってくれる愛しの少女を安心させようと美波は気丈に振る舞つた。だが、それが空元気だというのも明奈はわかつていた。ぎゅつと美波と手をつなぐと微かに震えを感じた。

鼻をすする美波のことを明奈は物憂げな表情で見つめている。勝ち気で男勝りな性格が目立つが、美波が本当は心優しい繊細な少女だということ、明奈はわかつていた。そしてだからこそ、いきなり強い言葉で美波のことを詰つてきた恭二のことが許せなかつた。

それはFクラス生徒たちも同じだ。根本許すまじ。やや暴力的で男子に厳しいとはいえ紛れもない美少女である美波が傷ついている姿を見て、Fクラス男子たちも奮起した。FFF団のマスクを被り片手に凶器を持っている辺り蛮族じみている。

「ミナアキを悲しませる野郎に生きる権利なんぞないな」

「だからアキミナだツつてんだろ!? 頓死しろ！」

「ふざけやがって。味噌汁で顔を洗って出直してこい」

「は？ お前みたいなクソは地獄に落としたり。死ぬまで償えボケエ」

ただ、アンチ根本で一致団結するかと思いきや、なぜかカップリング論争による内ゲバを始めるFクラス男子たちだった。キーキー言いなながら取っ組み合いを始める様子は猿山を彷彿とさせる。うんうん、それもまた青春だね。

だがそれは明奈が望んだ青春ではない。友達と楽しい学園生活を送る、そんな理想に対して現実はどうだ。大切な友達は心無い言葉に傷つき涙をこぼした。喧騒に満ちたクラスではあるものの、いつもと

違って空気は重く、皆の瞳は何だか悲しそうだ。誰もが悔しさと痛みを胸に抱いていた。

果たして今のままで、他クラスの生徒たちに嘲られたままで、自分の望む学園生活を送れるのか。自問自答を続けて思考が堂々巡りに陥るなか、自分を送り出してくれた姉が朝に意味ありげにこぼした言葉が頭の中で反響した。

『アキちゃん、理想というのは実力が伴う者のみができる現実ですよ』

明奈の理想は楽しい学園生活だ。成績が悪いということでも酷い仕打ちを受ける学園ではない。理想のためには今を変えなければいけない。自分たちの手で、どんな手段を使っても。

大好きな姉は言った。時にルールから大きく逸脱しなければ望む結果は得られない、と。チェスの駒をチマチマと動かしていても意味がない。チェス盤は本来ひっくり返すものなのだ。

決意を胸に真剣な顔をした明奈はクラスメイトたちに向かって呼びかけた。

「ねえみんな……協力してほしいことがあるんだけど」

あの日、戦争が空から降ってきた。

それはお行儀の良い試験召喚戦争ではなく、無慈悲な殲滅戦だった。Fクラス代表不在の今、史上最底の模擬戦が始まる。

バカ女とBクラスと殲滅戦

「あなたが……好きです。あなたのこと……ずっと前から……大好きです」

野中長男はごくり喉を鳴らした。歓喜と緊張のあまり心臓は爆音を鳴らし続けている。

無理もない。何せAクラスの才女であり学園有数の美少女と名高い木下優子から告白されたのだから。Eクラス女子に呼びつけられて、昼休みになったら校舎裏に行けと言われたときは一体何事かと思っただが、嬉しいサプライズだ。

「そのっ……すごく、嬉しいよ。有難う木下さん。僕でよければぜひ……その、恋人になつてほしい」

「本当に？良かったあ……」

頬を赤く染めて上目遣いで見つめてくる優子に長男はドギマギしてしまう。念願の彼女を、しかも誰もが羨むような理想の彼女を、得ることができたことから、気分が高揚しているのだ。

どうして同じクラスであるにもかかわらず恭二に彼女がいて、自分にはいないのか。あんな性格がドブで格好良くもないナルシストに、なぜ手作りのお弁当を差し入れてくれる恋人がいるのか。思い返せばずっと理解できなかつたし憎かつた。だが、そんな忌々しい日々も今日で終わりだ。

そういえば、どうして木下さんは自分のことを好きになったのだろうか。ふと湧いた疑問が破滅の引き金を引くとは知らず、照れ臭そうに頬をかくと優子に聞いた。

「ところで……木下さんは僕のことをどうして好きだと思つたんだい？」

「そうねえ……」

頬に手を添えて悩む素振りを見せる優子だったが、意味ありげに笑みを浮かべると言葉を続けた。

「こうやって簡単に騙される愚かさ、じやな」

刹那、顔に麻袋をかけられ身動きがとれないように拘束されてしま

う。必死に抵抗しようとするが、複数人に抑え込まれており身動きもとれない。

「だまして悪いが、仕事なんぞな」

「安心しろよ。羊を100匹数えているうちに全てが終わるさ」

「リア充になれると思った？思っちゃった？残念！キミはここで死ぬ運命なんだ！」

悲鳴を上げる間もなく長男は後頭部を殴打されて気を失った。本日5人目の哀れな犠牲者をFFF団のメンバーたちは、ズルズルと監禁場所である倉庫へと引きずる。

一方その頃、学生食堂や校庭では複数の男子生徒が意識を飛ばす不審な出来事が起きていた。いずれもBクラスの生徒であり、顔は紫色に変色している。

「大変だ！芳野が泡を吹いて倒れているぞ！」

「おい！しっかりしろ芳野！大丈夫か！」

偶然、現場に居合わせた吉田卓夫と鈴木二郎は大声で助けを呼ぶ。気絶していた芳野孝之の手には可愛らしくラッピンングされた袋に入ったクツキーが握られていた。

.....

菊入真由美はふと開放された窓から外を眺めた。体育の授業がない校庭に生徒の姿などなく、それゆえにダンボール箱を運んでいる黒装束の集団がやけに目立っていた。カルト集団のFFF団だ。

一体なぜ彼らは校庭にいるのだろうか？疑問を抱く真由美だったがチャイムが鳴ったことで視線を黒板の方に戻した。もうすぐ授業が終わる。そうすればFクラスとの模擬戦の始まりだ。

真由美にとって初めてのクラス対抗での試召戦。対戦相手はあり得ないほど格下だが、余裕をもって勝負を楽しめそうな気がする。クラスメイトたちも何だかワクワクしているようだ。

そういえば、なぜか今日は教室にいる男子が異常なほどに少ない。数名は食あたりを起こして保健室に運ばれたみたいだが、他にも少くない数の男子が無断で授業を欠席していた。

何かが起きているのではないか。そんな猛烈に嫌な予感を感じた

そのとき、校庭から叫び声が聞こえてきた。

「パイプ手榴弾の使用許可を！」

「ンンンンンンンッ！許可するッ！」

「ホツカホカの核爆弾だぜえ……フオールアウト！」

刹那、筒状の何かが窓の外から飛んできた。真由美の目の前に落ちたそれは、煙を大量に噴き出してパチパチと火花を散らしている。すると爆竹や発煙筒、空き瓶が次々と教室に投げ込まれていく。

あまりにも暴力的な奇襲攻撃にBクラス生徒たちは大混乱に陥った。クラスメイトたちが教室内で右往左往するなか、脳の処理能力が限界に達した真由美はその場で立ち尽くす。

次の瞬間、彼女の脳天に、校庭から猛スピードで飛んできたサッカーボールが直撃した。神様……私が一体何をしたというのでしょうか。空を舞う真由美は己の不幸を嘆くとともに涙をこぼした。

もくもくと大量の煙を出す爆竹や発煙筒。そして投げ込まれる空き瓶や飛び込んでくる大きなサッカーボールなどの凶器から逃れるべく、Bクラス生徒たちは教室のドアへと殺到する。

「FBI！OPEN UP！」

「開ける！デトロイト市警だ！」

だが、そうは問屋が卸さない。FFF団メンバーたちは教室のドアを蹴破ると続々と突入してきた。平和なムーミン谷に悪魔がやってきたようなものだ。突如現れた突撃部隊は皆一様に消火器を携えている。

「君たち！一体なにを、ごぼごぼごぼっ！」

「火元を消すのが人命救助の鉄則でしょう!?こちらら人の命がかかってるんですよ！」

「ヒヤッハー！汚物は消毒だ〜！」

「梨汁ブツシャーだなっしー！」

そして教室に入るや否や思うがままに消火器を噴射し始めた。彼らを制止しようとした福原先生、パニック状態のBクラス生徒たちは抵抗むなしく泡にのまれていく。

「なんて日だ……なんて最高の日なんだ！生きて、死ぬ。そして蘇る

「ふふふ……吉井さんにかかるると西村先生も成すすべなしですね」

「……………俺はアイツが怖い」

「へえ……少し意外です」

いつになく真剣な表情を浮かべる康太の言葉に、瑞希はくすくすとほほ笑む。

男の娘によるウソの告白で釣る、プレゼントに見せかけた毒物^{クッキ}で戦闘不能にする。モテない男子の純情を弄んだ盤外戦術はもちろん、爆竹や発煙筒を使った砲撃、消火活動を建前とした消火器による奇襲攻撃。どれもこれもすべて明奈が1人で考えたものだ。

普段のバカさから想像もつかない頭脳プレーに康太はどこか恐ろしさを感じていた。

「……………アイツは悪魔だ。姉妹揃って悪魔なんだ」

「そんなことありません。優しく愛らしい天使ですよ」

「……………愛は盲目」

「ええ、愛してますよ？なので土屋くんも取らないでくださいね」

「……………勘弁してくれ」

「ふふふふふ。本当に可愛いですよ。友達想いで、一生懸命で」

楽しげに笑みを浮かべる瑞希だったが、ふいにBクラスの方へと視線を向ける。そんな彼女から康太は悲しそうな雰囲気を感じ取った。耳を澄まさないと聞こえないほどに小さな声でぽつりと瑞希はつぶやいた。

「だから……美波ちゃんにちよっぴり嫉妬してしまいます……」

……………

Fクラスとの模擬戦が始まってから1時間が経とうとしていた。攻撃を仕掛けてきたFFF団メンバーはどこかへ逃走しており、つかの間の平和をBクラス生徒たちが享受していた。

前代未聞の奇襲攻撃から立て直しを図るBクラスだったが、足並みは揃っていない。体制を整えるため攻勢に転じようとしてない恭二に對して、怒りに満ちたクラスメイトたちは大きな不満を抱えていたのだ。そんな彼女ら、彼らを代表して岩下律子は恭二に詰め寄った。

「さつきからクラスに立てこもって何がしたいの?!弱腰もいい加減

にして代表！」

「落ち着け！相手がイカれている以上、こちらこそまずは状況を把握しないよ……」

「学年最底辺の雑魚なんて蹴散らせばいいじゃないっ！あいつらのせいで真由美は……っ！絶対に許せない！」

教室のすみっこに目を向けると、そこにはスカートをしつとりと濡らした真由美が小さく縮こまって膝を抱えていた。

幸いにして大きな怪我はないが、非人道的なテロへの絶望と恐怖、そして恥辱のせいで心を閉ざしてしまったようだ。これでは試召戦はおろか日常生活すらもままならない。

「ありえない……これは夢……夢、悪夢……そう、悪夢……悪夢に違いない……そうじゃないとおかしい、こんなこと、ありえないありえないありえない……」

怖いよ、菊入さん。とくにその目と冷え切った感情が。

虚ろな眼をしてエコエコアザラシ、エコエコオットセイと呪詛を唱える真由美を、律子は優しく抱きしめた。なぜ自分の大切な親友が泣き寝入りをしなければならぬのか。不条理を訴える彼女にクラスメイトたちも次第に賛同し始める。

「何をやっているんですか代表。情けなさすぎてちえるの音も出ません」

「救いはないんですか？ラッキーアイテムとか？」

「僕たち自身が深く傷ついています。これからどんなふう代表と一緒に戦えばいいのか、現状イメージが湧いてきません」

「ぐっ……お前たち……！」

こんな中途半端でダサイことをするやつだったのか。もはや恭二に対する圧倒的な失望感がBクラス中に広まっている。そんなクラスメイトたちの戦意を煽るため律子は、親友の敵討ちのため突撃を提案した。

「こうなったらFクラスに突貫してやるんだから！いくわよみんな！」

「ヒヤッホオオウ！最高だぜえええ！」

「敵はっ!? 敵はどこだああああ!」

「ウツキー! 今年は申年! ヤッターブツパー! はやいゾ」

「おい待てお前ら!」

彼女の掛け声に後押しされたBクラス生徒たちは、一斉に教室を飛び出し旧校舎へと突っ走る。人影は2つしかなく、Fクラスの雑兵たちは無様にも雄二とともに補習室内に立てこもっているようだ。

ただ、不幸なことに最短ルートでは保健体育の領域が展開されていた。待ち構えるはFクラスのリーサルウェポンこと瑞希と康太。圧倒的な点数差を覆せず、Bクラス生徒たちは次々と討ち取られてしまう。

「いやああああ! 死ぬのは駄目……イヤっ……怖い……」

「ダメだ! 守ったら負けるっ! 攻めろっ!」

「ええい! まだだっ! まだ終わらんよ!」

それでも怒りと恨みに満ちた攻勢は衰えを知らない。我先にと突撃するBクラス生徒たちによる決死の攻撃により、戦線はFクラスの方へと少しずつ押し上げられている。殲滅戦はクライマックスへと突入しつつあった。

……

BクラスとFクラスが大混戦を繰り広げるなか、代表の恭二は敵のいない迂回ルートからFクラス代表のいる補習室へと向かっていた。上の階からはクラスメイトの悲鳴と雄叫びが幾度となく聞こえてくる。

「はあ……はあ……ッ! あいつら、ふざけたことをしやがってえ……!」

不快そうに顔を歪める恭二だが、周りに味方は1人もいない。普段の恭二ならば、常に数人の取り巻きのような男子が周りにいるはずだ。だが、今日に限ってはそんな男子たちはどこかへと消えてしまっていた。

やるせない怒りから思わず廊下の柱を殴ってしまう。そんな恭二の前に1人の生徒が姿を現した。

「Fクラス吉井、Bクラス代表の根本くんを戦鬪を挑みます。召喚」

史上最悪のバカこと明奈だ。テストの成績は最底辺であり、試召戦ではほんの僅かな脅威にすらならない雑魚である。しかもここは明奈が苦手とする数学の領域だ。恭二が負ける可能性はゼロと言っていいだろう。

にもかかわらず、明奈は対一で正面勝負を挑んできた。勝ち目のない戦いはずなのに、凜とした佇まいで恭二のことをジロリと見つめる。そんな身の程知らずなバカの状態に、恭二は額に青筋を浮かべて頬をひくつかせた。

「学年最底辺のお前が？このオレに挑む？バカ女が……舐めてると潰すぞ」

「そう思うなら早く召喚しなよ。それとも何？できないの？口だけのヘタレだもんね？」

「ヘタレだ？貴様この野郎。いいぜ、召喚」

みすばらしい木刀を担いだスケバン風の召喚獣と、死神のように大きな鎌を抱えた召喚獣。力の差は歴然としているが、ぎゅっと拳を握りしめると明奈は恭二に問いかけた。

「根本くん。私、実はものすごく怒ってるんだ。なんでかわかる？」

「知らんな。バカが考えることなんかどうでもいい」

「美波ちゃんを泣かせたから、だよ。私の大切な友達をよくも傷つけてくれたね」

「……………なんだって？お前……………まさかたった1人の女のために、あんなふざけたことをしやがったのか？」

恭二は長くため息を吐き、頭を掻きむしると忌々しそうに明奈を睨みつける。その瞳にはおぞましいほどの憎悪と僅かばかりの怯えが込められていた。

「イカレてるよ、お前」

「その何が悪い」

明奈はびしりと恭二を指すと大声を張り上げる。その瞳にはケツイがみなぎっていた。

「友達を傷つけるヤツにイカレた仕返しもできない人間になんか……なりたくもないッ！」

「このツ……バカ女がアツ！」

「ハラワタ臓物をブチ撒けろおっ！」

ついにBクラス代表と観察処分者によるタイマン勝負が始まった。高速で鎌を振る恭二の召喚獣だが、軽快なステップで明奈の召喚獣は華麗に回避していく。繰り返す攻撃はことごとく空振りに終わったうえに、恭二の召喚獣にカウンター攻撃を喰らわせている。

所詮、観察処分者の召喚獣による攻撃なので1つ1つのダメージは大したことがない。とはいえ、攻撃をよけて10点、20点と点数を削っていく明奈への不快感で恭二は徐々に正気を失っていった。

「ちよこまかちよこまかちよこまかちよこまか！何でだよ！何で当たらんねえんだ!？」

「バカだつてやるときはやるんだ！観察処分者なめんなあ！」

「はあ!?!死ねボケが！ハエみたいにウロウロ飛んでるだけだ、お前は！」

絶叫するかのごとく罵倒する恭二。歯軋りしながら地団太を踏んでおり、普段のような斜に構える余裕も冷静さもなくしてしまったようだ。観察処分者への対処に時間がかかっていることに焦っているのだろう。

だが、Bクラス成績トップの召喚獣による猛攻は着実に明奈の体力を削っていた。日々のボランティアやアクションゲームで鍛えられた召喚獣さばきも精彩さを失っている。

そしてついに、恭二の凶刃が明奈を捕えた。足元を鎌で薙ぎ払われたことでダメージを負っただけでなく、バランスを崩して転倒してしまっただのである。

「……うっ！」

「痛えか？痛えだろ……嬉し涙流せやオラアツ！」

「ぐはっ！」

立ち上がろうとする明奈の召喚獣を恭二は無慈悲にも蹴り飛ばした。それと同時に強烈な痛みを感じた明奈はその場に膝をついた。観察処分者は召喚獣の受けたダメージのフィードバックを受けてしまうが、その痛みが想像以上だったのだろう。

これを好機とみた恭二は召喚獣を使い、明奈の召喚獣を踏みつけさせることで身動きを封じた。

「くっ……！」

「くひっ……ひひっ！そうだ、虫けらが俺に敵うわけがねえんだっ！なあ？わかるよなあ？お前なんか逆立ちしても俺には勝てないんだよ！さっさとサレンダーしてオレに謝罪しやがれ！」

「うぐっ！ぐっ！……嫌だね。女の子を傷つけるようなクズになんか謝るもんか！」

「ふざけやがってこのバカ女がああああ！」

とどめを刺そうと大鎌を振り下ろそうとする恭二。だが次の瞬間、軍服をまとったポニーテールの召喚獣が死角から襲い掛かってきた。美波の召喚獣だ。

いつの間にか明奈の後方には肩で息をしている美波が立っていた。愛する少女を外道から守るため、全速力で戦闘に駆け付けたのだろう。さきほどまで明奈をいたぶっていた恭二にガンを飛ばすと、ドスのきいた低い声で威圧した。

「なにウチの女ボコってんだ、殺すぞ」

しまった、と恭二が気づいたときにはもう遅かった。美波の召喚獣が持つていたサーベルが恭二の召喚獣を切り裂いたのだ。自分の召喚獣が霧散した恭二は、力なく膝をついた。完全敗北である。

その瞬間、立会人であった長谷川先生が模擬戦終了の合図を鳴らした。FクラスがBクラスに勝利したのだ。だが、美波からすればそんなことはどうでもいい。床に座り込んだボロボロの明奈に近づくと背後からギュツと抱きしめる。

女の子を手に入れるためにスーパーヒーローになる必要なんてない。いい女は君をヒーローにしてくれる。美波にとっての明奈であり、明奈にとっての美波だ。

くすぐったそうに微笑む明奈の首筋に、美波は額を押し付ける。そして覚悟を決めたような表情で誰にも聞こえないくらいに小さな声でぼそりと呟く。

「誰にも渡さないんだから」

こうして数々の癒えない傷跡を残した模擬戦はFクラスの勝利で終わった。

バカ女と親友と宣言

「アキ、大丈夫？怪我はない？」

「うーん、フィールドバックが少し辛いかも」

唇を尖らせてそうこぼすと明奈は、美波に身体を預けるようにもたれかかった。

刹那、どこからともなくFFF団の面々が登場し、意気消沈する恭二を取り囲んだ。Fクラスの天使を痛めつけた罪は重い。気づけば簀巻きにされた恭二はどこかへと運び出されていった。

ギャーギャー喚いて抵抗しているが助けなんぞ来るわけがない。青スーツのクソガキの腕時計でぶん殴られた恭二は気絶した。負け犬にかける慈悲はないのである。

甘えるように頭を寄せてくる明奈を撫でる美波は、FFF団の外道行為にドン引きした。

「それにしても、アキって意外と策士だったのね。ウチが助けに来ることまで予想して作戦を立てていたなんて」

「うん？美波ちゃんが来てくれるなんてまったく予想してなかったよ？」

「……じゃあ苦手な数学のフィールドで根本と一騎打ちしていたのは」

「んー……その場の成り行き、っていうか、ノリ？都合よく目の前を歩いていたから」

「な・ん・でっ！そうやって危ないことを平然とするのよ！いつつもいつもおー！」

「うぎゅあああああああ！痛い痛い痛いっ！」

怒りのあまり美波は明奈の胸をもぎもぎフルーツのようにもぎもぎした。力いっぱい揉みしだいておりエッチな行為というよりも拷問と表現すべきかもしれない。

恭二に挑む明奈を見たとき、美波は心臓がキュっとなる想いをした。

自分のために怒ってくれて嬉しかった。真剣に戦う姿がカッコ良

かった。その一方で、怪我をするんじゃないかと怖かった。酷い目に遭うんじゃないかと心配でもあった。何だか自分を犠牲にしているように見えたから。だからこそ、明奈にはもっと自分のことを大事にして欲しい、と美波は思っていた。

感情の赴くまま揉みしだいたことで少し気が落ち着いた美波は、むいーっと明奈の右頬を引つ張った。危ないことをした天使へのお仕置きである。ひいんと鳴くと明奈は目尻に涙をためて抗議した。

「だつてえー、アイツが美波ちゃんに酷いことしたからあー」

「まったく……ちゃんと反省しなさいよ。ウチが間に合わなかったら大変なことになってたんだからね？」

「でも、何だかんだで美波ちゃんが守ってくれるんでしょ？」

「……何よいきなり」

「いつも隣にいてくれるもんね。美波ちゃんは優しいから」

明奈はそう言うと、そつと美波の手を取った。そして、そのまま自分の手を重ねて美波の手を包み込むように握ると、柔らかな笑みを向けてくる。

「美波ちゃん……私の……スーパーマン……」

そう呟いて頭を擦り寄せてくる明奈に美波は動きを止めた。

そんなことない。いつだつて守ってくれたのはアキの方だ。ウチが転校してきたばかりのときも、今も。

だが、もし本当にスーパーマン、いやスーパーウーマンになれたのならば、愛する彼女の瞳を独占できるのだろうか。瑞希や翔子、玲などに目移りすることなく自分だけを見てくれるのだろうか。

いつの間にか拗ねるような言葉が美波の口からこぼれていた。

「あんたの目の独占権は、ウチにあるんだから……」

「え？え？急にどうしたの美波ちゃん？メンヘラになっちゃったの？」

「あ？」

「ヒエツ……ごめんなさい」

美波の冷たい態度に明奈は怯える。甘酸っぱい青春ラブストーリー空間は、バカ女の情緒のない疑問で消え去ってしまった。

だが、今はそれでいいのかもしれない。仕方ないわね、と呟くと美波は愛しの少女を慈しむように微笑んだ。少なくとも今はまだそういう関係にはなれそうにない。でも、一步ずつ着実に関係を深められればいいじゃないか。

大逆転のウルトラCなんていらぬ。着実に距離を縮めて関係を深める。王道にして正義、それがウチの恋愛なんだ。

だから、ずっと傍にいて彼女を守ろう。誰にも傷つけさせないし、誰にも奪わせない。そして、いずれは自分が彼女と添い遂げるのである。

ケツイを新たにした美波は明奈の首筋にキスをした。くすぐったそうに笑う彼女が、熱のこもった眼で自分だけを見てくれる日を夢見て。

.....

模擬戦による大騒動がひと段落した頃、授業を終えた生徒たちは思い通りに過ごしていた。そんな牧歌的な時間に水を差したのが、突如行われた臨時の校内放送である。

『文月学園の諸君。我々は正義断行委員会である。この度は2年Bクラスと2年Fクラスの試験召喚戦争を通じて生徒たちに不安を与えてしまったこと、深くお詫びする』

機械音声による声明を耳にした文月学園の生徒たちはスピーカーへと視線を向けた。突然の電波ジャックに生徒のみならず教師たちも困惑している。

『我々は現在の文月学園に反省を促すためにやむを得ず攻撃をした。なぜテストの点数という数字で人の尊厳が蔑ろにされなければならないのか。この学園は深刻な道徳的退廃に陥っている。ゆえに、我々はそうした病巣を取り除かなければならない』

淡々と機械的な声音で告げられる言葉の意味を理解する生徒は少ないだろう。しかし、それでもこの場にいるすべての生徒はこの放送が意味するところを1つだけ理解していた。何か大きな革命のような変化が文月学園で起ころうとしている、と。

そして次の瞬間には、誰もが驚愕の声を上げていた。その声は歓喜

であり、同時に畏怖でもあった。

『ご機嫌なMVPを、喰らえ！』

その言葉とともに1人の人間が屋上からぶらんと吊り下げられたのだ。それはボロボロになった2年Bクラス代表、恭二だった。突然の晒上げに生徒たちは教室を飛び出し一目見ようと校庭へと集まった。

「おのれFクラス、よくもこの俺を……」

意識が朦朧とするなか、恭二は忌々しげに校庭の生徒たちを睨みつけた。弱弱しい声が彼の限界を暗に示している。それでも最後の力を振り絞って言葉を続けた。

「まだまだ、俺は何度でも文月学園の英霊として蘇るからな……」

星5サーヴァント根本恭二(オルタ)、ピックアップガチャ開催決定！みんなもまわせー！

誰得なガチャはさて置き、捨て台詞を吐いた恭二は気を失った。途端に校庭の生徒たちはどよめきだす。

下劣な男の断罪への喜び、理解不能なテロ行為への恐怖、無秩序な行動への怒り、これからの学園生活への不安。未だに訳が分からない生徒たちは自分勝手な言葉を口々にした。

そんな大衆の反応を知ってか、機械音声は演説を締めくくるように言い放った。

『恐怖こそ自由！君臨こそ解放！矛盾こそ真理！それがこの世界の真実だ！服を着た豚ども、その真実に屈服せよ！』

それは新たな秩序の宣言だった。彼らは平穏でぬるい花畑のような生活など求めていない。権謀術数や暴力がすべてを支配する殺伐とした絶対的秩序を欲しているのだろう。そして試験召喚戦争システムはその秩序を支える仕組みの1つなのだ。

混乱する生徒たちを窓から見下ろす藤堂学園長は眉間にしわを寄せて呟く。

「やってくれたね……あのバカ」

ハーバード大学で講演をする前に、やらなければならないことができてしまった。藤堂学園長は高橋先生を呼び出すと、このバカげた反

逆行為の首謀者を抑え込むための指示を出す。そのとき、底の見えない笑みを浮かべた玲の姿が、藤堂学園長の脳裏をよぎった。

.....

「お前たちいくらなんでも今回は度が過ぎてているッ！もし怪我人が出たらどうするつもりだったんだッ！」

緊急の特別ホームルームでFクラス担任の西村先生は声を張り上げた。一歩間違えば大惨事となったテロ行為を繰り返させないためにもいつも以上に厳しく指導しているのだ。

Fクラス生徒たちも超絶シリアスな雰囲気の中、西村先生に威圧されたのか、茶々を入れることなく神妙な顔つきで座っている。だが、補習室内の重苦しい空気をはらうように秀吉はスツと姿勢よく拳手した。

「西村先生よ。そもそもの疑問なのじゃが、なぜわしらが叱られねばならぬのじゃ？」

「なんだと？」

「悪いのは正義断行委員会なるヤツらじゃろう？わしらとて模擬戦の最中に突然暴れたヤツらを許せぬ気持ちは先生と同じじゃ」

「.....模擬戦のために涙ぐましい努力を積み重ねてきたので困惑している」

「あくまでしらばっくれるというのかッ！Bクラスを襲ったのはFF F団だというのに白々しいぞッ！」

しらを切ろうとする秀吉と康太への怒りが爆発した西村先生は教卓を剛腕で叩きのめした。ゴリラマッスルパワーに耐えられなかった教卓は無惨にも崩れ去ってしまう。意見具申した2人もガラクタと化した教卓を目の当たりにすると口を閉ざした。まさに圧政、暴力による言論封殺である。

このままでは文月学園の自由さを損なってしまう。見かねた教授と呼ばれる不審者の老人が仲裁に入った。

「まあまあ。西村先生、どうかワシに免じて見逃してはくれぬかのう？学生ならではの自由さは宝ではなからうか」

「へっ.....バーロー。じっちゃんも良いこと言うじゃねえか」

「貴様らはなぜここにいるんだッ!? 学園に関係のない不審者どもは出ていけッ!」

朗らかな笑みを浮かべる老人と隣でドヤ顔を披露する青スーツのクソガキを、西村先生は補習室の外へと蹴飛ばした。いわゆるYAKKUZAKI KICKというやつだ。

だが間髪をいれず1人の少女が小馬鹿にしたような笑みを浮かべながら手をあげる。観察処分者であり今回の騒動の主犯、明奈だ。悪辣な笑みを浮かべた彼女は煽るかのごとく甘ったるく間延びした声を発した。

「鉄人せんせー! 推定無罪って知ってる〜? 確たる証拠もないのに教え子を犯罪者扱いですかあ?」

「……ッ!」

「FFF団の格好なんてだあれでもできますよねええ? 未成年のいたいけな〜? 無実の少年少女を〜? 厳罰に処すなんて〜? 教師としてどおおなんですかああ!?!」

「なぜ貴様はロクに勉強もできない観察処分者なのに悪知恵だけはまわるんだっ……!」

「え? だって、勉強と違って生きていくのに必要ですから」

キョトンとする明奈に西村先生は面食らう。普段からバカなことばかりして何も考えていないかのような彼女から、そんな発言が出てくるとは思っていなかったのだ。

『私の自慢の妹が教えてくれるはずです』

脳裏に浮かぶのは玲の言葉。生徒のためになる教育とは一体何なのか。玲の語る実践的な教育のあり方を受けて、西村先生は人知れず自問自答を繰り返していた。

ビジネスのための実学だけが優先され、契約書や規約の読解などに終始する教育なんてナンセンスだ。一方で、果たして自分たちは正しい教育をできているのだろうか。素晴らしい文学や古典を教材として使っておきながら、結局のところ詰め込み教育をして満足していないか。

時として学校という箱庭は荒唐無稽なファンタジーに侵されてい

る。一部の教師が信奉する不合理で曖昧な道徳モドキは、社会へ飛び立とうとする少年少女にどこまで必要なのか。現実離れした思考の大人に、厳しい社会を生き抜く術を教えることなんてできないだろう。

1人の教育者として西村先生はいつだって真正面から生徒と向き合ってきた。だからこそ三者面談で示された実践的な教育という宿題は、彼を悩ませ続けていた。

それでも1つ言えることは、今この場ではバカどもを弾劾できないということだろう。西村先生は証拠不十分でFクラス生徒たちを無罪放免にせざるをえなかった。

「……………もういい。今回は不問とする。だが、今後このようなことがないよう厳しく指導していくからな」

「いえー！私の勝ち！私の勝ち！よっしゃ、よっしゃ！基本的に勝つの好き！」

「ざあこつざあこつぎんごりらっ」

「草ア！オイオイオイ！オイオイオイ！あなや迂闊！判決、地獄行き！逃げる弱者にイキリ立っては荒れ狂い！もはや敵なし！」

「そうかそうか。さっそく教育的指導が貴様らには必要なようだな……………」

西村先生が実質的な敗北宣言をするや否や、明奈を筆頭としたFクラス生徒たちは鬼の首を獲ったかのごとく煽り散らかした。爽やかな青春ドラマの最終話で浮かべるような素晴らしい笑顔で、学年最底辺に言いくるめられた担任教師の無様なザマをあざ笑っている。漢・西村先生のせつかくのシリアスシーンが台無しだ。

そんなチンパンジーたちにキングゴングの怒りは天元突破！ボキボキと拳を鳴らす西村先生は、いつの間にか超サイヤ人のようなオーラをまとっていた。純黒の獅子が牙を剥く。

実践的な教育？正しい教育？そんなものクソくらえだ。やはり暴力こそが正義。Fクラスの狂気は確実に西村先生にも伝染しているようだ。

これには流石のFクラス生徒たちも慌てだす。いくらラーズジャン

みたいな筋肉モリモリマッチョマンの変態とはいえ、まさか拳ですべてを解決してくるなんて思ってもいなかったのだ。

「いやいやいや。そんな、暴力だなんて、軽く死ねますね」

「西村先生って最高の先生だよな。西村先生ありがとう」

「手をあげる男はダメだ。男があげていいのは天ぷらと売り上げとそして前髪だけ」

「貴様らあ……少しは反省しろお！」

西村先生が怒りを爆発させたことでバカどもは一斉に逃げ出した。

だが甘い。通常の3倍の速度で追跡するバケモノを撒くことはできず、次々と捕獲されてしまう。バカどもをちぎっては投げる西村先生。その姿は体罰教師を通り越して暴力教師だが、Fクラスの蛮族にはちようど良いのかもしれない。

何はともあれ、こうして模擬戦の落とし前は一応つけられたのであった。

………

「くそ……あのキングゴング絶対に許さないんだから」

放課後、巨大なたんこぶを作った明奈は帰宅しようと下駄箱へと向かっていった。結局、停学処分のような公的かつ重大な罰は課されなかったものの、クラスメイトともども激昂ラージヤンにこっぴどりと絞られたのであった。

普段であればとくに何事もなくこのまま帰るはずだ。ただ、今日は違った。下駄箱で翔子が待ち構えていたのである。

「……明奈」

「あ、翔子ちゃん！どうしたの？雄二はいないよっ」

明奈は完全に忘れていたが、未だ雄二は掃除用具入れのロッカーの中である。最初から最後まで蚊帳の外であったとは、哀れなり。翔子は首を横に振ると明奈を見つめた。

「……違う。用があるのは明奈。雄二じゃない」

「え、私？」

「……そう」

想定外の指名に首を傾げる明奈。よく見れば翔子は少し怒ってい

るようにも感じる。

「……Bクラスとの模擬戦、Dクラス戦と全然違った。容赦のない冷たい試合で卑怯な作戦ばかり」

「うーん、そうかな？ 私にはよくわからないよ」

「……とぼけないで。全部、明奈の仕業でしょう？」

じつと見つめてくる翔子に対して明奈は肩をすくめる。

「なんで私？ いつも通り雄二の作戦かもしれないじゃん？ あのゴリラ、外道だし」

「……雄二は狡くて意地悪だけど真正面から挑んでくる。でも明奈は違う。ルールを破った非道な手を使ってでも敵を叩きのめそうとする。私を助けてくれたときみたいに」

「そっか……。そんなこともあったね、懐かしいなあ」

「……私は一時も忘れたことはない。だってあの時のことがあったから今の私たちがいるから」

両手の拳を握りしめると翔子は懐かしそうに目を閉じている明奈を睨んだ。その眼差しからは彼女の力強い意志が垣間見える。

「でも、明奈のやり方、正しくない」

「へえ？……じゃあ教えてよ。この仕組みの深さを破壊する方法を」

「……ルールを逸脱した暴力革命では世の中を変えられない。だから私は社会の頂点に君臨しすべてを変えてみせる」

「私はそんな風には待てないけど？ シワシワのおばあちゃんになっちゃうじゃん。犠牲なくして改革なし、でしょ？」

「……明奈の世界は他人の犠牲の上に成り立つもの。私は違う。私が粉骨碎身することで世界を導く。すべては愛する夫のもとに嫁ぎ、愛する嫁を迎え入れるため。恋する乙女はワガママで欲張りだけど無敵なの」

「あはっ！ そうだね、そうだよね！ 恋する乙女は確かに無敵だ！ さすが翔子ちゃん！ やっぱ私、翔子ちゃんのことだあい好きだよ！」

「……私も明奈のことが好き。愛している」

見つめ合えばわかるでしょ？ と言わんばかりの熱いまなざしで明奈は翔子を見ている。その嘘くさくキラキラ輝いた両目が翔子に

リッスン・トウー・マイ・ハートと訴えかけていた。

だが、そんなまやかしは翔子には通用しない。始まりのベルが鳴る。鮮やかに、キメろ。

「……そして愛しているからこそ、嫁の間違いは正さなければいけない」

「はえ？」

目にもとまらぬ速さで翔子は、明奈との距離を一気に詰める。そしてモチモチ柔肌な明奈の両頬を力強く掴むと上空へと掲げた。アイアンクローというか万力のような技である。

強靱なパワーと握力で宙を浮く明奈は痛みのあまり絶叫した。夕陽に照らされるその姿は何か芸術的だ。

「みぎやああああ！痛いッ！痛いよ翔子ちゃんッ！何これDVッ!?」

「……学園長から明奈のお目付け役に任命された。嫁のおイタを矯正するのが私の役目」

アイアンクローによって浮遊する明奈の脳裏には、高笑いする学園長が思い浮かんだ。あの死にぞこないのクソババア！よくも眠れる獅子を起こすようなことをしてくれたん?! 明奈は心の奥底でありつたけの罵詈雑言をぶちまけた。

一連のテロ行為で藤堂学園長は明奈の危険性を十分に認識した。だが、出し抜かれた教師陣、諸悪の根源（仮）の玲では、極悪非道なバカ女の抑止力にならない。圧倒的な使命感と知性、そして武力を兼ね備えていて、なおかつ病める時も健やかなる時も明奈の傍にいてくれるような監視役が必要だった。

だからこそ、責任感が強く完璧無欠な親友を使うことでバカ女を抑え込む。それが学園長の秘策だった。しかも翔子は明奈を愛しており、できるだけ一緒に過ごしたいと考えていた。これぞ恋の抑止力というわけである。

「そんなのってないよ！返してッ！腐れゴリラには鬼嫁だけど私には甘々で優しい翔子ちゃんを返してッ！」

「……ダメ。まずは毎日みっちり勉強してもらおう」

「ああアあんまりだアアアア」

必死の命乞いも不発に終わってしまい無様な悲鳴をあげる明奈なのであった。トウー・レイト・フォー・インガオホー。やはり悪は滅びるのだ。イヤー！

かくして、明奈を取り巻く環境は一層複雑になった。それがまた新たな一波乱を呼ぶとは誰も知らない。

鉄鍋のバカ

文月学園全体を巻き込んだ模擬戦の翌日、憤怒の猛火をまとった優子は放課後の校内を探し回っていた。ゼツタイニユルサナイ。アノバカコロス。ぼそぼそと呪詛をこぼしながら徘徊する優子はさながらスプラッターホラーの怪物だ。

事の発端は今朝！まったく知らないBクラス男子が次々と優子に絡んできたのだ！彼らの口から飛び出すのは、酷いじゃないか、あんまりだ、という非難の言葉。猫を被って優しく丁寧に男子を宥めつつ話を聞いてみたところ身に覚えのない暴力沙汰に自分が関与したと言うではないか。

模擬戦でFFF団と結託してだまし討ち。間違いない。瓜二つな容姿をした愚弟が自分を騙ったのだ。これには(自称)温厚な優子も大激怒。こうして彼女は憎悪と憤怒に身を落とした怪物になったのである。

そんな悲しきモンスターを正気に戻すのは姫君の役割だろう。長い黒髪をなびかせた現代日本の大和撫子である翔子が家庭科室から顔をのぞかせていた。

「……ねえ優子。ちよつといい？」

「……………ア?……………え、えっ!?代表!?ど、どうしたの一体？」

「……………いいから。こっちおいで。こっち」

「ええ?なに?何なのよ、もう」

ちよいちよいと手招きする翔子に引き寄せられるように優子は教室へと入った。すると中には3人の女子が可愛らしいエプロン姿で調理台の前に並んでいた。

「第1回！姫路さんの(マジでヤバイ料理センスをどうにか直す)お料理教室！」

「……………わーわーぱちぱち」

「どんどんぱふぱふー」

「ふー」

なんだこれ。

栗毛色のロングヘアとカチューシャがトレードマークのバカ女こと明奈が威勢よくタイトルコールする。すると、気の抜けたほんわかした声で翔子と瑞希が合いの手を入れた。人知れず開催されていた謎イベントに巻き込まれた優子は眉をひそめている。

ふと顔を背けるとため息交じりにおでこに右手をあてている赤茶髪のポニーテール女子がいた。Fクラス有数の常識人でありパワー系女子でもある美波だ。自分と同じように引きずり込まれた優子を見ると、美波は苦笑しながら近くに寄ってきた。

「ああ、秀吉のお姉さんも巻き込まれてしまったのね」

「えっと……島田さん、だっけ？その、これは一体なに？」

「壊滅的な料理センスの瑞希を矯正するプログラムよ」

「……姫路さんってそんなにヤバイの？」

「ヤバいわよー！」

残念ながらガチャは無料にならないが、とにかくヤバイのは確かだ。先日の模擬戦で悪用された瑞希のクツキーは近年稀に見る大戦果をあげている。

累計被害者数は20人強、そのうち病院送りになったのは15人。現在も昏睡状態の被害者は4人もおり、そのキルレシオは圧倒的だった。そんな瑞希の殺人的な料理音痴を心配した明奈が開催したのが今回の矯正プログラムだ。

その主催者はラーメン屋の店主のように腕を組んで自信ありげな笑みを浮かべていた。

「ふっふっふ……1人ではできなくても3人いればモジャモジャの知恵！4人いればさらに凄い！今日で姫路さんのお料理スキルをカンストさせちゃうからねー！」

「……3人寄れば文殊の知恵。間違えた明奈は後でお仕置き」

「ヒエツ……！と、とにかくっ！みんなで協力してどうにかしようって作戦だから！しかも今日はなんと特別ゲストもいるからねー！」

知らぬ間に明奈の斜め後ろには眼鏡をかけた高身長な男が立っていた。禍々しいオーラをまとった男の目は血走っており見るからに

危険だ。思わず優子と美波は後ずさりしてしまふ。

「ジャー！学校の近くを徘徊していた自称、中華料理のプロだよ！」
「料理は『成仏』だぜ！陰陽五行により全てを支配するオレの力を見て驚け！キシヤキシヤキシヤシャシャー！」

「あの、私は吉井さんに料理を教わりたいのですが……」

申し訳なさそうに生徒役の瑞希がお断りすると、モジャモジャ髪の毛は肩を落として家庭科室から出て行った。先ほどのハイテンションから一転してトボトボと歩く彼の背中中は心なしか小さくなっている。いて哀愁が漂っている。かわいそう。

ラリった不審者が去ったことで美波と優子はひとまず安堵した。ただ一つ懸念は残る。果たして学園最底辺のバカである明奈は料理を教えることができるのだろうか。

「ねえ島田さん。吉井さんって料理できるの？」

「料理はできるみたいだけど……瑞希にちゃんと教えられるかが不安ね……」

「まあ見てロツテ明治ブルガリアヨーグルト！タイタニック号に乗ったつもりで安心してくれて大丈夫だよ！」

「……明奈、タイタニックは事故で沈むから不吉」

「え!?!じゃあくヒンデンブルク号！」

「それ爆発して墜落するやつじゃないのっ！」

イマイチ不安が残る会話だったが料理の腕はホンモノ。ゲームにたくさん課金するため節約生活を送っている明奈にとって、自炊なぞ日常茶飯事である。料理初心者に教えるなどお茶の子さいさいだろう。胸に手をあてている明奈はどこか得意げで自信満々。

そんな可愛らしい彼女を翔子は微笑ましく見守っている。ふと、優子は翔子が料理をどこまでできるのか気になった。

「そういえば、代表って料理できるの？」

「……料理は乙女の嗜み。これは雄二のお義母様と作ったカニの丸焼き」

「へえ結構良い感じ……って！カニじゃねえよ！ザリガニだよ！」

「……ドジっ娘属性も乙女の嗜み」

「え……翔子ちゃん？」

翔子が提示した写真は明らかにザリガニの丸焼きだ。信頼していた代表のあり得ないミスを目の当たりにした優子。動揺のあまりどこぞのクリーチャーが憑依してしまう。

能天気バカの明奈も当てにしていた親友が若干、地雷かもしれないという想定外の事実に関をひくつかせる。嘘だと言ってよ、といわんばかりに翔子のことを見つめるが渦中の人物は顔を背けて知らんぷり。

これもすべて雄二の母親に料理を習ったのが運の尽き。調理はできるが食材や調味料の区別がつかない立派な料理音痴が誕生してしまったのだ。

「勘弁してよ代表。私だって料理がそこまで得意じゃないんだから」

「あれ？もしかして秀吉のお姉さんも手伝ってくれるの？」

「まあ、ね。代表に頼まれちゃったし」

「……私のおかげ。ぶい」

可愛らしくVサインを作る翔子に思わず和んでしまう明奈だが、その横で優子は洗面を作っていた。あの愚かで卑しい弟のお姉さんと呼ばれたくなかったのだ。

「……その秀吉のお姉さんっていうのやめてくれる？優子って呼んでくれて構わないから」

「あの、私のことも下の名前で呼んで欲しいです。苗字で呼ばれるのは寂しくて……」

「おっけー！優子ちゃん、瑞希ちゃん！」

「あ、ずるい！ウチもいいかしら？」

「……みんな仲良し」

わきあいあい。そんなこんなでバカ女と優等生たちの親睦も深まったところで、お料理教室の開始である。まずは何を作るのか決めなければならぬ。

幸いにして食材などの利用は家庭科の教師から許可が出ているため、一般的な家庭料理であれば大体のものは作れるだろう。

「とりあえず手軽にできる料理がいいよね。バカのアホ炒めとか。

瑞希ちゃんは何か作りたいのがある?」

「病気の人でも食べられる料理がいいです。昨日からお父さんが体調を崩していて」

「となると、お粥かサムゲタンだねえ……」

「どうしてその二択になるのよ」

「……多分お粥が良いと思う」

そうやって翔子はスマートフォンを取り出してレシピを調べ始める。検索ワードに「簡単」「風邪」と入れて調べると、すぐにいくつものサイトが出てきた。その中から比較的簡単に作れそうなものをピックアップして5人で吟味する。最終的に選ばれたのは卵雑炊だった。

材料はそれほど多くなく、調理工程自体もシンプルで時間がかからない。栄養価も高くピツタリなメニューと言えるだろう。早速、鍋を火にかけて湯を沸かすと調理に取り掛かった。

「まずは卵を割って……キャー! そんなダイレクトに行くー!? すごいよ!? めっちゃ勢い良いよ!? あの……野球ボールじゃないんだから、卵! 憎しみでもこもってるの!」

「え? ああ……ごめんなさい。少し考え事をしてて」

「……優子、意外とパワー系?」

無意識のうちに愚弟への憎しみを優子が卵にぶつけてしまうなど、多少のひと悶着はあったけども、食材を処理して準備を進める瑞希たち。各々の手際はよく中々、何だかんだで料理に慣れているようだった。レシピ通りに作れば意外と瑞希の料理も大丈夫なのではないか。始めるまで少し心配だった明奈と美波は内心ほっとした。

だが調理が進む中、事件は起きた。必要な食材を入れてあとは煮込むだけという局面で瑞希が何かを思い出したようだ。がさごそと自分のカバンから見慣れないキノコを取り出してきた。一口サイズにカットされており、料理などで一度使用された形跡がみられる。

「そういうえば、お母さんが採取したキノコを持ってきたんです。料理で使えないかと思って」

「何この恐竜のうんこの化石みたいに汚いキノコは? まずそう……」

「……これは食用なの？」

「さあ？これを食べたお父さんはずっと笑ってますね。1人で小躍りとかして」

「もしかして体調不良の原因って……」

「まあ、加熱すれば大丈夫ですよ。えいつ」

「瑞希っ!?!加熱で無毒化できるものにも限りはあるのよっ!?!」

「え？また私なにかやっちゃいましたか？」

身元不明キノコがドボンと鍋の中に入る。完成しつつあった卵雑炊に異物混入。これぞ姫路クッキングの神髄であり恐ろしいところだ。足せば足すほど旨くなるといわんばかりに独創性あふれる物質を勝手に追加するのである。

美波の言葉に疑問符を浮かべる瑞希だが、怪しいキノコはすでに鍋の中で煮込まれてしまっている。修復不可能とみた翔子は我関せずといわんばかりに調味料による味付けを強行した。

「……とりあえず味を整えないと。お義母様から貰った魔法の調味料、明日の素を入れる」

「ちよつと代表ッ!?!それ殺鼠剤ッ!」

「……ばんなそかな」

瓶には小さく殺鼠剤と書かれていたが後の祭りだ。すでに劇薬が山のように鍋の中に投入されてしまった。お見事ね47、任務完了よ。

忘れてはならないが、雄二の母親である坂本雪乃はイカれたほどに天然ボケだ。めんつゆとブラックコーヒー、ザリガニと伊勢海老、を間違えてしまうならば当然、台所にある調味料と毒物の区別もつかないのである。そして、そんな雪乃に教わった全てを記憶する翔子は、一部の食材や調味料が毒物と混然一体になっていた。

信じていた義母(予定)による意図せぬ裏切りに軽く絶望する翔子。信頼した相手の言葉を素直に信じてしまうのは彼女の美徳であり弱点であった。とりわけ、周りに外道ゴリラやアナーキー・バカ女、天然ボケのような逸材が揃う環境で他人をホイホイ信じてしまうのは自殺行為に他ならない。

慌てふためく明奈たちだが、比較的冷静な瑞希が事態の収束を図った。よく見れば両手いっぱい様々な薬品の瓶をいつの間にか持っている。

「まだ間に合います！中和しましょう！水銀コバルト豆板醤！シアンマンガン豆板醤！」

「豆板醤入れすぎじゃないのこれ？」

「アキッ！それ以前の問題でしょッ！」

「……これじゃあ絶望という名の麻婆豆腐」

「他人事みたいに言わないで。代表にも責任はあるんだからね？」

歌うんだ☆クッキングのお時間です！

テンポ良くリズムに合わせて化学物質を大量投入していく瑞希を止められる者などいない。卵粥になるはずだった料理は毒々しいほどに赤黒く変色してしまった。最も天国に近いオリジナルな火鍋と呼ぶのもおこがましい。誰がどう見ても手遅れです。

RPGのラストダンジョンにありがちなマグマのようだ。隣接するだけでHPが減ってしまう。一度触れたが最後、爛れ続けてしまいうさだ。

頭を抱えて絶叫する優子と美波だが、明奈はお玉を持って顎に手を当てている。

「ちよつと！どうすんのよこれっ!？」

「なんかデーモンとか湧いてきそうじゃない!?ヤバいわよっ!」

「もしかしたら、底の部分とかで毒の少ない箇所とかないかな?」

一縷の望みにかけて鍋の中にお玉を突っ込む明奈だが刹那、何かが焦げる音がした。奇妙に思った明奈はくいつとお玉を引き上げる。

だが、ないのである。液体などを掬う円形の部分が、ない。

冷や汗をたらず明奈。ふと鍋の中を見ると金属片がキラリと光を反射した。おそらくこれが、お玉の残骸なのだろう。予測不可能な異常事態に明奈は悲鳴をあげた。

「ピカピカ見つけたゴブーっ!？」

「金属を溶かすのかもはや食べ物じゃないでしょ……!アキ!廃棄するわよ!」

「ダメだよ！食べ物粗末したら先生に食材にされちゃうからあ
！」

「ゼンブアノバカノセイダ……！ヒデオシコロスコロスコロス……
！」

笑顔絶やさない家庭科の先生は平常時であればほのぼのとした存在だ。ただ、食材を無駄にすると般若のように人格が豹変してしまう。食べ物を粗末にした生徒は地の果てまで追い回すし、場合によっては彼ら・彼女らを食材にしてしまうとか。当然、お残しも許されない。料理の廃棄は死に直結するのである。

では、どうすればいいのか。明奈は美波や優子とともに打開策を編み出すべく議論を始めた。喧々諤々。

そんな風にわちゃわちゃしている明奈たちを翔子と瑞希は遠目に見ていた。これ以上、鍋に近づくなと真剣な表情をした美波にクギを刺されてしまったためだ。あれは何人かをすでに殺めている女の眼に違いない。何だかんだで友達には甘い明奈と違い、愛する彼女を守るために美波は容赦のない対応をしがちである。

どことなくシヨンボリしている翔子だったが、対照的に隣に立つ瑞希はにっこりにこしていた。

「……明奈を困らせてしまった」

「そんなに落胆しないでください、翔子ちゃん。ほら！慌てふためく明奈ちゃんも可愛いでしょう？」

「……でも、好きな人にはずっと笑顔でいてほしいから」

「うーん？私はそうは思いませんけどね」

耳を疑うような瑞希の発言に翔子は驚愕した。不思議そうに首を傾げている瑞希のことを思わず凝視してしまう。対して瑞希は考え込むように指先で髪の毛をいじりながら怪訝そうな表情を浮かべている。

「どうして人は喜怒哀楽のうち喜びだけを尊ぶのでしょうか？喜びしか知らぬ者から祈りは生まれません。それに愛する人は笑っていても泣いていても怒っていても素晴らしいはずですよ」

「……どういふこと？」

「マクドナルドにだってハンバーガー以外のメニューが一杯ありますよね？でも喜びなんてせいぜいハンバーガー4個分くらいにしかありません。せつかく色んな感情があるのに、すぐもつたいたいことだと思いませんか？怒りや悲しみにだって味わうべきところはあるはずなのに」

唇を弓なりにする瑞希の瞳にはアビスのごとき深淵が広がっており、彼女の真意を読むことはできない。それでも何か仄暗く強烈な感情が伝わってくる。しつとりとした粘着質な欲望が。

「私は明奈ちゃんの全てを余すところなく味わいたいです。そしてきつとその先に私の憧れがあるはずなんです」

なんとという悪食。なんとという強欲。なんとという邪悪。

無邪気な笑顔でおぞましい願望をあらわにする瑞希には悪意もなければ邪念もない。ただただ純粋に愛する明奈の全てを欲しているのだ。くいしん坊万才なんて言ってられない。こいつやはりやべー奴なのかもしれない。

突如、異常さをあらわにした瑞希を一瞥すると翔子は片眉を上げた。

「……愛する人の幸せだけを願うのがいけないとでも？」

「おやおやおや。誤解しないでください。あくまで私の考えに過ぎないのですから」

「……瑞希の考えは危険」

「ふふふ。翔子ちゃんに共感してもらえなくて残念です」

言葉とは裏腹に楽しげな笑みを浮かべる瑞希。その表情からは本当に残念だと思っているようには見えない。ほのぼのイチャラブ至上主義者と曇らせ愉悦部はもとより相容れぬ存在なのだ。

そんな性癖バトルが繰り広げられる中、毒々しい料理をどうすべきか審判団は結論を出したようだ。

「えー、使った食材に申し訳ないのでこれから実際に食べてみたいと思います。で、もし無理そうであれば瑞希ちゃんのお父さんにあげることにしましょう。ほら、瑞希ちゃんと翔子ちゃんもこっちおいで」

「……………え？食べるんですか？これを？」

「気乗りしないけど仕方ないでしょ。食べないとウチらが食材になっちゃうんだから」

「でも、薬を使って評価を上げるなんて料理じゃないです。料理とは人の心を満たす愛情ですから」

「つまりどういうこと?」

「要約するところの料理は生ゴミ以下、ということですよ」

「そうだったのは瑞希が原因なんだけどっ!」

さもありません。美波のツツコミの通りである。適当な理屈をこねて逃れようとする瑞希だったが、そう思うならばそもそも薬物を投入するな、という話である。隣に指導役がいてちゃんとしたレシピもある中で、あえて化学品をぶち込むあたり肝が据わっているというか、おそろく確信犯なのだろう。

だが、愛しの天使を曇らせようとする何らかの形で自分に返ってくるのである。これぞ天罰。瑞希は心の底から後悔した。これからは料理を作るときはレシピに忠実に作ろう。自分の料理によって窮地に追いやられたことで、瑞希はそう固く誓うのであった。

だが、1人の少女が改心しようとする目の前の最後の晚餐は消えてなくなりほしくない。どんよりとした空気の中、紫色の煙を立ち上がらせる灼熱の溶岩のような卵雑炊らしきものを乙女たちが囲んでいる。いざ、試食のときである。

「じゃあみんな、行くよ? いぎ、滅びゆく者のために!」

「……滅びゆく者のために」

明奈の呼びかけとともに少女たちは一斉にパクリと卵雑炊だったはずのものを食べた。天国の味を理解するには一度地獄を見ておかなければならない! そうでなければ天国の素晴らしさは解らない! そういう観点からすれば、これも試練の1つなのかもしれない。

だが、瑞希の作り出したバイオ兵器は乙女たちにはへヴィすぎたようだ。校内を巡回していた現代国語の竹内先生が発見するまで、明奈たちは白目を剥いて痙攣していたという。ちなみに、余った分は全て瑞希の父親が完食した。MOTTAI IN AI精神の犠牲となった男の入院期間は少し延びたのかなんとか。

これが次の騒動の発端になるなんて、このとき明奈が知る由などなかった。

バカ女と清涼祭とキマシタワ

「……おはよう、明奈」

「げえっ！翔子ちゃん！どうしてここに!？」

それは日課となりつつある親友の来訪だった。

ある日の朝、ぐっすりと眠っていた明奈は何度も鳴らされるチャイムの音で起こされた。来訪者を迎えるべく玄関を開けたところ、そこには親友の翔子が凜とした佇まいで立っていた。

深刻な学力不足と倫理欠如を重く見た翔子は、定期的に明奈のことを監視するようになった。きちんと勉強をしているか。理解できていないところがないか。品性のある言動を保っているか。登下校から放課後まで、翔子は明奈の一挙手一投足を監視していた。

「……今日は明奈の日だから一緒に勉強しながら登校する。そうしないと学力が上がらない。というか、もはや手遅れ」

「ぐぬぬぬ、悲しいけど正論過ぎて何も言い返せないっ!」

「……早く行かないと遅刻しちゃう。まずは世界史から」

翔子は教科書を広げると、明奈に外へ出るよう促した。ちなみに、パリツと制服を着こなしている翔子だが、明奈は依然としてパジャマを着たままである。だらしねえなあ!

それもそのはず。姉が仕事で国外に出払っている今、明奈は至福の二度寝タイムを享受するつもりだったのだ。当然、勉強漬けのお散歩デートなどという絶妙なラインで遠慮願いたいイベントは、なにがなんでも避けなければならない。ゆえに、彼女は翔子にとってのアキレス腱である男の話を持ち出した。

「あのさ翔子ちゃん。実はここだけの話なんだけど雄二が昨日、Bクラスの女子とデートしてたってウワサ知ってる?」

「……そんなことはありえない。何かの間違い」

「トラストミー。私、翔子ちゃんに、ウソツカナイ」

「……今から雄二のところに行く。勉強はまた今度」

「うんうん。了解!気にしないでいいよ!」

音速で走り去っていく翔子を見届けると、明奈は額の汗を拭うと爽やかな笑みを浮かべた。

「いやあ……翔子ちゃんってば本当にチョロいなー!」

雄二がBクラスの女子とデート? 真つ赤な嘘である。翔子との勉強タイムをサボるために、無実の雄二を生贄に捧げたのだ。なお、浮気をしていないという悪魔の証明を迫られた男の悲鳴が、町のどこかで轟いたとかなんとか。

今日も明奈は、朝から元気いっぱい腐れ外道女なのであった。

.....

そんな酷いことがあった同日、Fクラス生徒たちはホームルームを終えた放課後も居残りをさせられていた。面倒くさがっている生徒たちを一瞥すると西村先生は櫛を飛ばす。

「貴様ら! とつとと清涼祭でやるクラスの出し物を決めろ! どうしてこんなに時間がかかっているんだ!」

「トライアンドエラーと申しましょうか、あるいはトライエラー。そして時にはストップしてレシンク、考えなおし、またランナゲン、走り出すと。こういう歴史がすなわち手順になっておるんじゃないかなど」

「言語明瞭、意味不明察なことを言うんじゃないツ!」

「アキ危ないっ!」

「美波ちゃん!」

どこぞの政治家のような言い訳をする明奈に向かって、西村先生はクラス名簿をブーメランのように投げた。アワレ! バカ女は爆発四散! サヨナラ! となるかと思いきや、名簿は美波の手刀で明後日の方向へと飛んで行った。さすがはゴリラ・パワーを秘めた乙女である。

「西村先生! いくらなんでも体罰はやり過ぎです!」

「えーマジ体罰!?!」

「キモイ」

「体罰が許されるのは原始時代までだよねー」

「キャハハハハハ」

「貴様らあ……!」

瑞希の抗議に呼応して煽るFクラス生徒たち。さながらモンキーパークだ。

青筋を浮かべる西村先生。そこに追い打ちをかけるように秀吉が笑みを浮かべてはんなりどすえなお気持ち表明をする。

「いやはや、しかし西村先生も大変じゃのう。出し物の内容を決めるために暴力までふるわれるとは。随分と時間を大切になさっておるようじゃ」

「……………下らない。どうせ教頭に散々嫌味でも言われたのだろう。学園長が不在だからといって傍迷惑なヤツだ」

「土屋……貴様どこでそんな話を」

「……………この程度の情報どこからでも手に入る」

康太は前髪をふあさつとするとドヤ顔をした。数分前にも悪戯な風が明奈のスカートをひらつかせただけで鼻血を噴き出したムツツリだが中々侮れないヤツである。

海外の学会で発表するため、学園長は清涼祭の期間は不在だ。代わりに陣頭指揮を取るのが教頭先生。山姥がいないということもありウキウキハイテンションだとかなんとか。

何やら好き勝手スポンサーを募って大規模イベントを企画しているようだが、清涼祭に興味のないFクラスの面々からすればどうでもいいことだった。

「学園祭とかクソイベだろ。それよりも古戦場周回するわ」

「リア充とカップルを喜ばすなんて虫唾ダツシュ」

「おままごとに参加する暇はないんだな」

口々に不平不満をこぼすFクラス生徒たち。我関せずな康太と秀吉。あくびをする明奈。なぜかいない雄二。みんなのやる気もなければ、旗振り役もない。誰がどう見ても「終わっている」状況だ。

だが、それも一人の少女の言葉で変わろうとしていた。
「……………あつ……………あのっ！私は！みなさんと文化祭を楽しみたいです！だからっ……………一緒にやってみませんかっ!？」

「瑞希ちゃん…………？」

瑞希は突然、立ち上がり大きな声をあげた。豊満な胸の前で祈るよ

うに手を組むとクラスメイトたちに訴えかける姿は、さながら聖女といえよう。

懇願するような表情、小さく震える肩、少し潤んでいる瞳。切羽詰まっている、とも言えるような姿に明奈は一抹の不安を感じた。いったい彼女は何を恐れているのか。

そんな不穏な空気などつゆ知らずなFクラス生徒たちは、思い思いの格好良さげなポーズをとると、醜いきめ顔をさらした。

「おいおい。勘違いしないでくれよ姫路さん。オレはいつだってやる気ビンビンだぜ?」

「祭り最高!文化祭最高!」

「僕らは一生パーティ・ロッカーさ」

「仕事なんでもやる!」

「アルバイトですか?」

「アホ死ね」

「みなさんっ……!」

美少女のお願いにいきり立つバカども。先ほどまでのダルそうな雰囲気から一変してやる気マックスだ。朝令暮改。手のひらドリルでぐるんぐるんだ。

ゆさゆさと揺れる豊満なバストに惑わされる男たち。あまりにもダサい教え子たちの変わり身に西村先生もため息を吐いた。将来、綺麗で高額なイルカの絵を買わされそうなバカさ加減に、鬼の鉄人も心配になってしまふ。やれやれと額に手を当てると西村先生は言葉を発した。

「貴様らマヌケの言い分はいつも致命的にズレている。文化祭でカネを稼げる。そうは考えられないのか?」

「「なん……だと……!?!」」

「学園長のはからいで売上の一部を教室設備に使ってよいとのことだ。社会勉強だと思って少しは真面目にやってみてもいいと思うがな」

既に西村先生の言葉は生徒たちに届いていなかった。文月学園では、勉学に支障がでなければ教室内の設備を生徒が自由に変えて良い

ことになっている。Aクラスの設備が異常なまでに充実していることからわかるように、意外と融通がきく学校なのだ。

ただ万年金欠のFクラス生徒たちには、教室を都合よく作り替えるなんて夢のまた夢。

金さえあれば、金さえあればAクラスみたいな教室にできるのに！
今から用意できれば、半年以上もの間、快適な学園生活が送れるのに！
ダカラ、現金ガスグニ大量ニ、喉カラ手ガ出ルホドニ欲シカツタ
……！

気づけばFクラス生徒たちの眼は爛々と輝いていた。いかにしてリア充やカップルから金をむしり取ろうか。搾り取った金で何を買い揃えようか。教室内にはみんなの邪念と欲望の入り乱れていた。

「やる気なのは結構だが羽目を外さないように。実行委員の吉井と島田の言うことはちゃんと聞くんだぞ？」

「ドウエツ!? どうしてですか鉄人！私は何もしてないのにつ！」

「前回の試召戦で大暴れした罰だ。島田、女房役としてそのバカの手綱はしっかりと握っておけ」

「女房……ウチが、アキの……お嫁さん……ふふふふふ」

「鉄人！美波ちゃんが壊れました！なにもしてないのに！鉄人のせいですよ！」

「知らん。そんなことは俺の管轄外だ」

言葉の響きだけでエクスタシーを感じて別世界にトリップしてしまった美波。先ほどと打って変わって目を細めてほの暗い笑みを浮かべてプレッシャーをまき散らす瑞希。明奈を中心としたカップリングは今日も修羅場でいっぱいだ。

「鉄人はミナアキ派か……わかっているじゃあないか」

「あーきーみーなー！」

「夜景見るか、百合見るか。どっち見ても幸せじゃないですか」

「……今日中に出し物を決めるように。以上だ」

カップリング論争に大盛り上がるのバカたちを尻目に、西村先生は教室を後にする。

さて。目障りな大人が消えたことで、Fクラス生徒たちはそれぞれ

凶器を持つとおもむろに立ち上がった。クラスの出し物を決める“話し合い”をするためだ。

「単刀直入に聞くけどさ、おまいら何やりたいん？オレっちはウエディング喫茶なんだけどさ」

「当然カジノだろッ！快感は……本当のめくるめく快感は……常軌を逸するからこそ辿り着けるッ！」

「……………否！写真館こそ正義！至高のアートは感性を豊かにする！」

「演劇だ！魔法少女、いや魔法ヒデオシで秀吉の可愛さをアピール！ブロードウェイも夢じゃない！」

「絶対にイヤじゃッ！」

「おちんちんランド開園！」

「できたてのポップコーンはいかが？」

自分の意見押し通そうとヒートアップしていくFクラス生徒たち。いつの間にか、殴る蹴る投げ飛ばす、な全員参戦の大乱闘が始まっていた。できたてのポップコーンとブーケが舞う中、魔法ステッキやスロットマシンを武器に殺し合う姿は、実にシニールだ。

話し合いなんてまどろっこしいことやってられるか！手っ取り早く暴力で解決してやる！Fクラス生徒の頭を叩いてみれば未開社会の音がする、というわけだ。

これには実行委員もお手上げ。あきらめ気味の明奈と正氣に戻った美波は争いを静観するほかなかった。

「あーもうめちやくちやだよ」

「ちよつと！好き勝手に暴れないでよ！」

「やれやれ、これだからおバカさんたちは困りますよ」

刹那、生徒たちの動きが止まる。先ほどのバトルフィールドの中心には須川亮が佇んでいた。背中を大きく反って、やれやれだぜ、と言わんばかりにスタイリッシュに立っているの、タダ者じゃないように見える。

「中華喫茶こそが最適解。飲茶メインの喫茶店ならば利益を出しやすく運営も容易。それに中華4千年のノウハウを活かせば確実に繁盛

店にできる。そうでしょう？教授」

「おお！そりゃあそうじゃあ！ピツ、ピカチュウ」

亮の言葉に白衣を着た白髪の老人はねっとりとした声で同意した。明らかに普段いる不審者とは別の老人だが、Fクラス生徒たちはそのことに気づいていないようだ。151匹しかモンスターを発見できなさそう。

それはともかく、意外と良さげな案に美波と明奈は満足げに頷く。「普段は役立たずの須川にしては随分とまともね。須川は気持ち悪いけど」

「世界ランク圏外の須川君のくせに名案出すじゃん！須川君は生理的に無理で気持ち悪いけど採用！」

「泣いていいか？泣くぞ？てか泣くわ」

漢・須川は静かに涙を流すと教室を去った。安住の地を追い出された亮の歩む道はさながら涙トレイル・オブ・ティアーズの道。なんて薄情な奴らなんだろうか。

妙案を得られた明奈たちだったが、これで一件落着とはならないのがFクラス。自分の案を押し通したい輩は各々の武器を掲げて声を荒げている。

「バカ女が仕切るとか舐めてんのかああん？大人しく俺の嫁になっとけやゴラァー！」

「実に下らない。バカの出る幕などないというのに。島田女史に可愛がられていればいいんですよ、まったく」

「おめーの席ねえから！」

「みんなしてヒドスンギ伯爵なんだけど!？」

好き勝手に不平不満をこぼすFクラス生徒たち。いちいち明奈に反抗的なのは何だかんだで彼女のことを好きだからだろう。だが、そんな不屈き者を明奈マンセーの美波が見逃すはずがない。

すかさず、床に座り込んでいた福村幸平の顎を勢いよく蹴り上げる。突然の暴力により天井に突き刺さった幸平は手足をだらんとさせた。汚いシャンデリアの完成だ。

「アキの決定に齒向かうヤツは、そこにぶら下がってるカスみたいに

片っ端からシメるけど……どうするっ？」

「意義なし！」

「大賛成！」

「吉井大天使バンザーイ！」

「はい！私は！幸福です！」

恐怖のあまり失禁した男たちは、先ほどまで澱んでいた眼を爛々と輝かせると万歳三唱し始めた。これぞ暴力による独裁である。この教室では命の価値があまりにも軽い。

西村先生、雄二、美波によるFクラスの支配体制が確立された瞬間であった。これぞゴリラゴリラゴリラの三頭政治である。

涙を流しながらも手を挙げるクラスメイトたちの無様な姿に、思わず瑞希も笑ってしまう。

「ふふふ。Fクラスの皆さんは自由奔放でいつも楽しそうですね」

「圧政の下での自由ってあるのかな？」

「でも誰もが生き生きとしているじゃないですか。思うがままに好き勝手やって」

「うくん……？そうかな？そうかも？」

「……ほんと、羨ましいです……」

まただ。寂しそうに目を伏せる瑞希に、明奈も胸がキュっとなる。

「瑞希ちゃん……いったいどうし」

「よしいいよしいい！今日という今日こそは許さねえからなああっ！」

「ペーネロペーッ!？」

「明奈ちゃんっ!？」

「お前のせいだからな吉井イ！お前のせいで俺は……俺はッ！」

シリアスで尊い百合領域が展開されるはずが、バイオゴリラのエントリーでキャンセルされてしまう。

明奈に渾身のリアアットをかまし雄叫びをあげる雄二からは覇者の風格さえ感じられた。

髪の毛を逆立たせて瘴気をまとう雄二はすでに狂気に侵されている。これには流石の明奈も洒落にならないと感じたのか、必死になっ

て命乞いを始める。

なお、頬を染めて興奮気味に無様な明奈を見つめている瑞希は、やはり非常にやべー奴なのかもしれない。

「お、お、お、おちついてよ雄二。話せば！話せばわかる！」

「問答無用！」

「おうおうおうっ！」

「……………見えっ！見えっ！」

必殺エビ固め！

あまりの激痛にバカ女はオットセイのごとく上半身をのけぞらせることしかできない。

ちなみに、明奈の足元には例のごとくシャッターチャンス狙いの康太が、虫のように這いずり回っている。

そんな康太の頭を踏みつぶした美波は、雄二にアップパーをかました。ジャパニーズ・クラシック・スタイル・昇竜拳である。

「アキをイジメんな！バカモト！」

「ルツピョロ専用ヒギョパム!!」

正義の鉄槌を下す雄二だったが、愛の前には無力だ。愛する少女を守ろうと駆け付けた美波の右ストレートパンチに、雄二は叩きのめされ気を失う。暴君のダウンにクラスメイトたちも浮足立つ。

「百合豚は通す。俺嫁も通す。百合に挟まろうとする男は通さない。

男の面汚し。男の使命を捨てた者」

「貴公の首は柱に吊るされるのがお似合いだ」

「もぎたて魂、とつてもふれっしゅ♪」

「雄二よ、悪く思うでないぞ。わしの恨みはまだ晴らされておらぬのじゃ」

縄張り争いに敗北した負け犬に追い打ちをかけんと、拘束具と武器を持ったクスどもが動き出す。前から気に入らなかったんだよ、お前のことが！と言わんばかりだ。

このとき、相容れないはずの萌え豚と百合豚の心が1つになった。共通の敵が平和をもたらすということか。簀巻きにされた雄二はFクラスの深淵へと引きずられていった。

「それにしてもアキッてば坂本に何をしたのよ？」

「いやあ、それがカクカクシカジカ四角いムーブで……」

「坂本君を生贄に捧げて翔子ちゃんを除外したんですか？」

「ただのクズじゃないの」

「確かにFクラスはみんなクズだよ？でも世の中にはいろんなクズがいるの。私は光のクズ」

まったく反省していない明奈は通常運転のクズ女だった。

それはともかく。先ほどから瑞希は何やら浮かない表情だ。

詳しく話を聞いたところ、どうやら瑞希は転校の危機に瀕しているようだ。劣悪な学習環境と愚かで邪悪なクラスメイトに瑞希の父は、尋常でないほどに不安を感じているとかなんとか。

「瑞希ちゃんが……転校……？」

「まあ……そりゃあそうなるわよね。今の瑞希はFクラス所属だし……」

「はい。ちゃんとした環境で学べる高校は他にもあるだろうって……」

「そんな……」

「絶対に文月学園でないといけないような理由があるといいんだけど、うーん……」

何か理由があれば。それこそ文月学園でなければいけないような切実なものが。

ぎゅつと拳を握りしめる明奈。自分にできることは何かないか。明奈は8バイトしかないオンボロ脳で必死になって脳を回転させる。熱暴走しそうなほどに酷使した結果、彼女は常人では考えられない結論に至っていた。

真剣にシリアスな表情で、明奈はとんでも発言をしでかしてしま

う。

「瑞希ちゃん！私のモノになって！」

「……………はへっ!？」

説明と論理を極限まで省いた結果、大事故を起こすバカ女。完熟トマトのように顔を真っ赤にして停止する瑞希。この世の終わりかの

如く絶句する美波。

こうして史上最低の学園祭が今まさに始まろうとしていた。

バカ女とメイド喫茶とロリータ

「いい加減にしてよ。全員立たせて怒鳴りたい。一体君らは何のためにそこに座ってるんだ」

清涼祭当日、Fクラス生徒たちは補習室で弛緩しきっていた。各々が胡坐をかいてやる気のなさそうな表情を浮かべている。すでに学園祭は始まっており、校内に少しずつ客がやって来ているのに対して、Fクラスの中華喫茶は半ば開店休業状態だ。

幸いにして、秀吉や瑞希の頑張りでテーブルなどの準備は終えられたものの、客を迎え入れられるような体制ではなさそうだ。これには現場統括を自称している亮も憤りを隠せない。

「もう終わりがかかっているような奴に……」

「ジツイジイ！ イエーヘイ！ ペケモンゲットだぜイエーヘエエ！ ミナアキのブンモハアー！」

「まーたジグザグマかよ。死ね」

だが、いくら亮が大声で喝を入れてもクラスメイトたちはどこ吹く風だ。自由気ままにゲームをしたり怠けている。

羊の集団でもリーダーが狼に変われば、羊はみな狼に変わる。逆に言えば、陣頭指揮を執るのがロクでなしであれば、羊はナマケモノに変わるといふわけだ。武人然としたFクラス男子は嘆息すると苦言を呈した。

「我々の忠義は島田閣下にある。かのお方が精魂尽きている以上、我らは動かぬ」

「島田閣下バンザイ！ 吉井大天使バンザイ！」

「もう終わりだよこの箱^{クラス}」

思考停止で美波に付き従おうとする同級生に流石の亮も匙を投げた。凡人1人の熱意だけではカリスマ的暴君の残した爪痕をなくすることはできないのだ。

さて、当の閣下こと美波だが、補習室の隅で絶望感に満ちたオーラをまとって体育座りをしている。

「恋愛なんてこの世から消えてしまえばいいんだ」

ぶつぶつと独り言を繰り返しながら暗い目で虚空を眺める姿は、見えていて哀れを通り越して怖いくらいだった。

「大きな星が点いたり消えたりしている……アハハ、大きい！彗星かな？いや、違う……違うな。彗星はもつとバーツて動くもんね」

「ねえねえ、どうして美波ちゃんは精神崩壊してるの？」

「えつと……私の口からは言えないです……。その……ごめんなさい……あの……ハニー？」

「え、なになに。どうしたの急に。よくわかんないけど、ダーリンって呼んだ方がいい？」

「あう……」

「ミズアキ？アキミズ？」

「キマシタワー」

すっかり恋人を通り越して夫婦気取りな瑞希のノリに、明奈は首を傾げつつも乗ってしまう。自分の失言がもたらしたカオスな状況を理解できていないバカ女なのであった。

そんな甘酸っぱい百合青春ラブコメ空間もモジャモジャ頭の中華料理人の言葉で中断される。

「オイ。如意瑞鳳の完成だ。とつとと運べ」

「アイヤー！シエイシエイ！さつそくお客さんに持って行くアルねー！」

料理を受け取った明奈は、迷走気味のキャラ付けで配膳に向かう。

「タオタオ星からお待たせしたアル！なんかスゴそうな中華3人前アル！」

「変な語尾ザウルス」

「人をバカにした語尾ナノーネー！」

「そんな語尾でよく外に出られるでハックツ」

お前らに言われたくないオブザイヤー。イロモノ決闘者トリオの戯言にイラつとってしまう。

流石の明奈も失礼なクレーマーたちを殴ってやろうと拳を握りしめていたが、シャッター音に気付き視線を落とした。足元を見ると、

虫のように這いつくばって明奈のことを撮影している康太がいた。

「ちよっ！ムツツリーニっ!?なんでこんなところにいるの！厨房の担当でしょー！」

「……………邪悪なノッポ料理人に追い出された」

「あの怪しい男だけで厨房がフル回転しておるのじゃ。おかげさまでわしらはお役御免というわけじゃ」

振り向くとそこにはウェイター姿をした秀吉が立っていた。どこからどう見ても男装している美少女にしか見えないが、言わぬが花だろう。

その後ろでは雄二がかつてないほど爽やかな笑みを浮かべて腕を組んでいる。

「よう吉井。相変わらず元気そうで何よりだ。清涼祭も楽しんでいこうぜ」

「過去最高に気色悪いよ雄二。笑顔がキモすぎてサブいぼと蕁麻疹が出ちゃったよ」

「ははは。そうかそうか。そんなお前にプレゼントがあつてな」

「あの……雄二？どうして後ろから腰回りに手をまわしているの？セクハラ?」

「てめーみたいなクソにセクハラなんかしねえよ！死ぬゲロカス女ア！」

「グスタッフ・カール！」

鮮やかなジャーマンスーププレックスホールドに教室内のお客様たちは拍手喝采。先ほどのイロモノ三銃士もスタンディングオベーションしている。

これぞ散々バカ女に煮え湯を飲まされてきた男の仕返しである。漢・坂本雄二は男女平等に暴力を振るう21世紀の紳士だ。自称、一億年に一度の美少女が相手だろうと容赦はしない。なお、今朝もバカ女に騙されて差し向けられた翔子にはなすすべなく完全敗北した模様。

「痛いよ雄二！このせいで頭が悪くなったらどうするのさー！」

「もとからだろ」

「他人のせいにするでないぞ」

「……………自業自得」

「せっかくですし皆さんもホールで配膳係をしませんか？女装して」
「瑞希ちゃん……………飲食店で汚物を陳列すると営業停止処分になるんだよ？」

「そのゴミカスの言う通りだ姫路。秀吉ちゃんと違って俺たちの女装なんて見れたもんじゃないぞ」

「……………女装男子の秀吉ちゃんと俺らを同列に扱わないで欲しい」

「雄二、ムツツリー二……………後で覚えておくのじゃぞ」

いつも通りのゆったりとした茶番を繰り広げる5人だったが、そんなゆっくり茶番劇を中断させる小悪魔が軽やかな足取りで突撃してきた。

「バカなお姉ちゃん！」

「ギャルセゾン！」

「明奈ちゃん!？」

突然襲来してきた幼女のロケット頭突きで明奈は倒れた。全盛期のエドモンド本田を彷彿とさせる芸術的な一撃だ。ノックダウンした明奈の胸にツインテールの少女は嬉しそうに頬ずりしている。

「ヒューッ！なんだいあの幼女は！」

「プリケツの絶傑！」

「まったく、小学生は最高だぜ!!」

「おねロリキタコレ！」

新たな美少女とキマシタワーの供給に、先ほどまで怠惰なストライキをしていたFクラス生徒たちも色めきだつ。愛くるしい年下の美少女に良いところを見せたいという欲望が原動力となり、ウェイターとして動き回る。1人の幼女がFクラスを救ったのであった。

「葉月!? いったいどうしてここに？まさか自力で来たの?」

「バカなお姉ちゃんに会いに来たのです！なんてったって葉月のお嫁さんですからー！」

「うええっ!?! また私にかやっちゃった!?!」

知らないうちに小学生女子に嫁扱いされ困惑気味の明奈。だが、悪

友たちは冷ややかな眼で見下している。信用がミリほどもないのは日頃の行いのせいである。

「まさか小学生に手を出すなんてな。救いようのないクソバカゲロカスゴミ女が。恥を知れ」

「汚らわしい。歩く性犯罪者め、世のためにも早く自首するのじゃ」

「……………イエスロリータ、ノータッチの精神を忘れたケダモノ」

「ただ10年ぐらい先に生まれただけなのに……………この地球の”億”のつく年齢から考えれば、10年なんて誤差もいいところでしょ」

「そうなのです！バカなおねーちゃんと葉月の愛を、年齢では縛れないのです！」

一方で、絶望に叩き落とされたのが明奈スキーの2人だ。とくに美波は妹の登場で再起動したというのに、再びブラツクアウトしてしまった。

「冗談ですよね？明奈ちゃんはロリコンさんなんかじゃありませんよね？不倫なんかしていませんよね？」

「どうしてなの？どうしてアキはウチの心を何度もズタズタにするの？」

「……………やはり暴力系ポニーテールは負けヒロインの証……………カハツ！」

「なるほど……………つまりポニテは絶対に正ヒロインになれない、物語の添え物。いわば刺身のツマってワケね。バーロー」

なんでや千棘は完全勝利したやろ！

オタク特有の失礼発言に対して地獄突きが飛ぶ。これには康太も一発KO。勝者となった美波は血涙を流しながら、気絶した康太を教室の隅へと勢いよく蹴飛ばした。ポニテの娘かわいそう。

なお、したり顔でカスみたいなことをほざいた青いスーツと蝶ネクタイのクソガキは処刑を免れている。幼い少年・少女、動物に対する暴力表現は世の中の的に厳しく制限されるためだ。西欧的人権意識に救われたな、小僧。

そんなスラム的イベントを華麗にスルーして、明奈は注文の品を配膳した。提供された料理のあまりの美味しさに満面の笑みを浮かべ

る葉月。ほほ笑む明奈。なるほど、確かに歳の差夫婦に見えなくもない。

「うーん！デリシヤスマイルー！」

「肉まんおいしおいしだねえ。葉月ちゃんはピンインが好きなんだね？」

「バカなお姉ちゃん。葉月が食べたのはマントウでしたよ？」

「やばっ……オーダーミスしちゃった」

餡の入っていない饅頭マントウと中華まん饅頭バオズを間違えるバカ女なのであった。ちなみに、ピンインは焼売のことを指す。徹頭徹尾、間違いだらけである。

どうしようもないバカさで、高校生の威厳を示すどころか、優秀な小学生にボロ負けしてしまう明奈。君は小さな優等生、僕は大きな劣等生。年だけ重ねても優秀になれるわけではないのだ。

才女・葉月に諭され、恥ずかしさのあまり膝をつく明奈。そんな無様な彼女を取り囲んだ悪友たちは、下衆な表情で揶揄する。

「ツカー！小学生に負ける高校生とかおりゅー??！」

「……………全高校生の恥さらし。腹を切って詫びろカス」

「まったく救いようのない愚か者じゃな。いやあく乱世乱世！」

「なんかおかしくくないですか？みんなは違和感を感じないですか？こんな風潮に絶対に負けたくない。この私が負けるはずがない」

これみよがしに煽り散らかしているが、彼らも何が何だかわかっていない。とどのつまり全員、小学生以下のお頭なのだ。そんなバカたちちに亮が声をかけた。

「おう坂本。せっかくだから吉井や島田たちと他クラスの出し物でも見てこいよ。料理とかは俺たちがやるから大丈夫だぜ」

「サボれるのは俺としても有難いが、良いのか？」

「気にすんなよ。てか、島田姉を連れて早くどこかに行ってくれ。このままだと中華喫茶の統括マネージャー兼FFF団の団長としての俺の威厳が…………」

後半ブツブツと独り言をこぼしているが、つまるところ亮が喫茶店を支配する上での邪魔者を追い出したようだ。何とも小物臭い浅

薄な思考だが、お言葉に甘えて明奈たちは葉月を連れて他のクラスの出し物をまわることにした。

「うわあああッ！オレの手が勝手に料理を口に詰め込もうとしてくるドン！こんなのおかしいザウルス！」

「ゴルゴンゾーラ、ペペロンチーノ！ワターシの身体なのーに、まったく制御が効かないなんーて、ありえないノーネ！」

「もう食べたくないのに、自分の意志とは無関係に手が動くでハックッ！」

「シャツシャツシャツシャー！オレの料理は知らず知らずその味覚が脳を刺激し不足している栄養を体が欲しがるようになるんだ！本人の意志とは無関係になー！」

何やら助っ人料理人がトラブルを起こしているようだが、無視することにした。きつと亮が何とかしてくれるはずだ。

「そういえば吉井よ。姫路と恋仲というのは事実なのか？何やらクラスメイトたちが騒いでおったのじゃなが」

「どうえい!?全然違うよ！何そのフェイクニュース！」
「は？」

途中、瑞希と美波が底冷えするような低音ボイスで威圧してきたが、とりあえず百合な誤解は解けたようだ。

「そうなんだふーん。なーんだウチつてば勘違いしてたわ」

「え、なになに。いったい何があったの、瑞希ちゃん」

「っーん。知りませんよーだ。明奈ちゃんのバカ、唐変木」

「は？可愛すぎかよ？」

キマシタワー！

.....

色々なクラスの出し物を見て、葉月とともに清涼祭を満喫する一行だったが、2年Aクラスの前でひと悶着があった。

「おかえりなさいませご主人様！ハートフルカフェへようこそ！」

「わりの、俺帰るわ」

「なに言ってるの雄二つてば！さあさあ！翔子ちゃんが待ってるんだから早く行くよー！」

「お主に日本男児としての誇りはないのか！女子が怖くて尻尾を撒いて逃げるなんて、いやはや無様が過ぎるのう！」

「うるせえ黙れ殺すぞ」

「いいじゃない！翔子が待つてるわよ！」

「そうですよ！翔子ちゃんの可愛い姿を見ないなんてもったいないですよー！」

「だまれだまれだまれ」

天敵である翔子のいるAクラスから逃げようとする雄二を、明奈と秀吉が引き留める。先ほどの恨みを今ここで晴らそうというわけだ。

滝のように汗を流してゴネる雄二だが、恋バナに飢えた美波と瑞希の加勢により強引にAクラスへと押し込まれていく。そんな教室の入り口でのいざこざに、近くで待機していた愛子が抗議する。

「ちよつとちよつとー！いくらボクが可愛いからって騒がないでよねー」

「……………工藤愛子か。ヴィクトリアメイドの奥ゆかしさが感じられない。人選ミスだな」

「とか言っちゃってー。ボクのメイド姿にムツツリーニ君もメロメロなんでしょ〜？」

「……………自惚れるな。俺はお前に興味などみじんもない」

「は〜!?なにその態度！ボクを崇めて信じて祈ってよ！」

「……………この邪神がッ！」

夫婦みたいな掛け合いをしている愛子と康太なのであった。クドムツ流行れ！

そんな2人を尻目に、長いスカートをはためかせながら黒髪ロングの美少女がお辞儀をした。雄二の幼馴染であり天敵、明奈の親友であり自称旦那様、である翔子だ。

「……………日本には世界に誇れるものが2つあります。それはレクサス、そしてメイド。共通するのはおもてなしの心」

「あ、翔子ちゃん。げんきしてたー？すっごく似合ってるよー！可愛い！」

「……………ありがと明奈。雄二はどう思う？」

「……………あー、好きな奴は好きなんじゃね？知らんけど」

「その受け答えは0点だよ雄二」

「まったくもってダメダメね」

「坂本君、失望させないでください」

「……………これが雄二なりの愛情表現だから仕方ない。ただ紳士としては落第点。まるでダメな男」

「うるせえうるせえうつせえわ」

誰も嬉しくない雄二のツンデレを酷評しつつも、翔子は一行を席へと案内してくれた。メニュー表を広げて商品を1つ1つ説明する。

「……………なお当店ではメイドからご主人様にクイズを出題いたします。正解だと割引、不正解だとペナルティがあります」

「どんなペナルティになるのじゃ？」

「……………こちらの婚姻届に坂本雄二のサインと捺印をいただきます」

「わあ！じゃあ実質ノーダメですね！」

「おい姫路！どう見ても俺が致命傷を負うだろうが！」

謎のローカルルールを出してきた翔子に、雄二は怒声を上げる。だが、何を言おうとAクラス内では翔子がルールだ。未来の旦那様のツツコミを無視してクイズを出題する。

「……………では問題です。第2回ポエニ戦争でハンニバルが率いるカルタゴ軍を破った共和政ローマの将軍の名前は？」

「うーん、スキピオ・アフリカヌスかな？」

「……………正解です、お嬢様」

「えっ!?アキつたらいったいどうしたの!?!」

「すごいです明奈ちゃん！」

「さすがは葉月のお嫁さんです！」

「くつきりした姿が見えているわけではないけど、臍気ながら浮かんで来たんです。スキピオ・アフリカヌスという名前が」

サラリと回答する明奈を褒めて持ち上げる美波たち。さすがです明奈様。これぞ無双系主人公の醍醐味である全肯定ヒロインたちによる全身全霊のヨイショである。

とはいえ、文月学園で最悪のバカ女の明奈がクイズに正解できたの

は前代未聞のことだ。雄二たちはバケモノを見るような眼で、明奈のことを訝しげに見つめた。

「いや、いきなりそんな名前が思い浮かぶなんてお前どうかしてるぞ？ 頭おかしいんじゃないか？」

「……………見ろ、鳥肌がこんなに」

「わしなんて鶏そのものになってしまったのじゃ」

ダークフォース
「憎悪」

これも翔子の教育の賜物だ。時間を見つけては明奈に勉強を教えているので、バカ女の学力も少しずつ上がっているのだ。とくに世界史、日本史などの暗記系科目ではかなりの成果が上がっているという。

それはさて置き。明奈たちは極上のクラス設備でレベルの高い食事やドリンクを楽しんだ。お腹も膨れたタイミングで、イベントの宣伝をするため明奈たちのテーブルへと愛子がやってきた。

「もうすぐ妖精さんのダンスの時間ですよ！ さ、ご主人様も一緒にモエモエキューン！」

「もういい。俺は帰らせてもらう」

営業モードの愛子がウインクをしながらアピールするが、一刻も早く雄二は帰りたい。1人立ち上がると出口へと向かおうとした。

だが、そうは問屋が卸さない。どこからか取り出してきた身長大のモーニングスターを翔子は勢いよく振り下ろした。爆音とともに凶器が床を抉り、Aクラスのピカピカのタイルは一瞬にしてヒビだらけになった。

「……………いやですわご主人様。ここは私たち妖精とご主人様のお屋敷じゃないですか」

「ゆ、ゆゆゆ雄二ッ！ お出かけて言わなきやッ！」

「おいバカ！ イカれた脅しに負けるな！」

「……………まあ、仕方ない。雄二のサインと捺印はまた今度いただくことにする」

「そんなこと未来永劫あり得ないぞ」

「……………雄二は素直じゃない」

「はっ。言ってる」

「あの、翔子ちゃん？もしかして婚姻届って2枚ありませんか？」

本来、届出人による捺印は必須ではない。勝手に書類を書いて役所に提出せず、敢えて雄二からの承認を求めるあたり、翔子も恋する乙女といえよう。可愛い。

それはともかく、瑞希の言葉に明奈と雄二はしげしげと婚姻届を見た。確かによく見ると翔子の婚姻届は書類が2枚重ねであり、その間にはカーボン紙が挟まっている。

「……瑞希は鋭い。こちらは吉井明奈と坂本雄二の婚姻届がセットになっただけになります」

「オロオロオロオロ！」

「ちよつと翔子！あんたの特級呪物のせいで、アキと坂本がマライオンみたいになってるじゃない！」

「想像しただけで嘔吐するのは、こやつらどっただけお互いのことが嫌いなんじゃないか」

明奈と雄二はお互いのことを嫌っているわけではない。ただ恋愛感情を抱くのは生理的に何が何でも無理というだけだ。それこそ想像するだけで蕁麻疹が出るほどに。無理やり結婚でもさせられようものなら、2人とも泣きながら死を選ぶだろう。

「そ、そもそも！日本では重婚はできません！」

「……雄二と私が結婚して離婚。直後に雄二と明奈が結婚して離婚。私と明奈で交互に雄二との結婚・離婚を繰り返せば、実質的な重婚が可能。これぞ詭弁の刃、無限重婚編」

「アンタ頭イカれてんじゃないの？」

「だ、代表……？どうしてそんな邪悪な永久機関を……？」

「……愛する旦那様と嫁のどちらかを選ぶなんて私にはできない。だから、スマートに両立させる」

「あー、うん。いやあボクってば勘違いしてたよ！代表って実はイカれてるんだね！」

「……？」

愛子は引きつった笑みを浮かべて認識を改めた。霧島翔子という

女は、模範的な優等生であると同時に、サイコでヤベー女である、と。知らぬ間にクラスメイトにドン引きされた翔子だが、暴走は止まらない。

「……清涼祭の2日目に行われる試験召喚大会では、優勝者の夢を如月コーポレーションが必ず叶えるらしい」

「翔子ちゃん!?まさか……!?!」

「……私が優勝したら明奈と雄二の3人で一生添い遂げられるような素敵グッズを作ってもらおう」

「それはいったいどんなシロモノなんだ」

「……浮気をしたら爆発する結婚指輪。死が私たちを分かつまで、おそろつち」

ちなみに翔子の浮気判定は、自分以外の女性を3秒以上見ること、である。

厳しすぎる条件に明奈と雄二は絶叫する。

「そんな闇のおそろつち嬉しくないよ翔子ちゃん!」

「……別に他の女を視界に入れなければ爆発しないから安心。日常生活に支障はない」

「ふざけんな!支障しかねえよ!普通に生活できねえだろうが!」

「……私以外の女をどうして見なければいけないの?必要ないでしょ?」

コテンと首を傾げた翔子がハイライトを失った瞳で見つめてくる。人の理を超越した宇宙神話的な体験に明奈と雄二はSAN値チエツクである。こいつ……無理やりにも止めないと確実にやる!反目し合うことも多い明奈と雄二の心は強大な敵を前に1つになった。 「……どうしても嫌なら試験召喚大会で私を倒せばいい。力無き者が得られるものはない」

「上等だよッ!てめえの気色悪い計画なんぞぶち破ってやる!首洗って待ってろよ翔子!」

「……うん。待ってる。明奈と一緒に、結婚式場で」

「オロロロロロロ!」

「二人ともまた吐いてるけど、大丈夫なのかしら?」

「これは完全にメンタルで負けておるのう」

「明奈ちゃん……」

そんなこんなで決着は2日目の試験召喚大会へと持ち越された。

バカ女と試験召喚大会と親心

「みなさーん、お待たせしました！これより2年生の試験召喚大会、第1回戦を開始いたします！」

校庭のステージで女生徒が掛け声をかける。清涼祭2日目、文月学園ならではの試験召喚戦争をPRする宣伝行事である試験召喚大会がついに幕を開けたのだ。

「司会は放送部員の新野すみれが務めさせていただきます！皆さん、どうぞよろしくお願いいたします！」

学園長不在の中で教頭先生がスポンサー集めに尽力した甲斐あつてか、学年ごとに特設ステージを設けられている。形式はトーナメント制であり、事前に出場登録のあった2人組がタッグマッチを行う。ちなみに第1回戦はFクラス対Eクラスと、下位クラス同士の戦いだ。

「さて、選手入場です！第1回戦は教科・数学でバトルです！観客の皆さんから見て左側にいるのが、Eクラスの中林宏美さんと三上美子さんです！」

すみれの掛け声とともに照明がEクラスの2人を照らす。多くのスポンサーマネーが投じられたイベントだけに、設備も気合が入っている。多数の観客がいる会場は熱気につつまれていた。会場内ボールページの高まりを受けて、女生徒はテンションを上げる。

「対するFクラスは姫路瑞希さんと島田美波さんです！さあ、Fクラスのお2人は準備できてい、ます……か？」

「はいーFクラス、ヒメジミズキ！ガンバリマス！」

「……………シマダミナミデス」

そこには美少女とバケモノがいた。

自らをヒメジミズキと主張する明奈は胸にバレーボールをつめてピンク色のかつらをかぶっている。美少女による美少女のコスプレであり何ら違和感はない。

問題なのが隣に立ち、シマダミナミを名乗る雄二だ。明らかにサイ

ズ不足な女生徒向け制服は、はち切れんばかりにピチピチだ。ギリギリまで引つ張られた布地の隙間と膝上15cmのスカートの下からは、彼の筋肉質な肉体が見え隠れする。

なんて名状しがたきバケモノなんだ！照明が悲しきモンスターごと雄二を照らすとともに、会場はS A N値ゼロの阿鼻叫喚に包まれた。

どうして雄二はこんな気持ち悪いコスプレをしているのか？

説明しよう！

翔子から無限重婚という悪魔的な計画を聞かされた明奈と雄二は、それを阻止すべく試験召喚大会に出場しようとした。ところが、大会の出場期間はすでに終わっており、2人は登録できなかったのだ。

そこで明奈と雄二は、すでに登録を済ませていた瑞希と美波に土下座して頼み込んだ。どうか、翔子を止めるために代わりに出場させてほしい、と。瑞希と自分のタッグの方がまだ勝ち目があるのではないかと考えた美波だったが、当の瑞希があっさりと承諾したため、結局バカコンビに出場権を譲ることになった。

ただ、登録されているのは美少女2人であり、美女と野獣ではない。そこで明奈の発案で、2人は瑞希と美波に変装することになったのであった。

以上！

観客が絶叫し嘔吐する中で、プロ意識の高いすみれは自らの太腿にボールペンを突き刺して正気を保った。脚から鮮血を流しながらK O O Lにバカ2人を諭す。

「あの……出場者の交代はルール上認められているので、そんな気持ち悪いコスプレをして誤魔化そうとしなくても良かったんですよ？」

「歯ア食いしばればバカ女ア！」

「違う違う違うッ！私知らなかった！そんなルール知らなかっただけッ！ホントだからッ！」

なんと憐れなことか。ルールを碌に読まなかったバカ女のせいで、雄二は癒えぬ傷を負ってしまった。

消えない黒歴史を残した雄二は、渾身の一撃を明奈にかました。そ

ス豚に死を与えん！」

「さあ、一緒に作りましょう！私だけの夏限定アキちゃんコレクション……そう、アキコレ！サンシャイン・エクステンション！」

「あー。飽きたからもういいわお前ら。ここで終わっとけ」

「「ひでぶっ！」」

なろう系主人公みたいなイキり方をした雄二に、3人は吹っ飛ばされた。一撃KOされており、これぞTHEかませ犬な負け方である。ちなみに、明奈が巻き込まれる必要はまったくない。コラテラルダメージなんかじゃなく、私怨によるフレンドリーファイアだ。

地理という暗記要素の多い科目ゆえか、彼の点数は短期間のうちにCクラス並みに成長していた。科目次第では、Bクラスの上位の生徒が相手でも対等に渡り合えるほどの実力を備えつつある雄二なのであった。

女装ゴリラという宇宙的狂気を再び直視した司会のすみれは、ボールペンを腕に突き立てることで正気を保ちつつ試合終了を告げる。

「これは意外な結末！急遽、参戦したFクラスの美女と野獣コンビが第2回戦も勝利したー！第3回戦は午後からなので、気色悪い野獣には早く消えてほしいですねー。切に」

「おいおい。お前、あの放送部員に気色悪い野獣扱いされてるぞ。残念だったな」

「鏡見てみなよキモゴリラ。トぶよ？」

こうして明奈と雄二はDクラスの百合乙女コンビを難なく突破し、トーナメントを勝ち上がった。

.....

次の試合までの時間を過ごすため、明奈と雄二は校庭から補習室へと戻った。教室の入り口には小規模ながらも人だかりができており賑わっている。Fクラスの中華喫茶は案内待ちの列ができるくらいには繁盛しているようだ。

「クレームもらおうが何しようが、まず売れ。もうなりふり構わず売るしかない。今うちのクラスに必要なのはそこだ。最低だよ。進歩あってもクソだ。果敢にチャレンジするんだ。それも思いつきり高

値でな」

「「アラホラサツサー！」」

教室内では中華喫茶の統括マネージャーを自称する亮が陣頭指揮をとっていた。グレイスでテツクな掛け声にクラスメイトもやる気満々のようだ。不気味なモジャモジャ頭中華料理人が作った料理は、Fクラス生たちによって手際よく配膳されていく。

「ふーん、ナカナカヤルジャンナイ」

「テーマパークに来たみたいだぜ。テンション上がるなあ」

まるで人気レストランのような動きに、通常の制服に着替えた明奈と雄二も驚く。

繁盛する店内を入口近くで眺めていると、明奈は後ろから抱きつかれた。

「バカなおねーちゃん！」

「わわっ、葉月ちゃん！どうしたのその可愛いチャイナドレス？すごく似合ってるよ！」

「いつもカメラで盗撮しているスケベなお兄ちゃんが作ってくれたのです！」

「……………なぜ俺を指さす。俺はスケベじゃないし盗撮なんてしてない」

「流石ムツツリーニ！スケベな盗撮魔もここまで有能だとあっぱれだよ！」

「……………何度も言わせるな。俺はスケベじゃないし盗撮もしてない」

「嘘こいてんじゃないわよこの変態がツ！勝手に写真撮ってるじゃないわよッ！」

「あべしっ！」

かさかさと床を這いずり回ってローアングルから瑞希や美波、葉月を撮影する康太だったが、美波のスタンピング・クラッシュであえなく撃沈。白銀のスナイパーなどではなく所詮はただのムツツリなので、康太は墓地に送られるとともに500ポイントのダメージを受ける。

中華喫茶の看板を持つ美波と隣で苦笑する瑞希。どちらも康太が夜なべして作ったチャイナドレスを着ていた。美少女2人の可憐なコスプレに男性客の目はくぎ付けた。

しかしながら、当の美少女たちはチャイナドレスを持って明奈へと迫る。少し興奮気味であり流石の明奈もドン引きだ。

美少女の豹変ぶりに精神を破壊された男性客たちはすつと目線を床に向けた。一歩間違えればトラウマものである。

「さあアキ！あんたもムツツリーニが作ったチャイナドレスを着なさいッ！特別にエチエチ仕様にしてあげたんだからッ！」

「そうですね明奈ちゃん！さあ早く！私たちとお揃いのチャイナドレスに今すぐ着替えてくださいッ！そして明奈ちゃんの特別写真集のための撮影をして、その後はめくるめく百合ワールドに突入しましょうッ！」

「ちよちよちよーい！2人とも鼻息荒くて怖いっ！ムツツリーニよりも変態さんみたいだよ!？」

「……………俺は変態じゃない」

「ここら。お主ら入口の近くで騒ぐのをやめぬか。悪目立ちしておるぞ」

いつの間にか教室から出てきた秀吉は、美少女2人の頭をお盆で軽くはたいて落ち着かせた。

着ているのはチャイナドレスではなくウェイターの制服だが、これはこれでかなり似合っていた。さながら男装している美少女のようで、男性客はそわそわしながら秀吉のを見ている。

彼らもどうやら新たな性癖の門が開かれたようだ。 コングラチュレーション
ブラザー 超親友。オマエたちは強くなれる。

それはさておき、雄二はわけがわからないと言わんばかりに首を傾げている。どうやら秀吉の本当の性別を忘れてしまったようだ。

「ん？待って待って、なんで秀吉はチャイナドレスを着てないんだ？おかしいだろ常識的に考えて」

「お主こそ何を言っとるか。わしは男じゃぞ？」

「お…………おおう？そうだな？そうだったな？確かに？そういう設定だっ

「た気がするぞ? うん?」

「……………ハハ、ワロタ。ナイスジョーク秀吉ちゃん」

「チャイナドレスが恥ずかしいのはわかるけど、秀吉ちゃんが男装すると文月学園中に特殊性癖が広がっちゃうからやめた方がいいと思うよ? ウェイトレスの格好をしなきゃダメでしょ」

「お主ら、わしを無礼なめるのも大概にせえよ」

青筋を浮かべた秀吉は持っていたお盆で3人を力一杯ぶん殴る。演劇部の力仕事で鍛えられた剛腕は、バカトリオの頭に大きなたんこぶを作った。そんなこんなで、いつも通りバカ騒ぎをしていると突如、明奈は後ろから声をかけられた。

「失礼。君がFクラスの吉井さんかな?」

そこにはスーツを着た40歳前後の男性がいた。見るからにインテリジェントでキングスマンな風貌であり、いわゆるイケオジという言葉やつだらう。

いきなり面識のない謎の男性から声をかけられ身構える明奈だったが、同時に瑞希が驚いたように大声を出した。

「お父さん! どうしてここに?!」

「え! この人、瑞希ちゃんのお父さん!」

「ご挨拶が遅れました。私は姫路瑞希の父です」

「あつ……………ご丁寧にどうも。私は吉井明奈と言います」

「……………なるほど。やはり君が、あの“吉井さんか”」

「あらあらまあまあ。瑞希ちゃんがご執心になるのもわかるくらい素敵な娘ね」

姫路父の後ろからひよつこりと顔をのぞかせた女性は、年端もいかにぬ幼子のように見える。出る場所は出ているものの、その小柄で愛くるしい姿に美波は顔をほころばせた。

「あら可愛い。瑞希ってば妹がいたのね。もしかしたら葉月と同年かしら?」

「葉月よりお姉さんな気がするのです! ただ、学校で会ったことないのです」

「そもそも瑞希ちゃんの妹さんって小学生なの? それとも、もう中学

生？」

「……はえっ?! いや、その……えつと……妹じゃないです。お母さんです……」

「初めまして姫路瑞穂と申します。いつも娘がお世話になってますわ」

その瞬間、時が止まった。

それは1分か、はたまた1時間か。とにかく長い時間が経過したように感じられた。

動きを止めたバカどもと姫路親子。冷え込んだ空気。尋常じゃないほどに居心地の悪い空間だ。

刹那、再起動した明奈たちは一斉に姫路父を指さして絶叫した。

「「「ロリコンだああああああああ!!」」」

「君たち……初対面の人に対していくらなんでも失礼じゃないかね」

いきなりの爆音上映に姫路父は顔をしかめる。妻と出かけると1時間ごとに職務質問されるだけあって、ロリコン扱いは慣れたものだ。

だが、ここからがFクラスの本領発揮。汚物を見るような冷たいまなざしを向けつつ、容赦なく姫路父のメンタルを削りに行く。

「こいつはくせえッ! ゲロ以下のにおいがプンプンするぜッーッ!!」

「人間の屑がこの野郎……」

「悪行はそこまでじゃあッ!」

「………君さあプライドなさすぎちゃう? もしましポリスメン?」

「こつちに來なさい葉月ッ! このロリコンオヤジの毒牙にかからないうちにっ! このゴミカス死ねッ!」

「ほら! この社会的地位だけは無駄に高そうなおじさんだつて所詮はロリコンなんですよ! こんな汚物が存在を許されるなら、10年しか年の離れてないバカなお姉ちゃんと葉月が結婚するのも普通なのです!」

「うふふ、私は41歳ですから。お父さんとは別に年の差カップルではありませんよ」

罵詈雑言の嵐であった。これぞFクラス・クオリティ。モラルも何もあつたものじゃない。

姫路父はピンチでちよつと泣きそうだが、妻を悲しませまいともちこたえた！

涙を隠すため少し上を向いて天井を見つつバツが悪そうな瑞希に話しかける。

「くっ……………瑞希のクラスはいつもこんなに賑やかなのかい？」

「……………うん。だ、だけどっ！普段はもつと理性的だし、基本的に良い人ばかりなの」

「にわかには信じがたいが……………。そこの少年だって先ほどの試験召喚大会で、吐き気を催す邪悪なコスプレをしていたらろう？正気とは思えない」

「おい、お前のせいで俺の名誉が毀損されているじゃねえか。死んで詫びろバカ女」

「雄二が秀吉ちゃんみたいに華奢で女の子みたいだったら良かったんだよ。私は悪くない」

「……………気色悪すぎてカメラにデータを残せなかった。存在が罪。秀吉ちゃんを見做えゴリラ」

「夜道にはせいぜい気をつけるのじゃな。クソバカゲロカスゴミ女とヘタレクソザコナメクジムツツリよ」

刹那、始まる小競り合い。キーキー騒ぎながら足を踏み、肩を殴り、髪の毛を引っ張る。低レベルで見るに堪えない喧嘩を繰り広げるバカ4人を目の当たりにして瑞希の父は嘆息した。

「残念だが、彼らは潜在能力を著しくアンダーパフォームしている。この学園は瑞希に相応しくない」

「そんなことないッ！みんな、私の大切な…………お友だちなのッ！」
「朱に交われれば赤くなる。周りに腐ったミカンしかなければ、瑞希まで腐ってしまう」

「違うッ！Fクラスのみんなは腐ったミカンなんかじゃないッ！私の成績だって落ちてないもんッ！」

「成績の問題ではない。人間性の問題だ。彼らの存在が瑞希に悪影響を及ぼすと言っている。それに、Fクラスの設備はスラム街のごとく劣悪だと聞いた。もし瑞希が体調を崩したらと思うとお父さんは心配なんだ」

声を荒げて反論する瑞希だが、暖簾に腕押しだ。

困ったように眉を下げた姫路父は諭すように語る。よく見ると彼の眼は本気で愛娘のことを案じているようだった。

さもありません。賢さF・人間性F・スキルポイントゼロのFクラス生徒たちなぞと一緒に過ごすよりも、優秀な生徒が集う名門校に転入させて安心安全な学園生活を過ごさせた方が、瑞希にとってベストだと考えても無理はないだろう。弁護士としてやべー奴らを見ている姫路父の言葉だからこそ重みがある。

「お願いだ瑞希。お父さんの親心をわかってくれ」

「ツ……！お父さんの馬鹿ツ！」

「瑞希っ！待ちなさいっ！」

大した反論もできず、かといって父親の親心を無碍にもできず、まさに八方塞がりだ。

一瞬、諦めに似たような苦悶の表情を浮かべた瑞希は、子供じみた捨て台詞を吐くと学園のどこかへ走り去った。

傷心の瑞希を独りにさせられないと判断した美波は、彼女の後を追った。

残されたのは4バカと姫路夫妻だ。親子喧嘩を目の当たりにして、何とも言えない微妙な雰囲気になっている中、姫路父は頭を下げた謝罪した。

「君たちすまない。楽しい学園祭に水をさしてしまった」

「別に気にしてねえ、すよ。もめ事なんて日常茶飯事だ、です」

「そうか、日常茶飯事か。……正直、学校選びに失敗したと後悔しているよ。独自かつ最先端の試験召喚システムなら、瑞希も楽しい学園生活を送れると思ったのだが……。実態は極端な格差社会を是とする乱暴な校風だったなんて」

「いやいや、文月学園もまっこと素晴らしい学校ですぞ。のう、吉井

よ」

「文月学園のここがすごい！徹底した実学教育で、健康、医療、スポーツ、経営学など幅広い学問が学べるんだぞ！」

健康（を劣悪な環境で守り抜く方法）、医療（の大切さと素晴らしさ）、スポーツ（のように行われる殺戮での生き残り方）、経営学（では制御できないサルとの共同生活を送る術）を学べる学園だ。

コンビニなどで流されるような宣伝文句でアピールするが、姫路父の反応は芳しくない。

「瑞希ちゃんってば昔から病弱でしたからお父さんは過保護になっっているんですよ。あの子を安心して任せられる環境なら良いんですけどー。……そういえば、明奈ちゃんって瑞希ちゃんのガールフレンドなんですか？」

「ええ!?私と瑞希ちゃんは別に恋人同士じゃないですよ。ただ、私ものものになってほしいと言ったので擦れ違いがあったかもしれない」

「あらあらあら〜!うふふ〜!いいですね〜、青春ですね〜!」「いったいどういうことだ?恋人ではないが自分のものになってほしい?。」

「瑞希ちゃんを私の所有物にできれば転校もなくなるかと思ったんです。ちゃんと手の甲に油性ペンで名前も書きました!」

「まるで意味がわからんぞ……」「気にしないほうがいいですよ。こやつは文月学園最底辺のバカですから。脈絡などあつてないようなものじゃ」

頭痛を抑えるように頭に手をやる姫路父だったが、秀吉の言葉に納得すると改めて明奈たちを見つめた。そして、ため息交じりに語り出した。

「……君と瑞希が恋人だったとしても、君たちが親友だったとしても、私の考えは変わらないよ。今の時代、遠距離恋愛なんておかしくないし友人なら休日に来ればいい。本音では君たちと瑞希をあまり会わせたくないがね」

「それは俺たちがバカだから、すか?」

「いいや違う。学力や成績なんてどうでもいい」

疑問を投げかけた雄二と向かい合うと、姫路父は話を続けた。

自分の半分程度も生きていないような少年に対するような態度ではなく、1人の人間と向き合うような真剣な顔だ。

「君たちは腐ったミカンであり劇薬だ。ヘドロで暮らす君たちとあの娘では端から住む世界が違う」

「お言葉ですが、学校や肩書なんて関係ない。清流に棲もうがドブ川に棲もうが、前に泳げば魚は美しく育つんです」

「素晴らしい言葉だが、瑞希には当てはまらないな。あの娘は純粹無垢な白紙だ。タブラ・ラーサ親バカと誹られようが、醜悪な現実に接して欲しくない。吉井さん、どうか私のエゴを受け入れてくれ」

「やです」

「……もう一度聞かせてくれるかい?」

「何度聞かれても答えは同じです。やです」

姫路父を睨みつけると明奈ははつきりと言いつつ切った。

そして、拳に力を込めてケツイを胸に声を張り上げる。

「大切な友達を、親の都合で奪われるのを見過ごせるわけないじゃないですか!」

「姫路殿。悪いがわしらは抵抗させてもらうぞ。なにせわしらは腐ったミカンじゃからのう」

「……………バカの底力、見せてやる」

「好きにしまえ。だが、君たちが何をしたとしても私の考えは変わらない。瑞希にとってベストなのは文月学園からの転校だ」

明奈たちと姫路父の間で火花が散る。

威勢のいいハツタリかもしれないが、それでも明奈は何が何でも瑞希の転校を阻止するつもりだった。その気持ちは秀吉と康太も同じだ。策なんて何も無いが、とにかく前へ進もうとやる気満々である。

「俺とあいつでは住む世界が違う……………か」

ただ1人、雄二だけはどこか上の空だ。

その眼に映るのは、瑞希ではなく、在りし日の幼馴染の後ろ姿だった。

まもなく試験召喚大会・2年生の部の第3回戦が始まる。

「ウチが瑞希を探してくる。アンタたちは自分のなすべきことをしなさい」

「美波ちゃん……瑞希ちゃんのこと、任せていい?」

「うん。任された」

「ありがとう。雄二、いこう。次の試合が始まっちゃう」

「……………おう」

唇を一字に結んだ明奈はどこか上の空な雄二とともに、試験召喚大会のステージへと向かった。

……………

「これより2年生の試験召喚大会、第3回戦を開始いたします! Bクラスの岩下・菊入ペアとFクラスの坂本・吉井ペアはステージに上がってください!」

自己防衛のための出血でふらついていたすみれだったが、今や元一杯に大会を進行している。さきほど輸血を終えたばかりであり血色も良い。司会兼実況のすみれに促され、明奈と雄二はバトルフィールドに登場した。

「殺気ツ!? 見切ったア!」

「へぶあつ!」

刹那、ステージ上の明奈に向かって釘バットが飛んできた。殺気を感知した明奈が避けたことで、飛来した凶器はすみれの頭部に直撃。怒髪天に釘バットが刺さり大量出血した少女は仰向けになって倒れた。

気づけば、武器で直接攻撃してきた狂戦士は、ゆらりとステージ上にあがっていた。Bクラスの真由美は、邪悪な笑みを浮かべて、トンファーを舌で舐めている。

「とうとう来たわあ……Fクラスの劣等どもに復讐するときがねえツ!」

「ゆ、雄二? 何だろうあの子、明らかにおかしいよ?」

「あれだ、五月病ってやつだろ? だらしないヤツほど季節の変わり目にはあんな風になるんじゃないのか?」

「違うつ! 真由美がイカれちゃったのは全部アンタたちのせいよツ

笑みを浮かべた明奈はゆつくりと近づいた。

「菊緩さんの怒り、私にも理解できるよ。でもね、それは私たちのせいじゃない。本当の敵は他にいるはずだよ」

「カス女……」

「菊緩さん……」

わずか数メートルしか離れていない場所で足を止め、明奈は真由美と言葉を交わした。

目と目が合う瞬間、好きだと気づくのが歌姫だった。では、クソバカゲロカスゴミ女と狂戦士が見つめあったとき、何が生まれるのか。

「死ねこのクソゴミがああああああああ!!」

「弾幕回避ィー!」

情け無用の殺戮である。

すんでのところで真由美の振りかぶったトンファーを躲す明奈。怨念と力のこもったトンファーは狂戦士の手をすっぽ抜け、監視役としてその場にいた国語教師・竹内先生の顔面にめり込んだ。

このとき唯一の仲裁役である彼女が昇天したことで、試合はルール無用の殺し合いへと変貌。なりふり構わない真由美の凶行にすっかりビビってしまった明奈は、へこへこゴマを擦りながら相手のご機嫌とりを始めた。

「暴力反対!暴力反対!仲良くいきましようよ!こんないがみ合ってどうするんすか!ラブアンドピース!」

「お前が悲劇を呼んでいるんだ!他者を守り英雄になりたいなら自滅しろ!みんなが助かる!」

「いえいえ!あつしは英雄志望なんかじゃありません!ただ楽しくて自由な学園生活を送りたいだけの小市民なんですわ!お代官様ほんま堪忍やわ、えへっえへっ」

「その身勝手な願望の結果、私は生き恥をさらしているッ!この学園の全てが、お前たちFクラスのせいで嫌いになった!私の人生を台無しにしたカス女とバカどもを、私は絶対に許さない!」

無様に命乞いする明奈だったが、真由美は聞く耳を持たない。スカートの下に隠していたレッグホルスターから彫刻刀を取り出し投

げつける。

飛来した暗器は明奈の頬を掠り、背後で観戦していた一般人の脳天に直撃した。オーディエンスから血しぶきと悲鳴があがる。外道乙女と名高いクソバカゲロカスゴミ女とはいえ、無辜の民の命を奪う行為にドン引きする。

「あつぶな!?!凶器の持ち込みは禁止だよ菊緩さん!」

「その名で呼ぶなカス女がああああ!今ここで惨たらしく殺してやるッ!」

「バカ!狂人に何言っても無駄だ!とつとと倒すぞ!」

「そんなことさせない!真由美は私が守る!」

律子の言葉とともにハンマーを持った召喚獣が現れる。雄二の召喚獣のメリケンサックによる一撃を受け止めると、ハンマーを大きく振りかぶってステージ端へと追いやった。

図らずも雄二と明奈が分断されてしまった。一念発起して猛勉強を始めた雄二といえども、Bクラス相手には無双できない。一進一退の攻防が続く中、律子をなんとか説得しようと言葉を投げかける。

「岩下アツ!お前はそれでいいのかツ!?!このままじゃ取り返しのないことになっちまうぞ!」

「私はッ!真由美を救えなかったッ!おかしくなっていくあの子に対して何もできなかったッ!だからせめて真由美が復讐するのを助けてみせるッ!」

「道を踏み外そうとしている親友を正しい方へと導くのがお前のすべきことだろうがッ!」

「うっさいうっさいうっさいッ!他人の気持ちに踏みにじるアンタに綺麗事を言われる筋合いなんかないッ!」

「ッ……!?!」

召喚獣のハンマーが空を切る。律子は大粒の涙を流しながら雄二を睨みつけた。

「どうしてなのッ!?!どうして貴方たちバカは現実を直視しないのッ!?!自分たちのあらゆる言動が他人を傷つけているって何でわからないのよオツ!?!」

狂人のように笑い大暴れしていた真由美の動きがピタリと止まる。

「アア？ワタシガ、シヨウキ？」

「何の意味があつて、そんな狂気に染まったような演技をしているのですか？アナタの狂気は正気に過ぎる。そんな賢し気に大人しく同情を買うよう振る舞うなど、狂気に対して失礼というものです。出来損ないの狂人の演技デス」

「私は……正気……」

「かまつてちゃんなのはいいけど、はつきり言つて大根役者だったよ？まつたくもつて見るに堪えない演技デス」

「……………ハハッ。アハハハハハハハアッ！よおーくわかつてるじゃないッ！そうよ私は冷静沈着で正気よッ！だから冴えわたった脳内にアンタを嬲り殺しにするアイデアが炭酸のようにシュワシュワと無限に浮かび上がってきてるッ！」

「うん？あれ？おかしくない？ここはさ、恥ずかしさとかで身悶えして弱体化する流れじゃないの？」

「羞恥心なんか感じなくなつたわッ！アンタのおかげでねエッ！私を構成するのは怒りと憎しみとほんの少しの愛だけだアッ！」

改めて真由美は覚悟を決める。このカス女を惨殺してやる、と。血涙を流しながら真由美は天に向かってもろ手をあげて声を張る。

「子羊が第六の封印を解いたとき大地震が起こつた！太陽は漆黒に染まり、月は血のように赤くなつた！Fクラスという愚かで邪悪な下等生物どものせいで、世界は破滅の道を突き進み終焉へと向かつてい

！」
「コラー！人を下等生物扱いしちゃいけないって義務教育で習わなかつたの！今の菊緩さんは小学生以下、いや犬以下だよっ！」

「劣等があッ、身の程をわきまえろオオオオオ！」

どこからか取り出したゴルフボール入りの靴下を、真由美はヌンチャクのように振り回す。もう何も怖くない。再び奇声をあげながら明奈に向かって突撃した。

ひらりひらりと避ける明奈だったが、死のステップダンスをいつまでも続けることはできない。

「鮮血！恐悦！喝采！叫喚！」

「こんなひどいことするなんて信じられない！ゴルフを愛する人への冒瀆ですよ！」

「喝采！叫喚！死屍累々！零れ溢れて阿鼻叫喚！」

「ダメだ！もう菊緩さんには人語が届いていないっ！こうなったら奥の手だあ！」

背に腹は代えられない明奈は、試合前に青スーツのクソガキから奪った腕時計を取り出し、そこから麻酔針を射出した。首元に針が刺さった真由美はうめき声をあげステージ上に倒れる。

「し……試合……終、了っ……。勝者はっ……はあ……はあ……Fクラスのゴミ2人っ……ぐふっ……」

狂戦士が倒れたことで、気合で起き上がった血まみれのすみれは試合終了を宣言した。ピクリとも動かなくなった親友に、目を泣きはらした律子が駆け寄る。

「真由美イーッ!!どうしてッ!?どうしてこんな酷いことをッ!」

「安心してよ。アフリカ像も永眠するような猛獣用の麻酔薬だから」

「どこに安心できる要素があんのよッ!鬼!悪魔!カス女!」

「あく久しぶりの褒め言葉キター。ホント最高の気分だよ」

「ッ!このクソバカゲロカスゴミ女ッ!絶対に復讐してやるから覚悟してなさいッ!」

「負け犬の遠吠えキモチー!これだよこれ!他では味わえなかったドーンときて、ガシャーンとやられる感覚!脳汁ドバドバですわッ!」

満足げに高笑いする明奈だが、第3回戦では観客を含めて多くの被害者が出た。悲しみ、憎しみ、怒りがうごめく試験召喚大会の会場を見つめながら雄二は、犠牲を払ってまで得る勝利だったのかを自問自答する。

自分勝手に動くバカのせいで世の中は狂っていく。真由美の凶行は、これまでのFクラス生徒たちの暴走の副作用の象徴ともいえる。それは雄二が見落としてきた、いや自身の目的達成のために直視してこなかった罪だ。

「俺は……どうしたらいいんだ……」

追い詰められたような表情で俯いている雄二は、苦しげに呟いた。いつの間にか自分は目的と手段を取り違えていた。翔子との関係を確認してもらうために、何でもやってきたはずだ。ところが、道徳や倫理を無視してバカ女たちと暴れてきた結果、却って自分が翔子に相応しくない男であることを周りに示してきたのではないか。

それに翔子の想いはどうなるのか。幼馴染、いや愛する女の気持ちが無視して踏みにじってきたのはお前だ。そう言わんばかりに律子が突き付けた事実は、罪悪感とともに彼の脳裏に残っていた。

……

「やっと見つけた。まったく、手間かけさせないでよね……」

試験召喚大会の第3回戦が始まった直後、美波はようやく探し人を見つけて出した。

ここは旧2年Fクラスの教室だ。人は誰もおらず、新学年が始まったかつての状態のままだ。そんな廃墟の隅に瑞希は座り込んでいた。体操座りをしたまま、入室してきた美波にちらりと視線を向ける。

「……なんだ。来てくれたの、美波ちゃんなんですわね」

「アンタ……随分と言うようになったじゃない。アキじゃなくて残念、とでも言いたいのか？」

「わかってるならわざわざ聞かなくてもいいじゃないですか」

「このっ……クソアマ……っ」

そっぽを向いて拗ねる瑞希に青筋を立てる美波。思わず手が出てしまいそうになるが、相手は曲がりなりにも大切な友達である。前髪をかきあげてため息を吐くと、ムスツとしたままのお姫様の隣に座り込んだ。

「はあ……。で？こんな辛気臭いところで喫茶店をサボるお姫様はなにがしたいわけ？引きこもりにでもなりたいのか？」

「別に……私はお姫様なんかじゃ……」

「偉大な」両親に反発して泣きながら逃げ出して、自分の殻に閉じこもって愛しの王子様が来るのを待ってるんだから、立派なかまってちゃんのお姫様でしょ」

「だって………どうすればいいのかわかんないんだもん」

「じゃあなに？埃まみれの小屋でただただ指くわえてるわけ？アンタ、シンデレラのストーリーも知らないの？」

「シンデレラが逆境を抜け出せたのって別に自分の力じゃないですよ？魔法使いと王子様がいたから、ハッピーエンドになったんです」「屁理屈こねてんじゃないわよ」

「でも事実です。美波ちゃんと違って、私は頭がいいからわかるんです」

ナマ言いやがって。こいつメタるか。

怒りのあまり笑顔のまま握りこぶしを作りわなわなと肩を震わせる美波だったが、そんなことお構いなしに湿気たどんよりモードの瑞希は半ば愚痴るように話を続けた。

「さつき美波ちゃんも見ましたよね。お父さんは絶対に私を転校させるつもりです。保護者が決めたことを学生の私が覆すことなんて……」

「じゃあ何よ？アキたちの頑張りは無駄だって言うの？」

「そういうわけじゃ……。ただお父さんの決意が思ったよりも固くて……それで私も何をどうすればいいのかわかんない、全然思い浮かばなくて……」

「アキみたいに独り暮らしとかすればいいんじゃないの？アンタ一人っ子だし、安全な日本なら問題はないでしょ」

「でもお父さんはきつと認めてくれません。だって過保護ですし、転校も私のためですし」

「あーでもない、こーでもないってウジウジ言い訳するのは一丁前にできんのね」

「……色々悩んで考えた結果わかったんです。やっぱり私は文月学園にはいられないって」

瑞希は力なさげにそう呟くと、ぎゅっと自らの腕を掴んで縮こまつた。

ふと美波の頭をよぎったのは、これまでに彼女が見てきた明奈の顔だった。瑞希を案ずる心配そうな表情。瑞希のため試合へ向かう真

剣な表情。瑞希や自分に向けられた幸せそうな笑顔。

愛する少女があれほど頑張っているというのに、目の前の友達はなんて情けないのか。

「待ってよ！なによなんなのよこの茶番は！こんな横暴、謙虚で奥ゆかしくて心優しき私が許しても、神様は絶対に許さなはずよっ！」
「神様の心せまっ!!」

「こんなところで腐ってんじやないわよアホ瑞希ッ！アンタができることはまだ他に色々とあるでしょ！」

気づけば美波はその場で勢いよく立ち上がると吠えるように大声をあげていた。ビシリと瑞希を右人差し指で指すと、だらしない彼女へのお説教を始める。

「だいたいアンタ、いつの時代のヒロイン気取りよ!?誰かの助けを待ち望む無力で世間知らずな清純派(笑)のヒロインなんてイマドキ流行らないわッ！いつまでもぺらぺら……メルヘンぶっこいてるんじやねえッ！」

「なんなんですか一体!?今日の美波ちゃん、すつごく意地悪ですっ！」
「瑞希が救いようのないアホだから、アンタにとって耳が痛い話をしてるだけよッ！」

一度、発した言葉は取り消せない。美波は怒りのあまり早口で捲くし立てる。

「お隣の天使様ア!?僕の心のヤバイ奴ウ!?恋する着せ替え人形オ!?ウチから言わせればそんな奴ら文月学園では全部クソよ！
hurtful storyで純愛気取ってんじやないわよオ！」

「そんなの……今は別に関係ないし……」

「関係大アリよッ！明らかにヤベー奴感を出しておきながら、清純派ヒロインのフリしようとしてる卑しくて浅ましい女がこの場にいるんだから！姫路瑞希とかいうアホ女がねえっ！」

「なっ……!」

「アンタはねえ純粋無垢な清純派ヒロインなんかじゃあないッ！アンタもウチも翔子も、欲望と野心と下心まみれの俗物なんだからッ！ドラクエならバルザック、ハリーポッターならヴォルデモートなのよッ」

！」

「ち、違いますッ！私、そんなんじやつ」

「自分をアマガミの絢辻だと思うな！ウチらはノラガミの妖よ！」

絢辻さんは裏表のない素敵な人です（鋼の意志）。

啖呵を切った美波はそのまま言葉を重ねた。それは彼女の決意と覚悟に満ちたものだった。

「ウチはアキのためなら悪魔に魂を売る。世界を敵にまわそうとアキを守るッ！それを邪魔するなら例え親や妹であつてもなぎ倒してみせるッ！」

「美波ちゃん……」

「翔子だつてそうよ！アイツは頭のネジが飛んだイカれたサイコ女だけど、アキと坂本のためなら何でもやる。アンタにはその覚悟がない！すべてを投げ捨ててもアキを得ようとする鋼の意志が！」

「でも、だつて……仕方ないじゃないですか……。アキちゃんのことが好きでも、周りがそれを許してくれないんですから……」

「そうやってやる前から諦めてんのが腹立つのよッ！一般常識なんか犬にでも食わせときなさい！障害は自分の手で取り除け！ウチはそうする！そして誰がなんと言おうが、アキはウチが独占する！それが嫌ならFクラスに戻ってきなさいアホ瑞希ッ！」

美波はそう言うと、大きな音をたてて教室から出ていく。

言い方は少しキツかったかもしれないが、彼女なりの激励の言葉だった。それに瑞希とて、美波の言うことが正しいというのはわかっていて。それでも罪悪感と自己嫌悪のあまり、再び膝に顔をうずめて現実逃避してしまう。

「私だつてアキちゃんのすべてが欲しい。美波ちゃんや翔子ちゃんとも幸せな学園生活を送りたい。でも自分の本心を曝け出したら、きつとみんな私のことが嫌いになっちゃう」

たった1つだけ、瑞希には何もかも投げ捨てても達成したい夢があった。

ただ、それは両親や美波や翔子だけでなく、愛する明奈にさえも否定されかねないものだった。

みんなに嫌われたくない。だから悪魔のような発想を封印したまま、文月学園から去るべきではないのか。非情な現実を前に、いつしか瑞希は堂々巡りの自問自答を繰り返していた。

「私は……私の中の鬼が怖い」

外の喧騒から隔離された教室内で泣きじゃくる。

あなたは奈落の花じゃない。もしも明奈がいたら瑞希をそうやって慰めてくれただろう。

だが、今この場に現れたのは明奈ではなかった。

「鬼さんこちら。手の鳴るほうへ」

子守唄を歌うかのごとく何かを口ずさむ女の声が響く。

咲かないで、咲かないで。そう願ってももう遅い。

種を残し、芽を出せば再びカルマが廻る。

それは永遠に繰り返される罪^{もえ}の連鎖。

それは決して交わらぬ狂気^{せいへき}の衝突。

「どんなに逃げても捕まえてあげる」

顔をあげた瑞希の前では、七分丈のパンツに半袖のカッターシャツと薄手のベストを着た女性が艶やかに微笑んでいた。

「何かお悩みのですね？瑞希ちゃん」

悪魔がやってきた。

姉と瑞希と正義の果実

「明奈ちゃんのお姉さん……アメリカに戻っていたはずじゃ……」

「学会なんてさっさと終わらせて帰国してきました。なにせマイラブリージェルがチャイナ服で奉仕してくれるんですからね」

「行動力がすごい」

「妹のためなら2回行動と全体攻撃だってできる。それが姉というものです」

えへんと胸を張る玲。そんなお茶目な彼女に、瑞希はどこか親近感を抱いてしまう。

片や頭脳明晰、片や学園一の劣等生。されど人を惹きつける魅力があるのは、数少ない玲と明奈の似通っているところだった。

よいしょ、と瑞希の隣に座り込むと、彼女を覗き込むように玲は見つめてきた。

「ところで、瑞希ちゃん。先ほどからお困りのようですが、どうかされましたか?」

「ちよつと家庭の事情で色々」

「ふむ。詳しく聞いても?」

耳心地の良い玲の声に、瑞希も思わず言葉を紡いでしまう。

父親との確執、美波との喧嘩、明奈への恋心。知らぬ間に、瑞希は自らの胸中をすべて曝け出していた。

一通り聞き終えた玲は顎に手を添えると、優し気な笑みを浮かべた。

「それでしたら、秘密の言葉をこっそりと教えたいと思います。それは大丈夫、大丈夫。大丈夫、大丈夫と言えば、本当に大丈夫になります」

「そんなわけ……ありません」

「世の中そんなものですよ?言ったもん勝ち、やったもん勝ちなんですから。大事なのは経験ではなく、選択。あなたにしかできない選択の数々」

親が子を慈しむように、玲は瑞希の頭を撫でた。そして耳元でささやく。

「貴女がこれまで歩いてきた道程に、無駄なことなんて一つもなかった。貴女は自分にできる全てを投げ打って、この瞬間まで歩いてきた。その選択の数々は、誇るべきことです」

丁寧に諭す玲の言葉が、瑞希の空っぽの胸を打った。空虚な内面に、何かが響く。

「誰にも私は許せない」

「私が許します。瑞希ちゃんの恋心を知っている、私が」

「……誰にも、私を肯定はできない」

「瑞希ちゃんが自分を肯定できないのなら、私が瑞希ちゃんの許せない貴女自身を否定しましょう」

瑞希の自虐的な言葉の悉くを、玲が振り払おうとする。

なぜ玲は、こんなにも強く瑞希の罪悪感を否定し、繰り返し心の闇を払おうとするのだろうか。

「契約を、私と交わしませんか？必ず、瑞希ちゃんを貴女の望むところまで連れていきましょう。最後には……ですが」

「どういうことでしょうか。玲さんの協力で私が最善の未来に辿り着くのは……最善の道を、通ってではないのですか」

「最善の未来へ辿り着けるのなら、その道程で出る犠牲は許容する。その覚悟が、貴女にはないということですか？」

「……っ!?!」

「残念ながら私は、アキちゃんと違って甘くはないですし優しくもないです。問い直しましょう。両親を含む全世界を敵にまわしても、戦い抜く覚悟が貴女にはありますか？」

「いったい何をするつもりで……」

「世直し、でしょうかね。あるいは終末の日に備えるというべきか」
ドゥームズデイ

「そのために……世界と戦う?」

瑞希の問いかけに直接的に肯定するでも否定するでもない返答だった。

しかし、彼女は悟った。玲の言葉が、決して瑞希の疑いを晴らそう

とするものではない、ということ。

それどころか、玲は自身の腕を広げると魔女のごとく熱を込めて訴えかける。

「今や世界は破滅の危機に瀕しており、崩壊の交響曲シンフォニーが鳴り響いている。相反する正義が終わりなき闘争をもたらし、疲弊した人類は混迷から抜け出せない。レイシズムとキャンセルカルチャー、マイノリティとサイレントマジョリティ、ミソジニーとポリコレ、環境破壊者とエコテロリスト、そしてその他諸々。争いと穢れが充満した世界を生きる私たちは誰もが罪人です。では、なぜこうなってしまったのか？全知全能といわれる創造主は2つの失敗を犯しました。1つは人間に中途半端な知識を授けたこと。瑞希ちゃんはよくご存じですよね？短絡的で激情的で無知蒙昧なクラスメイトの男子諸君を。そしてもう1つは、男という生き物を生み出したこと。瑞希ちゃんも感じたことはありませんか？男たちの下劣な欲望に満ちた視線。なんとおぞましい怪物でしょうか！ただでさえ他人というものは異質で理解不能だというのに、なぜ身体的・精神的差異の多い異分子と共同生活を送らなければいけないのか。修行か拷問と言っても過言ではありません。ならば、共通項の多い女同士で身を寄せ合うべきだとは思いませんか？女性だけの共同体は滅びると低俗な海外バラエティー番組の例を持ち出し煽るミソジニーもいますが、私からすれば自明のことです。なぜならそこには、正しい知識と彼女たちの紐帯となるべきものがなかったに過ぎない。そう、紐帯。それは相互に結び付くつながりであり、結束し外敵と相對峙するための絆です。だからこそ、私は強く訴えるのです。実践的な教育と百合ハーレムこそが、私たちを理想郷エデンズ・ゲートの扉へと導く正義の果実である、と！残酷かつリアルで痛みも伴うような生存競争は、冷酷かつ合理的な判断を下す礎となります。瑞希ちゃんも試験召喚戦争でそのような局面を迎えませんでしたか？その時、貴女は偉大な百合ハーレムを作り・育み・守り・慈しむ愛の守護者たる力を得たのです。そこに加えて、情欲交じりの愛情をお互いに持ち合うことで、本質的に異なる女たちが手を取り合って仲良しこよしな、きららの世界を構築できるといっわけです。

優れた判断能力を有した女たちが自らの愛のために支えあう、なんと完璧かつ幸福な世界でしょうか！これぞ私の求めた楽園！汚染された地球上で唯一実現可能な理想郷！そして、その要となるのが愛しの大天使アキちゃんです！どうでしょうか瑞希ちゃん？あるべき社会の在り方は伝わりましたか？ともにその実現のため、戦おうではありませんか」

玲は涙んだ眼で滔滔と語りかけた。

男性と異性愛者の存在しない常時キマシタワーな美少女動物園を崇拜する彼女は、立派な百合豚だった。

対して、瑞希は頭を整理する。今まさに目の当たりにした玲の本音の真意を探るため。

「玲さん」

「なんででしょうか？」

「貴女は……明奈ちゃんを、利用するんですか？」

玲は躊躇いなく頷く。

「しますよ。瑞希ちゃんも、私をそうするといいいですよ。契約は、互いにその理を違えないための予防線といったところです。偉大な百合ハーレム実現のために、使えるものは何でも使おうという、私の考えを責めるというのなら甘んじて受けましょう」

「どうして……そこまでして……」

「いくつか理由はありますが、もっとも共感を得やすいものを示しましょう。私がアキちゃんと持続可能な形でらぶらぶちゅちゅな関係を構築するためです」

「明奈ちゃん？」

「はい。血のつながりというのは強力な絆である一方、恋愛感情に大幅なデバフをかける厄介なシロモノです。いかなるアプローチをしようとも、アキちゃんは実姉である私と愛し合い添い遂げる選択肢は取り得ないとわかりました。ゆえに、“アキちゃんの百合ハーレム”という緩やかながら性愛の入り乱れた楽園を作れば、そのハーレムの1キャラクターとしてならば、アキちゃんと愛を育めると考えたのです」

「でも、それって、明奈ちゃんの1人1人への愛情が薄くなるんじゃないですか?」

「だから?」

「……え?」

「アキちゃんを独占する自信があるなら、そうすればいいじゃないですか。私は経験則と、忌むべきものだとは思っていますが、この世の常識を踏まえて、アキちゃんを独占できないと判断しました。だから実妹を利用して彼女を核とした百合ハーレムを作るつもりです。良いものを皆で少しずつ分け合う。Share happiness! それのどこが悪いんでしょうか? 瑞希ちゃんもそうですし、美波ちゃんや翔子ちゃんにも邪魔させませんよ」

「貴女は、他人の感情が理解できないんですね」

「それは貴女も同じでしょう? 瑞希ちゃん」

柔和な笑顔を見せる玲だが、その声から感情を読み取ることはできない。瑞希は瞑目して息を殺す。自分が望むことは何か。それを邪魔する悪は何者か。かつての瑞希であれば、尊ぶべき明奈からの愛を小分けにして共有するなど考えもしなかつただろう。だが、もう彼女に迷いはない。

「玲さん……貴女は、魔女です」

「ほう?」

「人知を越えた、理解のできない、怪物です」

「なるほど」

「ですが。私は貴女と契約を交わします。すべては明奈ちゃんを中心とした百合ハーレムを実現するため。今日、私は悪魔に魂を売り渡します」

「くふ……ふふふ。あつはつはつは! 素晴らしい! 素晴らしいですよ、瑞希ちゃん! その合理的な判断と底なしの愛情! やはり貴女には素質がある! 百合ハーレムの伝道者としての素質が!」

「そんな伝道者になんかなりませんっ! 私はただ明奈ちゃんのためにつ」

「おっと。自分の欲望を直視せず他責思考なのは、非常によろしくな

いですね。まあ、瑞希ちゃんの願望の行き着く先は百合ハーレムなんですが。自らが信奉すべきものは明確にした方がいいですよ？」

「そんなわけっ……!」

「信じよ。崇めよ。服従せよ」

気づけば、玲の手元から輝く鱗粉のようなものが瑞希に向かってきた。

迂闊にも瑞希は、その光る何かを吸い込んでしまう。

「な、にを……」

「信じることで人は強くなる。崇めることで人は顧みなくなる。服従することで人は安らぎを得る。悩める子羊に我が天使の祝福のあらんことを」

徐々に力を失う体、暗転する意識。淡々と言葉を紡ぐ玲に支えられ、瑞希は幻覚の世界へと飛び立った。

.....

『はい。飼育委員は姫路瑞希さんがいいと思いまーす』

小学四年生になったばかりの学級会で名前を挙げられた、瑞希は思わず身体が硬直してしまった。そんな彼女を嘲笑うかのようにクラスの子供たちは、神田麗華の言葉に同意する。

『私も姫路瑞希さんがいいと思うなー』

『丁度良いよね。地味な係だし』

『地味好きさん、にはピッタリだよねー』

幻覚の少女たちは、あの時に瑞希が投げかけられた言葉を繰り返す。

地味好きな姫路瑞希さん。嘲笑と侮蔑の込められたあだ名に胸が苦しくなる。

『あ、あの……、その……』

『そんな言い方、酷いんじゃない？やめなよ』

『……え？』

『瑞希ちゃんはどうなの？イヤじゃないの？』

『わたし、私っ……』

言え！言ってしまえ！私はイヤですって言うんだ！

そのときから好きだった、愛していた明奈ちゃんの善意を無下にしていけない！

いくら高校生の自分がそう願っても、幻覚の世界の瑞希は蚊の鳴くような声で呟く。

『あ、あの、私、飼育委員やります……』

そうだ。結局、自分は飼育委員をやるって言ってしまったんだ。動物が苦手なのに、クラス中の視線が集まるのが耐えられなくて。ふと、明奈ちゃんの方を見たら、その時の彼女はすごく悲しそうな顔をしていた。まるで私が戦わずに逃げたことに同情するかのごとく。

「今回もそうやって自分を誤魔化すんだ？小学生の時みたいに」

「……明奈ちゃん？」

いつの間にか、カチューシャをつけた栗毛色のロングヘアの少女が前に立っていた。

瑞希の両頬に手を添えると、少女は顔を寄せる。

「瑞希ちゃんはさ。もっと正直になりなよ。魂は本能と理性のブレンド。その割合は他人にとやかく言われるもんじゃないけどさ、瑞希ちゃんの魂は少し窮屈そうだよ」

「魂が、窮屈？」

「でも辛かったよね。せつかくできたお友達の美波ちゃんや翔子ちゃんと恋のライバルになっちゃうなんて。そんな苦しみから解放されるのが、お姉ちゃんの言っていた百合ハーレムなんじゃないかな？」

「私は……まだ百合ハーレムの理想を信じていることができません……」

「どうして？」

「だって、変じやないですか。常識的に考えて」

「変じやない。瑞希はいつだって真っ直ぐで一生懸命で正しいんだよ」

「……本当に？」

「もちろん。瑞希ちゃんのことを見てきたから、私にはわかるよ」

「……うれしい」

でこ同士がついてしまうほどの至近距離で見つめあう2人。

少女の煌めく瞳と慈悲深い言葉に、どこか気恥ずかしさと違和感を

抱いてしまい、瑞希は目をそらす。

だが、少女は言葉が続ける。

「それにね。わがままで欲張りで傲慢で、強欲なのが恋する乙女なんだよ?」

「傲慢で、強欲」

「いいじゃん!みんな仲良しな百合ハーレム!永遠に続く日常を過ごせるんだよ?お互いを愛し合う百合乙女たちから、憎しみや争いなんて生まれないし。まさに樂園じゃないか!」

「……今の日常がずっと続くんですか?百合ハーレムなら」

「その通り!ただ、それを達成するためには瑞希ちゃんが解放されて自由にならないといけないね。自由を手にする鍵はたった一言。『YES』だよ」

「イエス……?」

「認める勇気さ!自分の罪を切り出して腫瘍のように高々と掲げる勇氣!傲慢で強欲という罪を、ね?」

それは罪を消し去る力。それは魂を解き放つ力。
Face Your Insanity.

少女は慈しむように優しくな手つきで瑞希の身体を包み込む。

「馬鹿になれ、とことん馬鹿になれ。恥をかけ、とことん恥をかけ」

幼い子供のように無邪気に歌う。

「かいてかいて恥かいて、裸になったら見えてくる。本当の自分が見えてくる」

可憐な天使のように愛らしく笑う。

「本当の自分も笑ってた。それくらい、バカになれ」

耳元で少女の声が反響する。

瑞希は少女の温もりに包まれながら、安らかに目を閉じた。そうか、間違っていたのは自分だった。常識が作り上げた偽りの己を、自分自身だと勘違いしていた。

信じるべきは、玲と少女が示した理想郷の扉への道、百合ハーレムなのだ。

.....

どれほど時間が経過したのだろうか。気がついたら瑞希は一人だった。

自身を抱きしめてくれた少女は消えてしまった。

「随分小さく遠い存在になりました。コンプレックスの塊だったころの私」

ゆらりと立ち上がり、正気を失った眼でどこか遠くを見つめる。

そして、祈るように胸元で手を重ねて呟いた。

「so, everything that makes me
hole. 今、君に捧げよう」

本当の瑞希は笑っていた。